

史料研究・成果公開

共同利用・共同研究拠点による研究・成果 特定共同研究

〔古代史料領域〕

研究課題 小川八幡神社大般若経の文化資源化研究

研究経費 二二八万七二六〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

研究代表者 山口英男

所内共同研究者 田島 公・尾上陽介・遠藤基郎・藤原重雄・稲田奈津

子・堀川康史・黒須友里江・小塩 慶

所外共同研究者

大橋直義（実践女子大学）・川尻秋生（早稲田大学）・坂

本亮太（和歌山県立博物館）・竹中康彦（和歌山県立博

物館）・傳田伊史（長野市立長野西高校）・西本昌弘（関

西大学）・福島正樹（信州大学）・本郷真紹（立命館大

学）・矢越葉子（明治大学）・李 乃琦（日本学術振興会

外国人特別研究員）

研究の概要

（1）課題の概要

和歌山県紀美野町の小川八幡神社が所蔵する大般若経は、全六〇〇巻（現
状は折本六〇〇帖）が現存し、約一二〇巻の奈良時代写経、約三八〇巻の平
安時代写経を含み、一九七八年に学界に紹介されて以来、古代の文化史・地
域史等に豊かな情報を提供する研究対象として注目され、本格的な研究利用
のための詳細な原本調査が待たれていた史料群である。今般、関係諸方面の
尽力によって環境が整い、本格調査の実施が可能となったことから、小川八

幡大般若経全点の原本調査、赤外線撮影を含めたデジタル写真撮影、既存調
査データの収集・整理等を行い、その成果を公表し学術資源化するととも
に、小川八幡大般若経の成立・変遷・伝来等をめぐる多面的な研究を進展さ
せ、その文化的価値を広く発信することを通じて地域・社会への研究成果還
元をはかるものである。

（2）研究の成果

・撮影した全巻のデジタル写真について、Hi-Cat Plus から巻単位での閲覧
利用を可能とした。

・整理した調査データを整理し、『小川八幡神社大般若経調査概報二〇一九
—二〇二二』に収録公開した。また、研究及び調査結果の概要を同書に収
録した。

〔中世史料領域〕

研究課題 賀茂別雷神社文書の調査・研究

研究経費 二二二万四九六〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

研究代表者

金子 拓

所内共同研究者 遠藤基郎・遠藤珠紀・川本慎自・林 晃弘・石津裕之

所外共同研究者 伊藤真昭・宇野日出生（京都市歴史資料館）・大山喬

平・加瀬直弥（國學院大学）・久留島典子（神奈川大

学）・五島邦治（京都芸術大学）・三光寺由実子（和歌山

大学）・志賀節子・須磨千頼（南山大学名誉教授）・大東

敬明（國學院大学）・高橋敏子・竹田和夫（新潟大学）・

辰田芳雄（就実大学）・谷 徹也（立命館大学）・中川

学（東北大学）・野田泰三（京都橘大学）・藤田恒春（賀

茂別雷神社史料編纂委員会）・三枝暁子（東京大学）・山

本宗尚（一般財団法人リモート・センシング技術センタ
ー）・横井靖仁（関西大学）

研究の概要

（1）課題の概要

これまで史料編纂所では、賀茂別雷神社文書（京都府賀茂別雷神社所蔵）について継続的な調査・撮影をおこない、画像やデータの蓄積とその公開を進めてきた。賀茂別雷神社文書は、近年の京都府による調査で約一四〇〇〇点に整理されたが、史料編纂所ではこのうち四二二二点（二二二五〇コマ）のデジタル化を終えている（二〇二〇年度までのデータ）。

同社文書については、文明八年（一四七六）の賀茂一社争乱といわれる祠官と氏人との争い以前のもは少なく、これ以後、江戸時代前期の寛文五年（一六六五）頃までの文書を非常に多く残している。本研究においては、この期間の文書約八〇〇〇点のうち、中世を中心に調査・撮影をさらに継続し、デジタル化・データベースからの公開（研究資源化）を進めるとともに、これらを用いた賀茂別雷神社、同社の文書、および同社の神事、組織、所領について、また、同社の文書を用いた中近世の政治史、文化史などの研究をおこなう。さらに今期は、有力社司家所蔵文書へも調査を広げて研究を行なう。

（2）研究の成果

今年度は最終年度にあたっていたため、成果報告のための研究会を開催し、また、二冊目の研究成果報告書『続賀茂別雷神社の所領と氏人』を刊行した。また、所内共同研究者および共同研究員が責任編集となって、賀茂別雷神社史料編纂委員会より『賀茂別雷神社史料3 賀茂神主経久記1』を刊行した。

成果報告書は、前冊同様、氏人組織や社領に関する中世および近世の研究、また、賀茂別雷神社を研究するうえで貴重な史料の史料紹介を収めたものであり、時代を問わず多様な関心から賀茂別雷神社文書に関心をもつ研究者が集まったからこそ成果であると考えられる。

さらに、國學院大学博物館特別展「都の神やしろとまつり 賀茂別雷神社の至宝」展（史料編纂所協力、二〇二二年一月二七日～三月二六日）におい

て、研究成果の一部を公開した。

【近世史料領域】

研究課題 史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化

研究経費 二四〇万八二〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

研究代表者 小野 将

所内共同研究者 保谷 徹・杉本史子・箱石 大・水上たかね・立石 了
所外共同研究者 麓 慎一（佛教大学）・岸本 覚（鳥取大学）・谷本晃久
（北海道大学）・白石 烈（宮内庁書陵部）・福元啓介
（尚古集成館）

研究の概要

（1）課題の概要

本所が特殊蒐書として所蔵する維新関係貴重書史料群は、質量ともに国内有数のコレクションでありながら、一部を除き史料学的調査・研究は進展をみていない（デジタルアーカイブ化も未形成）。本研究では対象史料群のうち、維新史料引継本（約二〇〇〇冊）、戦前期の維新史料編纂会が収集した史料群（外務省引継書類（約三〇〇〇冊）、政府から移管された江戸幕府の外国方関係史料）・史談会本（約二〇〇〇冊）、旧華族諸家が複製収集した幕末維新史料群）、また、国宝島津家文書や島津家本のうち、幕末維新関係史料を対象とする。当該時期のそれぞれの地域を専門とする共同研究者を募集し、厳密な史料学的検討を加えつつ、各史料の記述内容を確認して解説目録の作成に着手する。明治維新への社会的関心をも見据えて、本研究の成果を公開し、来たるべきデジタルアーカイブ化に向けての基礎的作業を実施する。

（2）研究の成果

論文ほかにより成果を公開した。白石烈「『朝彦親王日記』補遺―文久二年（一八六二）九月四日条～十月八日条、元治元年（一八六四）十月三日条～十二月十五日条―」（『書陵部紀要』第七三号、二〇二二年三月）は、宮内庁書陵部所蔵の「朝彦親王日記」写本についての翻刻で、紹介の部分（文久二年および元治元年）は初の活字化となる。原本が消失した宮内省編纂事

業による謄写本（臨時帝室編修局本）を底本として、維新史料引継本により校訂しており、価値の高い情報を含む。本共同研究で追究してきた、複数所蔵機関にまたがる写本群の検討結果を反映することができた。また白石烈「孝明天皇宸翰と会津松平家―明治天皇への奉呈前後の背景―」（『福島史学研究』、第一〇〇号、二〇二二年三月）では、維新史料引継本や書陵部所蔵の編纂史料を活用することで孝明天皇宸翰の取扱いを検証し、幕末・明治の会津藩および藩主松平家の動向を解明することができた。

谷本晃久「蝦夷通詞とアイヌ語地名」（北海道博物館編『北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」連続講座・特別フォーラム講演記録』、同館、二〇二二年九月）は、維新史料引継本所収の画像史料を活用したもので、当該史料は「蝦夷通詞」を明確に表示する画像として貴重なものと評価できる。国立歴史民俗博物館における企画展「学びの歴史像―わたりあう近代―」で展示されるなど、北方史・アイヌ史の貴重な素材となった。なお関連して、麓研究員による谷本晃久『近世蝦夷地在地社会の研究』（山川出版社、二〇二〇年）についての書評も、『新しい歴史学のために』二九八号（二〇二二年六月）に掲載された。

【海外史料領域】

研究課題 モンズーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書

の分野横断的研究

研究経費 三四六万円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

研究代表者 松方冬子

所内共同研究者 岡美穂子・岡本 真・大東敬典・水上たかね

所外共同研究者 大久保健晴（慶応義塾大学）・川西孝男（関西学院大

学）・久礼克季（川村学園女子大学）・イサベル・田中・ファンダーレン・富田 暁（岡山大学）・中砂明徳（京都大学）・鍋本由徳（日本大学）・野澤丈二（帝京大学・准教授）・橋本武久（京都産業大学）・真下裕之（神戸大学）

研究の概要

（一）課題の概要

本研究では、エスタード・ダ・インディア、イエズス会、オランダ東インド会社（VOC）、イギリス東インド会社（EIC）という、広域的で非（あるいは半）国家的な組織の、おもに一七世紀に本部とアジア拠点間で取り交わされた情報について、内容だけでなく、史料学的な観点からも、多角的な検討を加える。従来、南欧語史料・オランダ語・英語史料はそれぞれ別々の研究者によって担われてきた。しかし、近年、双方を視野に入れた研究がはじめている。こうした状況をふまえ、本研究は、共通のテーマについて専門を異にする研究者が密接な討論を行うことにより、そのような方向性を一層推し進める。

現在グローバル化する世界の中で歴史学のあり方にも変化が求められているが、海外の動向の安直な輸入や評価への対応としてではなく、日本史学の内在的發展とその成果に基づき、今まで蓄積されてきた学知のつなげ方を刷新することによって、国際的な貢献を模索する。同時に、世界的な要請でもある厳密な史料読解に基づく研究を担える次世代の育成も目指す。

（二）研究の成果

二〇二二年度は二回の主催研究会を開催し、会計史、東洋史、日本史、政治思想史、オランダ史など、学際的な討議を行うとともに、オランダ東インド会社史を専門とする海外の研究者との交流を深めた。また、本所による日本関係海外史料蒐集事業を総括する講演会を主催し、その成果と今後の課題を確認した。また、オランダ語史料の入門書を『オランダ語史料入門―日本史を複眼的にみるために―』として出版し、デイオゴ・デ・コト著『アジアのデカダ集 *Décadas da Asia*』、『蘭領東インド会社外交文書集 *Corpus diplomaticum Neerlandico-Indicum*』の翻訳成果を本所研究紀要に掲載した。

【複合史料領域】

研究課題 東アジアの合戦図の比較研究

研究経費 二三八万五〇〇〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

研究代表者

須田牧子

所内共同研究者 藤原重雄・金子 拓・黒嶋 敏・畑山周平・及川 亘・

林 晃弘・岡本 真

所外共同研究者 板倉聖哲（東京大学）・井上泰至（防衛大学校）・鹿毛敏

夫（名古屋学院大学）・高橋 修（茨城大学）・高山英朗

（福岡市博物館）・堀 新（共立女子大学）・堀 智博

（東京都立大学）・山崎 岳（奈良大学）・山田貴司（福

岡大学）

研究の概要

（1）課題の概要

一六世紀から一七世紀にかけて、大規模戦争や王朝交替を経験した東アジア諸国では、社会が混沌から安定に向かう過程で、戦争の記憶を視覚化する様々な画像作品が製作された。日本では一六世紀後半期における川中島の戦い・長篠の戦い・関ヶ原の戦い・大坂の陣などを題材にした合戦絵巻・合戦図屏風などが作成され、中国大陸・朝鮮半島においても、嘉靖倭寇・壬辰丁酉倭乱を題材にした戦勲図・武功図が作成されたことが知られている。戦勲・武功を顕彰するための合戦図の作成流行は一六世紀～一七世紀の東アジア三国に共通する動向であったとも言えるかも知れない。こうした可能性を念頭に置き、本研究では一六～一七世紀を中心とした、東アジアの合戦図制作の動向のラフスケッチを試み、その展開・受容過程の共通性と差異の抽出を試みる。比較の視点を持つことで、これまで積み重ねられてきた倭寇図像研究・戦国合戦図研究に新たな切り口が生まれることが期待される。

（2）研究の成果

本共同研究の検討対象の一つである蔚山合戦図屏風については、高精細スキャンニングを行なって今後の研究基盤を整えるとともに、同系統の諸作品との比較検討、描き込まれた意匠の読み解き、関連史料の探索など、いくつかの切り口から手分けして分析を進めており、この成果については、関係諸機関と調整しつつ準備の整ったものを公表する予定である。

このほかの二〇一九年度から二〇二〇年度にかけて共同研究メンバーが進めた研究活動については、各自で著書・論文などにより発表を進めており、その

一部に、井上泰至編『資料論がひらく軍記・合戦図の世界』（アジア遊学二六二）、勉誠出版、二〇二二年一〇月）、井上泰至「戦国合戦図屏風と軍記」（中根千絵・薄田大輔編『合戦図 描かれた（武）』勉誠出版、二〇二二年一月）がある。

また、『倭寇図巻』にかかる成果については、「倭寇図巻デジタルアーカイブ」として本所HPで公開し、いくつかの研究會・広報などを通じて、その内容について報告した。

一般共同研究

研究課題 幕末維新期における民衆生活の改変と信心の歴史的転回に関する

調査・研究

研究経費 五六万四〇三九円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

研究代表者 奈倉哲三（跡見学園女子大学名誉教授、以下A）

所内共同研究者 石津裕之・杉本史子・箱石 大

所外共同研究者 小田真裕（船橋市郷土資料館、以下B）・児玉憲治（千

葉県文書館、以下C）・千葉菜耶（野村胡堂・あらえび

す記念館、以下D）・斎藤悦正（本郷中学校・高等学校、以下E）・芹口真結子（岐阜大学地域科学部、以下

F）・清水有子（明治大学文学部、以下G）

研究の概要

（1）課題の概要

近世の民衆は各地の日常的な生活のなかに「信心行為」を抱え込んでいた。幕末期において、その信心は社会変動の一環として大きく歴史的に転回する。その転回は、維新期においては権力的な改変によるものも大きい。民衆自身が自らの生活を改変していかうとする苦闘のなかで、信心を転回していく動きとしても生まれていた。従来、「幕末民衆宗教の誕生」といった括りでは捉えられていたこの歴史事象を、ごく普通の生活を営む民衆が地域生活を改変させるなかで、信心をも転回させていた現象として、史料から解

明する課題が本共同研究の根底にある。この根底の課題を果たすには、各地の多様な信仰の実態を、地域生活が具体的に判る史料とともに解明することが必須である。本共同研究の直接的な課題は、この根底の課題に寄与し得る史料が、どの地域にどのように存在しているかを目録の状態を含めて具に調査したうえで、その史料研究成果を社会に発信することにある。

(2) 研究の成果

A・安政六年、多摩川堤防決壊による九カ村用水冠水に対し、用水普請でも今回の用水普請は公儀普請とすべしと要求する拜島・柴崎九カ村の地域共同体の力が解明された。普濟寺文書中、文久二年の雨安居に関する冊子六冊から、普濟寺での「雨乞祈禱」の内容が詳細に判明した。長沼家文書中、遊行上人御用日記から、藤沢遊行寺での調査が新たな課題となった。小川家文書一〇三六点の仮目録を作成する準備が整った。

B・平田篤胤門人の宮負定雄・大原幽学門人の椎名旋蔵と縁戚関係を有する金杉佐久治家文書中に嘉永年間の気吹舎出版物を確認。また、開披不能文書を業者委託で開披し、地域における大原幽学門人の実践がわかる史料を翻刻し、記念館に提供した。

C・下奈良・中奈良両村が所属する奈良堰用水組合の基礎的な事実関係が判明した。飯塚家が名主を勤める下奈良村依田氏知行所で費用の立て替えや割付などを通じ、用水組合のなかで下奈良・中奈良両村の関係が判明してきた。また中奈良村に限れば、用水利用の前提となる土地所有関係が時系列的に再現できる可能性も出てきた。

D・旧修験宮崎家所蔵資料には、近世だけでなく、明治・大正期の史料も多数含まれている。特に宮崎求馬は明治以降、紫波郡内一四社の社掌も務め、常駐神職のいない小規模神社や地域住民が管理する村社の動向が窺われる。

E・村内百姓の菩提寺は曹洞宗長林寺一か寺のみという特色。宗門改帳・過去帳・施餓鬼過去帳・祠堂金借用証文などから、家格が反映される戒名や施餓鬼寄付などを検討していく。

F・東本願寺家臣粟津家「粟津日記」は慶応元年～慶応四年までの記事が収録。粟津家に奉公する下男下女の奉公記事には出身国・檀那寺記載があり、北陸や美濃国などからも百姓身分の者が奉公に出ていることが判明。檀

那寺宗旨も東本願寺だけに限らず、浄土宗など他宗派も確認できた。東京大学史料編纂所貴重書「修史局雑綴」は修史局からの教部省組織に関する問い合わせへの回答を記したものの。

G・東京大学史料編纂所所蔵貴重書から、幕末の浦上キリシタンに関する文書を選定、「外務省引継書類」四点、「維新史料引継本」一点の撮影を業者委託した。長崎純心大学博物館所蔵キリシタン関係史料のうち、浦上潜伏キリシタンに関連の書付・書状・オラシヨ本などを撮影。長崎歴史文化博物館所蔵史料のうち、浦上村山里庄屋高谷家関係史料のほか、安政四年・万延元年・慶応三年の長崎奉行所の御用留、浦上崩れ時に長崎奉行所が作成した調書などを調査。安政年間の「口上書」には「物真似手踊り」願の写が多数含まれ、史料分析を進めた。

上記調査活動について、各人は毎回「調査概要報告書」を全員に報告、認識を共有し、活発に意見交換した。特にAとCは用水組合下流村落による指導権と責任について議論。Dが進めている目録作成については、A・B・Cが具体的な提言をおこなうなど、援助・協力体制を組んだ。またEの曹洞宗寺院と村落、Fの粟津家奉公人問題、Gの浦上キリシタン地域での安政期の「手踊り史料」などについて、それぞれAと意見交換するなどして、地域と信心問題を共同で深めてきた。

研究課題 和歌山平野を中心とした地域所在中世史料の調査・研究

研究経費 四〇万円

研究組織

研究代表者 坂本亮太（和歌山県立博物館）

所内共同研究者 末柄 豊・村井祐樹・小瀬玄士

所外共同研究者 小橋勇介（和歌山市立博物館）・砂川佳子（和歌山県立文書館）

研究の概要

(1) 課題の概要

和歌山県における中世史料は、『和歌山県史』の刊行により、その全貌がほぼ明らかになっている。また、本研究で対象とする和歌山平野域（主に和

歌山市)については、『県史』刊行後、『和歌山市史』が刊行され、『県史』未収録の史料群も『市史』により把握されている。ただし、当時においても種々の事情により十全な調査・発掘が行われたものではなく、存在は把握しているながらも点数が少ないという理由で採録しなかったものや、原本調査に至らず、史料編纂所架蔵影写本に拠らざるを得なかったものも多数あった。さらに、刊行から既に四〇年以上が経過し、その間に新たに発見された史料も少なくない。

以上の様な状況の中で、昨年度は、新出林文書のみならず向井文書・歿喜寺文書などの既知の文書の再調査を行った。引き続き本年度も、明治・大正期に作成された影写本や、昭和以降に撮影された写真帳等、豊富な複本類を持つ史料編纂所と共同することで、当該地域所在史料の調査・研究を行いたい。

(2) 研究の成果

以下、調査・撮影を行った史料を挙げる。

王子神社文書(和歌山県立博物館寄託)／岡文書(同上)／柏原文書(同上)／熊野速玉大社文書(同上)／繪旨・院宣(高野山金剛峯寺所蔵)

以上の内、柏原(かせばら)文書は『和歌山県史 中世史料一』には「西光寺文書」として収録され、本所写真帳では「柏原区有文書」(六一七一・六六一一六)として配架されている。また、「繪旨・院宣」は新出で、宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集外の金剛峯寺所蔵文書であるが、慎重な検討が必要と考えられる。いずれも今後の和歌山中世史研究における活用が望まれる。

研究課題 中世大和国宇智郡関連史料の研究資源化 栄山寺を中心に

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 下村周太郎(早稲田大学)

所内共同研究者 菊地大樹・尾上陽介・木下竜馬

所外共同研究者 高木徳郎(早稲田大学)・佐藤亜聖(滋賀県立大学)・山崎竜洋(五條市教育委員会文化財課文化財保存係)

研究の概要

(1) 課題の概要

大和国宇智郡(現・奈良県五條市)は、大和国の南半分を占める吉野郡と河内国および紀伊国と境を接する「国境地帯」であり、大和街道(古代下ツ道)と吉野川とが交わる交通の要衝ともなっている。平安期は興福寺の影響下にあったが、中世になると高野山(真言宗)や葛城山(修験道)など多様な宗教的要素が入り込んでくる。また、南北朝期には南朝の、室町期には河内守護畠山氏(いわゆる分郡守護)の支配を受け、戦国期には国人や地侍による「惣郡」の一揆が結ばれたことでも知られている。

上記のように宗教的・社会的にも政治的・軍事的にも特色あるフィールドとなっている中世宇智郡関係史料の研究資源化のため、特に栄山寺を調査対象とする。藤原武智麻呂の創建と伝えられる栄山寺は、奈良時代に遡る全国的にも屈指の古刹であり、古代以来の古文書や金石文を伝えている。しかし、現在は文書の所蔵先が分散していることもあって、史料群の全体像を完全に把握するには至っていない。こうしたことから、栄山寺の金石文や古文書諸写本、栄山寺文書以外の同寺関連史料などの調査を軸に、宇智郡関連史料の研究資源化に取り組む。

(2) 研究の成果

栄山寺の中世石造物は戦前から存在が知られており、史料編纂所には紀年銘のある一石五輪塔の拓本が架蔵されている。戦後にも『五條市史』において調査報告がなされており、その内容はおおむね一致するが、後者には一部新出史料も含まれていた。その後は調査が実施されておらず、無紀年銘五輪塔を含む五輪塔群の全貌や現状について悉皆的な調査が望まれていた。

昨年度に引き続き今年度の調査により、一石五輪塔群の現状を全面的に把握することができた。戦前以来、逸失したものはわずかであり、同五輪塔群全体の保存状態が比較的良好であることが確認された。また、過去になされた調査はおもに紀年銘が完全に残っているものを対象としていたことが分かったが、今回の調査を通じて、干支のみあるいは人名のみの銘文をあらたに多数見出すことができ、これらについても網羅的に拓本の採取を実施した。

今年度は、一石五輪塔に加えて、重要文化財に指定されている弘安七年銘

の石灯笼や、従来未調査であった永祿八年銘の石造地藏菩薩像についても調査を行うことができた。石灯笼の銘文については、火袋の左右にある種子(梵字)も拓本を採取することができ、これが「ウン・バイ(愛染カ・薬師)」であることを確認できた。現在の栄山寺の本堂と本尊は、室町期に建立・造立された薬師堂と薬師如来であるが、かかる信仰が鎌倉時代にさかのぼる可能性が想定できる。文書史料が極めて乏しい鎌倉時代の栄山寺を考える上で貴重な史料と言える。また、石造地藏菩薩像については、新出の史料であり注目される。複数の僧侶の名が刻まれているが、このうち「英秀」なる人物は、永祿四年の文書史料に「一藤」としてその名が見える。

今回の共同研究によって栄山寺の石造物を悉皆的に調査することができ、銘文の分析から地藏菩薩像や一石五輪塔が寺内の上層の僧侶によって造立されていたことを明らかにできた。栄山寺の寺内組織や信仰のあり方などを考える貴重な素材を得られたと言えよう。

研究課題 承久の乱関係史料の基礎的研究

研究経費 六六万七五〇円(前年度よりの繰越分を含む)

研究組織

研究代表者 長村祥知(京都府京都文化博物館〈五月まで〉、富山大

学〈六月より〉)

所内共同研究者 木下竜馬・藤原重雄・堀川康史

所外共同研究者 梅沢 恵(神奈川県立金沢文庫)・小倉嘉夫(大阪青山

歴史文学博物館)・西谷 功(泉涌寺宝物館心照殿)・貫

井裕恵(神奈川県立金沢文庫)・山岡 瞳(京都府立大

学)・渡邊浩貴(神奈川県立歴史博物館)

研究の概要

(1) 課題の概要

承久の乱とは、承久三年(一二二二)五月、後鳥羽院が鎌倉幕府執権北条義時の追討を命じるも、上洛した鎌倉方武士に京方武士が合戦で敗北し、後鳥羽を含む三人の上皇が遠方に流された事件である。その研究は長く停滞していたが、近年になって研究書や新書が相次いで刊行されるなど、社会の

関心も高まりつつある。

本研究課題では、この承久の乱に関する史料を幅広く調査した同題の昨年度共同研究の成果を公表するとともに、さらなる原本調査を進め、いくつかの史料については詳細な調査成果の公表を計画する。

かつて承久の乱研究が停滞していた一因は関連史料が限られていたことにあった。その数少ない史料も、『大日本史料』や『大日本古文書』といった先駆的な翻刻に依拠してきたため、かえって史料の原本に即した研究が十分ではない。承久の乱研究を中核として、今後の関連諸課題の基礎となるための、個々の史料に即した研究資源化を進めたい。

(2) 研究の成果

本課題の共同研究員の専門分野は、日本中世の政治史・法制史・宗教史・対外交流史・文学史・絵画史や日本近世の文学史といった諸分野にまたがる。その強みを活かして、古文書・古記録のみならず、古典籍・聖教・絵巻といった様々な歴史的諸史料の原本・実物の調査を進め、後鳥羽院と鎌倉幕府、承久の乱について政治・社会・文化など多角的な視角から検討を加えた。

また感染症の広まりを注視して当初予定を柔軟に見直し、一部の史料については出張の代替として画像データを入手した。

主要な成果として、以下の点が挙げられる。

- ・仁和寺が所蔵する日次記について、調査を進めた。
- ・金沢文庫所蔵・管理(称名寺所蔵)史料の画像データおよび明治大学所蔵史料の画像データを入手した。これらのデータは、所蔵機関の許可条件を遵守して今後の研究にも利用する。
- ・一九三九年に恩賜京都博物館(現京都国立博物館)で展示された後、所在不明となっていた「承久記絵巻」全六巻(個人蔵。二〇二一年六月からは寄贈により龍光院蔵〈高野山霊宝館寄託〉)の写真版による調査を進めた。

研究課題 松尾大社所蔵史料の研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 角田朋彦(駒澤大学)

所内共同研究者 畑山周平・山田太造・高島晶彦

所外共同研究者 佐々木創（京都芸術大学）・坪井 剛（佛教大学）・西山

剛（京都文化博物館）・野村朋弘（京都芸術大学）

研究の概要

（1）課題の概要

本研究では、松尾大社が所蔵する史料群について調査・研究を進め、研究資源化するものである。松尾大社は鴨社とともに山城国の重要な神社として位置づけられ、古代から近代に至るまで豊富な史料を有している。目録・整理されている文書群の他、未整理・新出のものも含め二〇〇〇点を超す史料が所蔵されていることが確認できている。史料編纂所では戦前及び戦後の早い時期に史料採訪を実施しているものの、未整理・新出史料については撮影・調査されていないものがある。本研究では、これらの全体像を明らかにしつつ、未整理史料を中心に調査・撮影・目録作成を行い、研究資源化を進めたい。松尾大社所蔵史料が研究資源として公開されることにより、二十二社体制の具体的な様相はもとより、東寺や地藏院、革島家との相論など中世の洛西の姿も解明することができよう。

また松尾大社所蔵史料は各時代で豊富な史料を有している。料紙の科学的調査のデータ収集対象としても貴重である。それらの基礎的な情報を学界共有の財産として公開していく。

（2）研究の成果

新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって調査が危ぶまれたが、幸いにして松尾大社の御厚意によって二度調査・撮影を実施することができた。

二〇一九～二〇二〇年度に実施された一般共同研究「松尾大社所蔵史料の調査・研究」（代表：野村朋弘）に引き続き、他の一般共同研究「中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史の変遷の研究」（代表：天野真志）と連携し、新出史料の撮影や光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いた料紙の調査・研究、目録整備を実施した。

二〇二〇年度に史料一卷（二号文書）一一号文書を収録）を史料編纂所に借用し、修補と調査を実施し、返却を行った。この調査によって一九五〇年代の成巻状況などを把握することが出来た。また更に史料一卷（八九～九

七号を収録）を二〇二一年度に借用し修補と調査を実施し、二〇二二年度に返却予定である。なお、借用にあたっての損害保険料を、共同研究費（その他）から支出した。

こうした調査・分析によって、既に整備されていた目録の校訂作業と、前近代における伝来の在り方についての知見を得ることが出来た。

なお調査・分析した総てのデータを史料編纂所が進める人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業の一環として公開するため、史料編纂所と松尾大社とで覚書の締結を行った。

研究課題 九州所在中世禅宗関係史料の調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 榎本 涉（国際日本文化研究センター）

所内共同研究者 川本慎自・小瀬玄士

所外共同研究者 藤田励夫（文化庁）・佐藤健治（文化庁）・岡村一幸（文化庁）

研究の概要

（1）課題の概要

九州は大陸との地理的な関係もあつて、多くの禅宗古刹が残されており、中世史料を始めとする貴重な史料を所蔵するところも少なくない。本研究においては、こうした九州に所在する禅宗関係史料を調査・撮影し、そのデジタル化を推進することで研究の進展に寄与することを図るものである。昨今のコロナ禍により、残念ながら頻繁な現地調査は難しさの度を増しており、史料の高度なデジタル化による閲覧の便宜性向上は喫緊の課題である。なお禅宗史料においては、古文書だけではなく、行状や語録といった禅僧個人の記録、僧伝も多く作成されているが、こうした史料については史料編纂所においても、十分に撮影データが揃えられていない実情もある。古文書にとどまらない中世禅宗関係史料を広く採訪し、デジタル撮影による研究資源化を実現し、研究の進展に寄与したい。

（2）研究の成果

新型コロナウイルス感染症の影響により、当初の計画から変更を余儀なくされる部分もあったが、鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵史料の調査・撮影、および大慈寺所蔵史料の調査・撮影を実施することができた。黎明館においては、文之玄昌関係史料や、島津家関係禅宗寺院史料の調査・撮影を行った。また大慈寺においては、同寺所蔵史料について、撮影のみならず、共同研究員の知見を踏まえた総合的な目録作成を行った。その結果、南北朝期に大慈寺開山となった玉山玄提関係史料や、その弟子で、東福寺に大蔵経を納入した剛中玄柔関係史料をはじめとして、同寺に伝わる貴重な史料のデジタル画像データと詳細な目録を作成することができた。なかでも剛中が将来した大蔵経の一部とみられる宋版大般若経や元版大般若経について詳細なデータが得られたほか、文書についても料紙をはじめとして、原本からしか得られないデータを、共同研究員の知見によって得ることができた。

研究課題 中世におけるトカラ・奄美・琉球関係史料の学際的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 村木二郎（国立歴史民俗博物館）

所内共同研究者 黒嶋 敏

所外共同研究者 荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・田中大喜（国立歴史民俗博物館）・鈴木康之（県立広島大学）・池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）

研究の概要

(1) 課題の概要

九州島と沖縄島に挟まれたトカラ・奄美の島々は、中世を通じて独特の歴史を有する境界領域であった。中世前半は日本の最西端と位置付けられ、九州の勢力の影響を受けた。一四世紀後半以降は、明の冊封を受けた琉球が勢力を拡大して周辺諸島を軍事的に侵攻したため、奄美はその領域内に併呑され、トカラは日本と琉球に両属するような様相を呈する。

ただし、石上英一編『奄美諸島編年史料』のような網羅的な史料蒐集が行われたにもかかわらず同時代の文献史料は限定的であり、未解明な部分が多

だまだ多い。しかし近年、喜界島などで中世集落遺跡が相次いで発掘調査されるようになり、遺跡の消長や陶磁器の流通を追うことで、考古学的に解明することが可能となりつつある。

そこで本研究では、中世のトカラ・奄美にフィールドを設定し、日本・琉球が及ぼした影響について、考古学・文献史学それぞれの視点から学際的に検討を進めていく。考古学の研究者は現地調査を主とした集落遺跡の検討を、文献史学の研究者は史料編纂所が所蔵する関連資料の原本調査と高精細デジタル撮影を主とした比較・解析を実施する。そして双方の研究成果をもとに議論し、成果を公開して「史資料の研究資源化」を行う。

(2) 研究の成果

史料編纂所所蔵島津家文書の①嘉禄三年藤原頼経袖判下文、②延文元年足利義詮袖判下文、③貞治二年島津道鑑議状案を、鹿児島県出水郡長島町在住の個人所蔵資料である千電文書とあわせることで、中世のトカラ（五島・七島）・喜界島や奄美大島を含めた南西諸島に関する文献史料による情報を整理した。ここから南九州の武士団が奄美を含めた領域をどのように認識していたかがわかる。さらに近年の発掘調査によって著しい成果を挙げつつある奄美地域の考古学的成果として、喜界島城久遺跡群大ウフ遺跡、同手久津久遺跡群中増遺跡、与論島与論城跡出土の陶磁器データと比較した。これらの遺跡は集落遺跡であり、陶磁器の分析によって集落の消長がわかる。その結果からは、一三〜一四世紀代の南九州の武士団による影響と、一五世紀中頃の琉球による影響とは、在地に与えたインパクトは著しく異なるということがわかった。すなわち、前者からは集落遺跡における変化は見られず、文献史料に書かれた事実は専ら表面的な現象であった。それに対して後者は集落を改変、消滅させるにいたる地域社会を根本的に変える事態であった。文献史学の研究者と考古学の研究者が同じ対象を見据えて取り組んだことから導いた成果であり、今後のさらなる学際的研究を促すものである。

しかし、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴う研究活動の停滞と行動制限のなかで、調査先が医療資源に乏しい島嶼部であるため、当初予定していた調査を完遂することができなかった。そのため研究費三四万四七四〇円は返金することとした。

研究課題 静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 浦木賢治（静嘉堂文庫美術館）

所内共同研究者 山口英男・稲田奈津子

所外共同研究者 吉田恵理（静嘉堂文庫美術館）・市川理恵（駒沢女子大学）

研究の概要

（1）課題の概要

（公財）静嘉堂が所蔵する文化財は、明治期から昭和戦前期に三菱創業家の岩崎彌之助（三菱第二代社長、一八五一―一九〇八）、小彌太（三菱第四代社長、一八七九―一九四五）父子により蒐集されたコレクションである。そのなかには、明治期の廃仏毀釈により寺院等から市場へ流れたと考えられる、奈良時代以降に調達されたいわゆる「五月一日経」「善光朱印経」などの古写経群が所蔵されている。これらは近代に形成された財閥系の古写経コレクションの一つとして、貴重な古写経群といえる。しかし、その公開は静嘉堂文庫美術館での展覧等に留まり、撮影も充分ではない。本研究では、古写経群の調査、経典全紙のデジタル写真撮影を行い、経典としての基本情報（紙数、界線の幅、罫高等）の収集・整理、経典の特定、料紙基本データ（縦横寸法、厚さ、密度、簀・糸目幅、填料の有無等）の収集・整理等を行い、研究資源化を図る。その成果を目録化し公表することで、古写経研究や料紙研究等に寄与することを企図する。

（2）研究の成果

静嘉堂所蔵古写経群は美術館と書庫の二ヶ所に分蔵され、これまでその全容は紹介されていなかった。古写経の巻頭から巻末まで全体を撮影されることもなく、そのため古写経研究への貢献も限定的な状況であった。

このたびの共同研究で、古写経群の全容を把握し、これまで未調査であった写経の基本調査も行い目録を作成した。未公開の経典も含め、古代から近世にいたる写経を巻頭から巻末まで高解像度デジタル撮影（全九一五カット）を行い、今後、閲覧に供することを計画している。

共同研究の過程では、「善光朱印経」と「五月一日経」の本文を比較した市川理恵氏の論考が刊行された。この論考では本文全文の詳細な比較検討により新知見を導き出す研究であるが、対象となる古写経の全容を調査・撮影したからこそ結実した研究ともいえる。また静嘉堂が所蔵する「楞伽経」と他館が所蔵する「楞伽経」の関係性についても考察をすすめており、古写経の本文や界幅などの仕様が明確になったからこそ、他館の古写経との異同を検討することができた。また、このたびのデジタル撮影では付属の箱書も対象としており、そこから幕末維新期に活躍した好古家・松浦武四郎が所蔵した古写経が静嘉堂所蔵古写経群に含まれていることが明らかとなった。今後、これらの成果を論文等にまとめて公開する予定である。

研究課題 東大寺文書の近世・近代

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 森 哲也（九州大学）

所内共同研究者 遠藤基郎

所外共同研究者 坂東俊彦（東大寺史研究所）・三輪真嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（1）課題の概要

本研究課題は、個別文書の活用に際しては、現在に至るまでの文書群の形成、伝来の過程を踏まえておく必要があるとの観点に立ち、東大寺文書（東大寺南院文書を含む）を対象として、現状の成立に深く関わる近世・近代の様相を把握しようとするものである。具体的には、史料探訪側（近世では水戸徳川家、加賀前田家等）が作成した点検記録と、東大寺側の記録（『東大寺執行所日記』等）とを照合することで、具体的な探訪過程、書写された文書・典籍を確認する。合わせて各院家・組織の変遷を踏まえながら、現状の成立過程、所属した文書群等を明らかにするための基礎的考察を行う。また、寺外所在の東大寺文書に関し、伝来に関わった人物の関係史料、状況を記す陳述史料、東大寺内の記録等を分析することにより、寺外流出の事情・背景、

伝来過程等を解明する。その成果を公開することで、必ずしも当該分野に関心が高いとは思われない近現代史研究者の注意をも喚起し、未知あるいは現藏者不明の文書に関して、所在や関係史料等の情報提供につながるようにする。

(2) 研究の成果

まず研究会における報告を中心に述べる。森報告は、天和元(一六八一)年の水戸徳川家、加賀前田家による東大寺への史料探訪の過程と、その際に調査、書写された文書・典籍を具体的に比定するもので、当該期における東大寺文書の状況を考える基礎的考察と位置付けられる。これに関して、坂東研究員から加賀前田家の史料探訪に関わる史料が奈良大学に所蔵されている旨の情報が示されたので、二〇二二年度に調査を予定している。江戸期に実施された称名寺への史料探訪を対象とする三輪報告によると、東大寺と同じ探訪主体の事例も確認され、探訪事業の性格・意図を考える上で重要な手がかりとなる。坂東報告は、『東大寺要録』写本の調査・分析を通じて、典籍・文書の状況と近世東南院の歴史との関係を考察し、遠藤報告は、近世近代における東大寺文書の調査・整理の歩みを確認した上で、個々の特徴、関心の変化を指摘するとともに、現状成立過程への見通しを示す内容であり、これらの成果を踏まえながら、二〇二二年度の研究を進めてゆく予定である。

国立公文書館(内閣文庫)所蔵の東大寺文書に関わる小原竹香(正棟)の事績を知るため、津山郷土博物館所蔵の史料を調査した。東大寺との直接の関係を示す史料は見出せなかったものの、彼の人的交流など東大寺文書流出の背景を探る手がかりとして、今後も参照する余地が残っている。活字化された古書籍関係史料から、東大寺文書、奈良の文化財等に関連する記載を抽出したが、これは近・現代における東大寺文書の寺外流出、その後の伝来を探る上で手がかりとなるものである。

研究課題 中・近世畿内寺院史料の調査・研究と研究資源化―大和元興寺お

よび和泉池辺家史料を中心とする―

研究経費

八四万二五〇〇円(前年度よりの繰越分を含む)

研究組織

研究代表者 服部光真(元興寺文化財研究所)

所内共同研究者 藤原重雄・遠藤基郎

所外共同研究者 三宅徹誠(元興寺文化財研究所)・阿部泰郎(龍谷大

学)・森下 徹(和泉市教育委員会)・澤井廣次(天理大

学附属天理図書館)

研究の概要

(1) 課題の概要

有力な寺社が集まる畿内では、今なお多くの中世史料が未調査・未紹介のままとなっている。日本仏教の一大拠点であり、寺院を核として形成された各地域社会や歴史都市を抱える畿内の中世宗教史研究の進展には中小寺院を含めた史料の研究資源化が不可欠である。

本研究では、中小規模寺院を中心に大和・和泉の中世史料の再調査および過去の調査成果の精査による研究資源化を行う。具体的には元興寺文化財研究所と史料編纂所の蓄積を照合し、中小規模寺院の中世史料の所在データの情報化および画像のデジタル化を行い、研究資源化を図る。また個別的には「庶民信仰資料」としての性格を付与されて資料化された元興寺、一〇世紀に遡る『修善講式』を核とする池辺家史料について、周辺史料を含めた再調査を行い、近年の寺院史料論・宗教テクスト研究の成果を踏まえて史料学的研究を深化させることで、寺院史料・宗教史料の再調査による資料化の具体的実践例として成果を提示する。

※二〇二〇年度繰越の研究課題と一体的に実施した。

(2) 研究の成果

念仏寺文書は近世初頭から近代までの五三〇点を調査して文書群の全体像を把握するとともに、近世都市社会における浄土宗寺院の様相を具体的に捉えることが可能となった。般若寺文書・池辺家史料については、中世前期までの史料を核としつつも、中世後期から近世にかけての周辺史料をも合わせて対象とすることで、史料群としての伝来や機能、宗教テクスト遺産としての位置付けを検討することができた。これらに関わる個々の史料の個別的な検討を論考としてまとめ、すでに下記成果物も公表している。また、念仏寺文書の袋中良定関係史料、文久修陵関係史料などについては、史料編纂所採

訪による他機関等所蔵の史料を参照・比較することにより、その位置づけや史料の価値を検討できた。

感染症拡大下を考慮し、元興寺所蔵史料の撮影は、点数が多く状態も多様なため、現状の確認と方針の検討を行い、目録と対照させながら二・三年かけて撮影するのが適当と判断し、下準備の作業を進めた。別途、近く実施したい。あわせて、元興寺文化財研究所による過去の調査資料類を一部通覧して、関連寺社の史料調査状況から、史料編纂所による採訪調査の及ばない範囲を多く確認した。元興寺所蔵の印仏についても、修補で台紙貼りとなる以前の紙背を撮影したフィルムなどを把握している。今後も継続的に、相互補完となるよう個別の所蔵先について丁寧な解決してゆきたい。

研究課題 修理の知見を踏まえた中世真言密教聖教・紙背文書の史料学的分析―灌頂記を中心に―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 三輪真嗣(神奈川県立金沢文庫)

所内共同研究者 藤原重雄・堀川康史

所外共同研究者 稲穂将士(京都府立丹後郷土資料館)

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究では、学界未紹介の中世真言密教聖教の翻刻と分析、画像公開を行う。対象史料は東京大学史料編纂所が所蔵する南北朝期の伝法灌頂記「桂宮院伝法灌頂記」と「薄草紙口決」断簡である。前者は他写本に乏しい未紹介史料で、丹後国の軍事情勢に関わる紙背文書が含まれる。後者は金沢文庫外の「薄草紙口決」と形態が類似しており、比較の結果次第では称名寺聖教との関係も解明し得る。本研究では両史料を翻刻した上で、内容理解に資する関連史料や比較に適した史料の調査・採訪を行い、成立過程・内容を分析し、課題を作成する。

本研究では、上記の作業に加えて、対象史料の修理を行い、その過程で料紙に関する現時点での標準的データを採取し、料紙研究の視角からも分析を

加える。修補紙のない状態で釈文を校正するとともに、貼紙・錯簡などの原形態を検討し、史料の生成・伝来過程を探る。

以上の作業を経て、登録・閲覧可能な状態として修理を終え、画像のWeb公開および翻刻・解題を発表する。

(2) 研究の成果

本研究では、学界未紹介の中世真言密教聖教の翻刻と分析を行った。

『延文五年桂宮院伝法灌頂私記』に関しては、修理時や料紙分析等の知見をもとに錯簡を正したうえで、聖教面については寺院史を専門とする三輪が、紙背文書については室町幕府政治史を専門とする堀川が分析を進め、藤原が助言を加えた。検討の結果、本史料は真言密教寺院と律院との間わりや、真言僧と律僧が共同で行った伝法灌頂の様子、その作法次第を決定していく経緯、東寺教学における桂宮院流の位置づけなどを知るうえで興味深い史料であること、また、紙背文書には延文五年の丹後の軍事情勢について記したものがあがるが、そのなかには従来は知られていない室町幕府政治史に関わる貴重な情報も含まれることを具体的に明らかにすることができた。また、紙背文書に関係する南北朝期丹後国関係史料として、京都府立丹後郷土館寄託の丹後日置氏関係史料(「田邊文書」「百鳥講文書」等)を調査・撮影した。これらの撮影史料は、HiCAT Plusを通じて閲覧室利用が可能となる予定である。調査にあたっては、同館学芸員の稲穂が所蔵者との調整などを行った。

「薄草紙口決」断簡については、検討の結果、称名寺聖教とも断定できず、詳細は今後に委ねることとし、同じく未整理史料の中に大破した「富岡八幡宮及慶珊寺縁起」を見だし、これの修補から公開を進めた。二〇二一年度には本課題と並行して、本研究グループのメンバーを中心に金沢文庫と史料編纂所との合同で、慶珊寺所蔵『大般若経』全六百卷(智感版を含むことと著名)の撮影を完了しており、関連史料としての再評価・活用、金沢文庫での展覧会を通じた研究成果の公開が期待できる。

研究課題 香川県下所在の中世史料の調査と史料学的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 守田逸人(香川大学)

所内共同研究者 井上 聡

所外共同研究者 田中健二(香川大学名誉教授)・橋詰 茂(徳島文理大)

学元教授)

研究の概要

(1) 課題の概要

香川県下に所在する中世文書は、一九九〇年に刊行された『香川県史 第八巻 古代・中世史料』の編纂を機に、網羅的な収集・調査が行われた。しかし、その後三〇年あまりの時間が経過し、新たな史料が確認されたり、その後の研究の進展等に伴い再び全体の調査が必要になった文書群も少なくない。

とくに、香川県下の中世文書で最大の規模を誇る普通寺文書は、史料編纂所においても、また香川県現地においても中世文書の全貌や、近世文書等も含めた文書群全体の性格も把握できておらず、日本列島を代表する地方有力寺院としては研究史的に全くの盲点となってきた。

本共同研究では、史料編纂所の採訪活動とも連携しながら、普通寺文書を中心に香川県下の中世文書原本の調査・再調査を行うことで、未発掘史料の調査・研究およびその公開、既知の文書群の再評価等の研究を進める。同時に、香川県下の中世史料の全体像を把握し、史料編纂所と地域で史料情報の共有化を図っていくことを目指した。

(2) 研究の成果

本一般共同研究では、香川県下の中世文書のうち、塩飽勤番所蔵文書と、とくに県下で最も大きな規模を誇る普通寺文書に焦点を充てて調査・撮影を行ってきた。

その結果、普通寺文書については、これまで所在が明確でなかった多くの史料を再発見することができた。また、これまで全く研究がなかった普通寺文書の文書群の性格についても、多くの知見を得ることが出来た。

さらに、昨年度末に行った調査ではこれまで全く知られていなかった中世聖教類の一群も発見できた。それらについては、二〇二二年度の調査では具

体的な調査・撮影に至らなかったため、今後引き続き調査・撮影を行う必要があると考えている。そして、それらの作業を経て普通寺文書全体のある方について総合的に分析を行い、報告書等の成果報告を計画している。

研究課題 菅浦現地伝来史料の作成時期と料紙に関する研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 青柳周一(滋賀大学)

所内共同研究者 末柄 豊・井上 聡・高島晶彦

所外共同研究者 宇佐見隆之(滋賀大学)・大河内勇介(福井県立歴史博

物館)

研究の概要

(1) 課題の概要

滋賀県長浜市西浅井町菅浦は国宝「菅浦文書」(一二七一点。滋賀大学経済学部附属史料館寄託)が伝来した場所として有名であるが、現地の阿弥陀寺をはじめとして、この「菅浦文書」とは別に、中世の年紀が記された史料が伝来している。作成時期が近世である可能性も考えられることから、本研究では使用されている料紙にも注目して精査を行う。あわせて「菅浦文書」中に含まれる近世史料や、字の形状等から中世ではなく近世の作成という可能性がある史料数点についても、内容や紙質等について多角的な比較検討を実施する。

(2) 研究の成果

コロナ感染による警戒が続くなか、一二月に一度、滋賀大学経済学部附属史料館および菅浦区において史料原本の調査を実施することができた。史料館においては、国宝菅浦文書のうち従来作成年代などに疑義が呈されている史料約三五点について、最新機器を用いてその紙質分析を詳細に実施した。また菅浦区内の阿弥陀寺に蔵される同区有文書の調査も実践し、中世にさかのぼる可能性のある文書約一〇点を対象とした。調査結果の詳細な分析と検討は進行中であるが、概報に従うならば、紙質の面からみると、菅浦文書に寄せられた疑義の多くは退けられる可能性が高く、研究史の見直し・再検討

が予想される。また菅浦区有文書については、近世の写という可能性が極めて低いことが確認された。こうした成果は現在刊行の準備を進めている史料集、『菅浦文書集成(仮)』(吉川弘文館より上下二巻で刊行予定)に反映させてゆく予定である。

なお本調査の成果等は、二〇二二年度一般共同研究「国宝菅浦文書と関連史料の伝来形態と料紙に関する研究」(研究代表・宇佐見隆之・滋賀大学教育学部教授)に引き継ぐ形でさらなる推進を図ってゆく予定である。

研究課題 中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史の変遷の研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 天野真志(国立歴史民俗博物館)

所内共同研究者 山田太造・尾上陽介・高島晶彦・渋谷綾子・小瀬玄士

所外共同研究者 小倉慈司(国立歴史民俗博物館)・富田正弘(富山大学)

学)・野村朋弘(京都芸術大学)・柳原敏昭(東北大学)

学)・高橋 修(茨城大学)・名和知彦(陽明文庫)・貫

井裕恵(神奈川県立金沢文庫)・大山 恒(茂木町教育

委員会図書文化係)

研究の概要

(1) 課題の概要

古文書研究の進展を目指す上で、文字情報だけでなく料紙繊維や添加物等の物質的情報、さらには抄紙過程に付与された痕跡の確認など、古文書を多面的に分析する方法論の確立が求められる。本研究では、これらの課題を検討するために、考古学的分析手法や植物学などの成果を踏まえた古文書料紙の歴史の変遷を検討する。

本研究では、光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いて料紙を非破壊的に調査し、繊維および添加物の状態を分析する。特に、古文書料紙の構成物の種類・量・密度などの質的な解析によって製造手法や地域的・時期的特性を見出し、料紙の生産および使用実態を双方向的に検討することで、歴史的・社会的変遷の復元をおこなう。具体的には、史料編纂所蔵「島津家

文書」、陽明文庫、松尾大社所蔵文書、仁和寺所蔵文書、ふみの森もてぎ所蔵「茂木文書」、東北大学保管「結城白河家文書」を調査し、料紙に含まれる繊維や添加物などの構成物解析をおこなう。また、抄紙過程で付与される糸目や罫目、皺などの表面情報を調査し、古文書料紙を構成する多様な基礎情報を蓄積することで、中世から戦国期における公家・武家文書の地域的特性や歴史の変遷について科学的検証に基づく検討をおこなう。

(2) 研究の成果

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初予定していた調査・研究活動が大幅に制限されたが、これまでに確立した分析手法に基づき、松尾大社所蔵史料、ふみの森所蔵「茂木文書」の調査・研究を実施した。松尾大社所蔵史料は、これまでの調査蓄積を踏まえつつ料紙の顕微鏡撮影を行い、材料の含有量に関する時代的変遷を分析するための基礎情報を充実させることができた。さらに、明治太政官制下における発給文書の顕微鏡撮影を行い、当該期における文書名称と料紙の性格との相関関係を検討した。「茂木文書」については、焼損箇所注目して料紙および填料の変化を検討するための顕微鏡撮影を実施し、同文書群の特質を踏まえた検討の方向性を協議することができた。

また、料紙の地域的特性を検討するために、西ノ内紙の産地である常陸大宮市において楮畑を調査し、DNA分析のためのサンプルを採取するとともに、簀や摺鉢などかつて抄紙に用いられていた道具の現況調査をおこない、古文書料紙をとりまく多様な資料分析の可能性を検討した。

本共同研究で料紙の構成物に注目し、古文書を多角的に検討したことにより、文書料紙の時代的変遷や地域特性を中心とした情報抽出の可能性を提示することに繋がり、関連する科学研究費と連携して調査ハンドブックを作成するに至った。あわせて、調査データの利用・公開に向けた議論も進み、博物館展示の計画を含む成果発信も予定している。

研究課題 「院号定部類記」の共同利用に向けての調査・研究・公開―東山

御文庫本系諸本を中心に―

研究経費 四九万五千円

研究組織

研究代表者 野口華世（共愛学園前橋国際大学）

所内共同研究者 小塩 慶・堀川康史

所外共同研究者 伴瀬明美（大阪大学）・高松百香（東京学芸大学）・河合

佐知子（国立歴史民俗博物館）・長田郁子（世田谷区
史編さん史料調査員）

研究の概要

（1）課題の概要

王家の皇女や后が女院になるためには、院号宣下という手続きが必要であり、この前後の状況を女院ごとに記した史料が「院号定部類記」である。中でも東三条院から室町院までの三五人の記録を収めたものが、従来の女院研究で多く使用されてきた。しかし、この記録は女院とその周辺に関する基礎的な史料でありながら、現存諸本が近世の写本であることから、史料批判となる諸本研究、さらには全体を通じての史料翻刻もほとんど行われていない。昨今、中世の女院や后の研究が盛んに進められているなかで、諸本研究および翻刻は喫緊の課題といえる。

したがって本共同研究では、よく利用されてきた東山御文庫本系統の諸本について考える。同系統本としては、東山御文庫本（史料編纂所図書室パソコンで閲覧可能）・史料編纂所架蔵謄写本の水戸彰考館本、さらには宮内庁書陵部本・内閣文庫本がある。この中でも、特に一般的に利便性の高い内閣文庫本を利用しながら、諸本も参照しつつ翻刻をすすめ、近世の写本であるがゆえの明らかな誤写を検討し修正していく。これらにより中世王家の女性の研究の進展に寄与でき、また近世における部類記書写の広がりも解明できる。

（2）研究の成果

本共同研究による最大の成果は「院号定部類記」翻刻の公表である。共同研究者と研究協力者の協力を得て「院号定部類記」の翻刻が完結した。また、原本調査の実施によって「院号定部類記」の諸本についても新たな知見を得ることができた。

翻刻に関して、本共同研究が扱った東山御文庫本系「院号定部類記」は、一〜三六番目の女院のうち、九番目皇嘉門院を除く三五人の女院の院号定の

記事を集めている。すでに研究代表者による科研報告書（基盤研究(C)（一般）一七K〇三〇七四）にて、そのうち一一女院の記事の翻刻は公表している。本共同研究では、その他の全二四女院についての記事を翻刻した。底本には、ホームページでの公開により利便性の高い「内閣文庫本」を用いた。なお、「国立公文書館デジタルアーカイブ」請求番号一四四一〇四七九の「記録部類」中の「院号」一〜六、が該当する。また明らかにわかる文字の間違ひは、断りなく修正している場合があり、その際、同系統の他本を参照している。これは史料としての便宜を重視するためである。以上の翻刻は、「東京大学史料編纂所研究成果報告書（二〇二二―一七）」として発刊した。「院号定部類記」の翻刻が完結したことにより、研究資源化が果たされた。また誤写の修正などを施した翻刻は、その共同利用を促進させ、この分野の研究進展に大いに寄与するだろう。

研究課題 加藤嘉明関係文書の総合的研究―史料編纂所架蔵謄写本「近江水

研究経費 口加藤子爵家文書」を基盤に―

研究組織 二六万三八〇七円（前年度よりの繰越分）

研究代表者

山内治朋（愛媛県歴史文化博物館）

所内共同研究者 井上 聡・村井祐樹・畑山周平

所外共同研究者 井上 淳（愛媛県歴史文化博物館）・土居聡朋（愛媛県教育委員会生涯学習課）・藤本誉博（一財）今治文化振

興会今治城）・川島佳弘（松山市坂の上の雲ミュージアム）・甲斐未希子（愛媛県スポーツ文化部まなび推進課）

研究の概要

（1）課題の概要

加藤嘉明は、豊臣秀吉のもとで大名となり、秀吉没後は徳川家康のもとでその地位を固めた近世初期の大名である。その領国支配は伊予国内で三二年と生涯の約半分に及び、伊予の近世の礎を築いた一人である。これまで、自治体史・展覧会図録などに掲載された関連史料も少なくないが、集約的な史料集や目録などはいまだ作成されておらず、近年愛媛県で松山城築城者とし

嘉明への関心が高まりを見せる反面で、嘉明に関する研究はあまり進んでいない現状にある。本研究では、昨年度に加藤嘉明受給文書の収集・調査に引き続き、発給文書および関連する一次史料について、加藤嘉明関係自治体における情報・データベースなどを活用するとともに、愛媛県の博物館活動の成果なども継承しつつ情報把握・整理を進める。未調査の史料については史料調査を行うなどしながら、目録化を進め、未公開の史料を紹介し、今後の加藤嘉明関連の研究に資する基本情報を公開する。

(2) 研究の成果

以下、調査を行った文書をあげる。

【大阪調査】〔大阪城天守閣所蔵文書〕

【愛媛調査】〔愛媛県歴史文化博物館所蔵文書〕〔歯長寺文書〕〔光林寺文書〕

以上の内、愛媛県歴史文化博物館所蔵の加藤嘉明関係史料は、新出文書であり、発見された意義は極めて大きい。また歯長寺文書・光林寺文書は百数十年ぶりの本所による探訪で初めて写真撮影が行われた。

東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一—四「近江水口加藤子爵家文書―豊臣政権編―」を刊行した。

研究課題 武田流弓馬故実書の形成過程に関する史料学的研究

研究経費 五万五千四百八円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 阿部能久（聖学院大学）

所内共同研究者 高橋慎一朗・林 晃弘

所外共同研究者 大澤泉（鎌倉歴史文化交流館）・石井千紘（鎌倉国宝館）

研究の概要

(1) 課題の概要

流鏑馬・笠懸・犬追物などの騎射の武芸は、鎌倉時代の武士の鍛錬手段として広く行われたものであるが、室町時代以降は衰退に向かい、江戸時代に入って弓馬故実として再構成された。とりわけ流鏑馬は、現代まで伝承されて各地の神社祭礼などの際に執行され、国際的にも関心が高い。現代に伝わる流鏑馬などの弓馬故実は、主に武田流と小笠原流に大別され、鎌倉時代か

ら続く鶴岡八幡宮の流鏑馬においても、両流によって流鏑馬の奉仕がなされている。しかし、戦国時代から江戸時代にかけて展開した弓馬故実の形成過程はかなり複雑であり、いまだ明確にされてはいない。

本共同研究は、鎌倉の金子家に伝来した学界未紹介の武田流弓馬故実書群の目録作成と原本調査による奥書の分析を通じて、その史料群としての性格を明らかにし、中世から近世にかけての弓馬故実の形成・伝承過程と、現代鎌倉を代表する伝統行事である流鏑馬故実の歴史的系譜を解明することをめざすものである。

(2) 研究の成果

前年度に作成・公開した冊子分の目録に漏れていた冊子を、新たに二二点確認することができた。また、巻子の史料群五〇点につき、簡易撮影と目録作成をおこない、とりわけ鳴弦の作法に関わる史料が多いという特徴を明らかにした。さらに、「故実袋」と称される、武家故実に関わる、紙や紐を用いた小型の模型史料群についても調査をおこない、包袋の記載から、これらが江戸後期の熊本藩士・志水隼太正房の手によって整えられたものであることが判明した。

熊本県立図書館の調査では、幕末に竹原家から熊本藩士・井上平太に武田流故実が伝授されたことを裏付ける史料を確認することができた。

本研究では、現在は鎌倉に伝わる武田流武家故実が、江戸時代の熊本藩で体系化され、井上平太氏、金子有鄰氏を通じて鎌倉へもたらされたという伝播の過程を、熊本藩細川家関係史料の研究蓄積のある史料編纂所との共同研究をおこなうことにより、明確にあとづけることができた。

研究課題 文祿の役における朝鮮王子関連文書の調査・研究・目録化

研究経費 五六万五〇五二円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 川西裕也（新潟大学）

所内共同研究者 金子 拓

所外共同研究者 木村 拓（鹿児島国際大学）・久野哲矢（佐賀県文化ス

ポーツ交流局文化課）

研究の概要

(1) 課題の概要

文禄の役の最中の一五九二年七月、朝鮮国王・宣祖の王子である臨海君・順和君が日本軍によって捕縛された。その後、二人の朝鮮王子は、約一年間にわたって日本軍の捕虜となっていたが、翌年六月、一時的な講和の成立にともなって解放された。

この二人の朝鮮王子のエピソードについては、文禄の役における重大事として広く知られている。しかし、彼らが捕虜となっている間に日本の武将や僧へ送った文書（書簡・詩文など）が日本各地に多数現存することについては、これまでほとんど注目されてこなかった。その結果、二人の朝鮮王子の動向については不明な点がきわめて多い。

本研究では、こうした研究現況を踏まえ、日本に現存する二人の朝鮮王子文書を網羅的に調査・研究・目録化することを目的とする。原本が確認できるものについては実見調査を行い、各文書の詳細なデータを集積する。また、各文書の発給年月日と様式・内容を検討した上で、編年目録の作成と公開を行う。

(2) 研究の成果

二〇一九年度以来続けてきた本共同研究により、日本に現存する朝鮮王子関連文書を網羅的に実見調査することができた。調査を実施した史料所蔵機関は次のとおりである。公益財団法人鍋島報効会（佐賀）、佐賀県立名護屋城博物館史料編纂所（佐賀）、泰長院（佐賀）、本圀寺（京都）、本妙寺（熊本）、八代市立博物館未来の森ミュージアム（熊本）。この調査を通じて、学界未紹介の重要な文書が複数確認されたことは大きな成果であった。現在、蒐集した文書データの整理および分析の最終作業を行っている。

また本年度には、オンライン上で関連研究会（壬辰戦争研究会）を八回にわたって開催した。日本国内はもとより国外（韓国・中国・カナダ・スペインなど）から多くの参加者があり、非常に活発な討議が行われた。新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって国内外の移動が強く制限されたが、どこからでも参加が容易なオンライン研究会の開催が定着したことは不幸中の幸いであったといえる。

本共同研究の成果は二〇二二年度中に論文集として刊行することを予定している。

研究課題 観世音寺公験案の集成と研究

研究経費 三十七万二〇〇円（前年度よりの繰越分）
研究組織

研究代表者 森 哲也（九州大学）

所内共同研究者 稲田奈津子・遠藤基郎・山口英男

所外共同研究者 重松敏彦（太宰府市公文書館）・三輪真嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

(1) 課題の概要

保安元（一一二〇）年、筑紫観世音寺は東大寺末寺化に伴い、八世紀代以来の伝来文書について公験案を作成して進上した。それらは東大寺図書館を始め、国立公文書館（内閣文庫）等、寺外の各所にも分蔵され、確認できる公験案は二四点を数える（一点は焼失、二点は正文）。本研究では、これら公験案二四点を集成・翻刻して広く学界の共有財産化を図るとともに、地方寺院における文書保管、資財管理の実態解明、寺領経営の再検討等、公験案としての分析を行うおとするものである。今年度（過年度の繰越分）は、これまでの成果を踏まえ、公験案の集成を完成し、伝来過程等に関する整理を行うとともに、公験案に関する基礎的考察、観世音寺の東大寺末寺化の背景等についても分析を加え、報告書を作成して本研究課題の完成を図る。

(2) 研究の成果

今年度は、本研究課題の総括として、これまでの調査・検討の成果を踏まえ報告書を作成した。中でも、現段階で知られている観世音寺公験案を集成し、史料調査の成果、共同研究員による検討、写真帳、影写本等に基づく校訂を施し、刊本、標註、参考文献、伝来過程等に関する情報を盛り込んだ「観世音寺公験案集成稿」（森編）を作成できたことが大きい。これによって、関係情報とともに公験案を一覧することが容易になり、公験案の生成・現在に至るまでを対象として叙述した「観世音寺公験案の基礎的考察」

(森)と合わせ、観世音寺、大宰府、東大寺に関する研究の深化に寄与するものと考えられる。「一二世紀前半の東大寺別当と観世音寺・鎮西米」特に寛助に注目して」(三輪)は、観世音寺の東大寺末寺化に際し、東大寺別当、特に寺外別当の果たした意義を明らかにしたもので、中世寺院へと変貌を遂げる東大寺の歩みを研究する上で重要な成果である。「補説」『観世音寺資財帳』原本ならびに同資財帳複製の調査(森)では、時間的な制約もあったが、原本の観察によって同資財帳の様態について、これまで指摘されなかった点を確認でき、複製の調査においても、紙面の痕跡から料紙の編成について新たな可能性が指摘されるなど、今後も同資財帳に関する調査・研究を継続する必要性が示された。観世音寺現蔵の中近世文書撮影に際しても、現存未確認のため内容が判明しない公験案に関し、その手がかりとなる記述が見出されるなど、今後の研究進展につながる発見があった。

さらに東京大学史料編纂所日本古文書ユニオンカタログデータベースの当該文書レコードから、本報告書PDFに飛べるようにすることで、より広い学術利用を可能とした。

以上、本共同研究では、コロナ禍の中で制約をうけた部分もあったが、古代史と中世史、観世音寺と東大寺という、それぞれの視点による分析が効果を上げ、また、長年にわたる正倉院文書や東大寺文書の調査と出版により蓄積されてきた経験知が発揮されたと見えよう。

研究課題 藤波家旧蔵史料の調査・研究

研究経費 四〇万九七六〇円(前年度よりの繰越分)

研究組織

研究代表者 高橋秀樹(國學院大學)

所内共同研究者 尾上陽介・遠藤珠紀

所外共同研究者 田中大喜(国立歴史民俗博物館)・比企貴之(國學院大學)

研究の概要

(1) 課題の概要

神宮祭主であった藤波家の旧蔵史料は、宮内庁書陵部や國學院大學の史料群が知られているが、史料編纂所にも「藤波家蔵書」の蔵書印をもつ近世写

本が所蔵されているほか、各地の所蔵機関に旧蔵の文書や書籍が所蔵されている。また、国立歴史民俗博物館の「広橋家旧蔵記録文書典籍類」が明治時代末く大正時代には藤波家に所蔵されていたことも知られており、その時期に複数回作成された蔵書目録が史料編纂所・東洋文庫、國學院大學に現蔵されている。

昨年度は、各所蔵機関の蔵書目録等から判明する藤波家旧蔵史料をデータ化し、京都学・歴史館、徳島大学等の現蔵史料を調査した。そこで本年度は、①未調査分の史料調査を行い、データの充実を図る。②昨年度画像データを取得した複数の蔵書目録の分析を行って、目録間の異同と、現存する旧蔵書との関係を明らかにし、複数の所蔵機関にまたがる公家文庫を総合的に研究するための基礎を築く。③奥書等の分析から祭主家がどのように公家日記を集積したのか、またどのような経緯を経て蔵書が散逸していったのかを関係史料から追究する。

(2) 研究の成果

本共同研究の研究成果として刊行した『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一—八 藤波家旧蔵史料の調査・研究』(研究代表者高橋秀樹、二〇二一年一月)には、下記の論考および史料翻刻を掲載している。

高橋秀樹「藤波家旧蔵史料の現状と伝来」は、シンポジウム報告以後に判明したものを含め、三三の所蔵機関・個人に現蔵あるいは旧蔵されている藤波本、市場に出て現蔵者不明の藤波本を取り上げ、いくつかの蔵書目録の内容も踏まえて、藤波家蔵書の形成・散逸の過程をたどった。

比企貴之「祭主藤波家関係史料の所在とその性格」は、中世く近世の藤波家をとりにまく状況を念頭に置きつつ、神宮文庫・神宮徴古館農業館・國學院大學図書館「藤波家文書」・東京大学文学部宗教学研究室「正親町家旧蔵神道関係史料」の内容を考察する。

尾上陽介「東京大学史料編纂所所蔵『藤波家蔵文書記録目録』に見える『民経記』原本の構成」は、継目の糊が剝がれた状態の時に作成された『藤波家蔵文書記録目録』における『民経記』の記述と国立歴史民俗博物館に所蔵されている現状とを比較し、近代以前の『民経記』原本のあり方や改装過程を復元する。

田中大喜「広橋家旧蔵記録文書典籍類」所収文書群の書誌的考察」は、題簽や押紙の記号から、類纂が行われた文書群、並び替えが行われた文書群、原形を留める文書群に分類し、「藤波家蔵文書記録目録」と比較することで、目録の性格を明らかにした。

遠藤珠紀「広橋家文書の伝来寸描」は、鎌倉～室町期における家記の保管・伝領の様相を示した上で、他家から混入したとみられる國學院大學図書館所蔵「正文元年十二月記」と国立歴史民俗博物館所蔵「文和元年（観応三年）記」の記主を探る。

藤波家・広橋家蔵書目録翻刻集として、「國學院大學図書館所蔵『藤波・広橋両家ノ古文書調』」（梶田航平）、「国立公文書館所蔵『広橋家記録類目録』」（小堀貴史・百瀬顕水）、「東京大学史料編纂所所蔵『広橋家歴代記録目録』」（諸家歴代日記目録の内）（百瀬顕水）、「東京大学史料編纂所所蔵『広橋家記録目録』」（諸家蔵書目録甲四の内）（小堀貴史）、「東京大学史料編纂所所蔵『広橋家所蔵古鈔本記録文書目録』」（日野真木・佐藤瑞樹）を掲載した。

本報告書には、藤波家・広橋家史料について考えるための基礎となる史料紹介、伴瀬明美「史料編纂所所蔵『古文書目録』」（藤波家蔵文書記録目録）を再録している。

公家日記に関心をもつ研究者、武家文書に関心をもつ研究者、神道・神社史料に関心をもつ研究者が共同研究を行うことで、多様な性格をもつ史料群について多面的・多角的な研究を行うことができた。また、補助員として参加してくれた國學院大學大学院生による史料翻刻を彼らの研究業績として掲載できたことにも意義があった。

研究課題 多可町杉原紙研究所所蔵寿岳文章氏和紙コレクション紙調査研究

研究経費 四九万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 湯山賢一（多可町杉原紙総合調査委員会）

所内共同研究者 及川 亘・石津裕之・高島昌彦

所外共同研究者 安平勝利（多可町那珂ふれあい館）・大川昭典（元高知県立紙産業技術センター）・本多俊彦（金沢学院大学）・富田正弘（富山大学名誉教授）

研究の概要

（一）課題の概要
本コレクションは、日本前近代における紙の歴史の学術的研究について先駆的業績を残した寿岳文章氏が、その研究のため全国を回って蒐集した和紙原本の集積である。寿岳文章氏が新村出氏とともに、中世に最も使用された杉原紙の原産地として、多可町杉原谷の地を認定したのをきっかけとして、多可町で杉原紙の復興と研究の機運が高まり、杉原紙研究所が設立され、活動を続けてきたが、文章氏の没後、令嬢の章子氏から当該コレクションが杉原紙研究所に寄附され、研究所で整理が行われてきた。ただ、これまでの整理では、産地と紙の種類などの確認がなされているが、紙の厚さ・重さ・密度、原材料や填料、製紙法の解明など物理的技術的解明までは行われていない。

本調査研究は、これまでの整理をさらに進化させ、上記の調査研究を進めようとするものである。確かに、このコレクションは、戦前に制作されたものではあるが、原材料や技術は前近代に近いものがあり、何よりも全国にわたって網羅的に蒐集されているところに意義がある。したがって、近世の製紙の地域的特質を考える上でも、重要な材料となることは間違いない。そして、これらの調査研究の結果を、数量的に、かつ顕微鏡写真などによって視覚的に、学界の共通素材として提供せんとするものである。

（二）研究の成果

二〇一九年度の共同研究で得たデータを含め、東北・北陸・関東甲信越・関西・中国・四国・九州一六〇の和紙の原材料、填料の種類と分量、繊維切断の有無、非繊維物質の残存度、縦横寸法、厚さ、重さ、密度、簀目の太さ、糸目幅、繊維束の状況、板目・刷毛目・紗目などの料紙データおよび繊維の顕微鏡画像データを得た。

また本コレクションから近世和紙生産の地域分布の状況を考察した結果、近世の抄紙技術を継承し、その姿を伝えているものと洋紙に対抗する白さを意図的に用いられた木材パルプや稲藁、マニラ麻、エスバルト等を原料に加

えた近代の技術変革と製品の均一化が見受けられること、原料確保の容易さから役所文書反故を原料とする漉き返し（再生紙）も多いこと、昭和時代前半の和紙は圧倒的に後者の方が多く、近代和紙の時代であることを証明した。

なお、調査結果については、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―一二「多可町立和紙博物館壽岳文庫所蔵寿岳文章和紙コレクション」資料紙調査研究 東京大学史料編纂所一般共同研究報告書（二〇一九年度―二〇二一年度）として刊行した。

研究課題 『江雲随筆』の研究資源化―近世初期日朝「境界」文書群―

研究経費 五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 米谷 均（早稲田大学）

所内共同研究者 鶴田 啓・須田牧子・岡本 真

所外共同研究者 村井章介（東京大学名誉教授・佐伯弘次（九州大学名誉教授）・臼井和樹（宮内庁書陵部）

研究の概要

（一）課題の概要

東京大学史料編纂所所蔵謄写本『江雲随筆』は、近世初期の日朝関係史に関わる文書を多数収める文集で、田中健夫編『善隣国宝記 新訂続善隣国宝記』（集英社、一九九五年）で『続善隣国宝記』の校合に用いられただけでなく、申請者・共同研究者も論文でしばしば利用してきた。しかし未だ全文翻刻はなされておらず、史料的人格・成立・諸本系統といった基礎的事項も本格的に検討されてこなかった。本共同研究では、①諸本および関連諸史料の調査、②調査結果をふまえた本文校訂・所収文書の年代推定・人名比定などを行い、③『江雲随筆』の全文翻刻を行うものである。

（二）研究の成果

二〇一九年度の活動で、史料編纂所謄写本の全文翻刻、および東京・京都での諸本の調査・撮影を行った結果、諸本間で異同が多く確認され、史料編纂所謄写本を底本とする場合でも校訂作業が必要であることが分かった。調査結果をふまえた本文校訂・所収文書の年代推定・人名比定などを進め、

『江雲随筆』の翻刻全文を公開することで、今後の対外関係史研究、とりわけ近世日朝関係史の実態解明に資する史料を提供することができると考える。

研究課題 史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費 五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 渡辺美季（東京大学）

所内共同研究者 須田牧子・黒嶋 敏・岡本 真

所外共同研究者 荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・辻 大和（横浜国立大学）

研究の概要

（一）課題の概要

東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴重な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集積が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における形式・作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された類似文書との比較検討が不可欠である。

そこで本研究ではこれらの文書について、二〇一九年度一般共同研究に引き続き、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定の調査を進め、②それらの規定と編纂所の所蔵史料とを対照した上で、③韓国の国立中央図書館・韓国学中央研究院において明清中国から朝鮮に発給された類似文書（原本）との比較検討を実施する。これにより、規定と実態の両面からこれらの文書の古文書学的位置づけを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

（二）研究の成果

韓国調査が出来なかったのは残念だが、コロナ禍を逆手にとりて研究計画を大きく見直し、成果報告書の作成・刊行に注力した。報告書掲載の諸史料については、当初予定していたよりも広い視点から多くの論点を掘り下げる

ことができ、編纂所所蔵の明清公文書の史料的位置づけを、いっそう明らかにすることができた。これには日本・琉球・朝鮮史を専門とするメンバーに加え、海外研究協力者である林慶俊氏（韓国・東北大学）・劉序楓氏（台湾・中央研究院）の多大な協力を得たことで、同時代東アジア諸国の発給文書をより複眼的な視野で見通すことが出来たことが大きい。また刊行にあたって、東京大学史料編纂所研究成果報告書として支援を得たことにも謝意を表する。

カラー版の鮮明な図版を伴う成果報告書は、明清公文書の専論として類例が乏しかったこともあり、幸いにも好評を博した。また、国際的な成果発信の一助とすべく英語・中国語・韓国語の要旨を付しており、オンラインで公開したことにより、世界中どこからもアクセスできるようにした。これにより本研究成果の国際的な活用が期待される。

研究課題 一八世紀オランダ東インド会社の遣清使節日記の翻訳と研究
研究経費 四五万二四二二円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 大野晃嗣（東北大学）

所内共同研究者 松方冬子・大東敬典

所外共同研究者 森田由紀・Leonard Blussé（ライデン大学）

研究の概要

（一）課題の概要

オランダ東インド会社は、清朝との貿易を実現・改善するため、何回か使節団を派遣しているが、そのうち、一七九四～一七九五年の乾隆帝の在位六〇年を祝う使節団は、有名なイギリスのマカートニー使節団との対比上も有名である。正使は、日本商館長を務めたティチングであった。しかし、ティチング使節団の残した記録は、ティチング自身によるオランダ語の日記のほか、副使ファン・ブラーム・フックヘーラストによるフランス語の日記、さらに通訳として同行した学者ド・ギーニュによるフランス語の日記があり、最低限でもオランダ語とフランス語の読解力が必須である。さらには地名・人名・官名を含む当時の中国についての広範な知識をも必要とするため、今ま

で日本語に訳されたことはなかった。今回、中国史研究者（大野、Blussé）、オランダ語史料の翻訳実績を持つ史料編纂所海外二室の教員が、在野の翻訳者に協力する形で、この課題に挑む。

（二）研究の成果

本研究は、多様なバックグラウンドをもつ研究者、ノン・アカデミックの翻訳者が一堂に会することによって新しい知見を得ることを目的とし、その目的は着実に達成されつつある。

細かいところでは、ティチングの日記による *Stap* という言葉の訳出である。*Stap* はマレー語で「印（いん、しるし）」のような意味であり、一般にアジアで活動するオランダ語史料のなかで多用される。ティチングによる日記においても、「印のある書翰」「印のある証書」の意味で使われているだけでなく、「龍牌」（皇帝の名前を記した位牌状の板）の意味でも使われている。清朝の総督・巡撫が任地にあつて、いわば「皇帝の代わり」として儀礼に「龍牌」を使用することは、大清會典に見えるが、その具体的な使われ方は漢文史料ではなかなかわからないため、本日記の記述は貴重である。ティチングと皇帝の謁見の場も、けつして儀式的な雰囲気ではなく、屋外のカジュアルな場面であり、参加した明清史研究者（大野）から意外だとの感想が聞かれた。清朝史研究にオランダ語史料を用いることのメリットが明らかにした。

大きなところでは、既存の異文化論の枠組みをあらためて検証する必要性が指摘された。ティチングの日記は最近 Tonio Andrade が *The Last Empress* という書物で取り上げ、（ティチングの遣使は具体的な成果もなく失敗だったという従来の評価に対し）交流自体を目的とする「社交外交」なので成功だったと論じている。本研究では果たして「成功」「失敗」という評価のあり方が妥当なのか、議論になった。参加した西南アジア史研究者（大東）が、インド史研究者 Sanjay Subrahmanyam の学説を援用し、（従来の「分り合えない incommensurability」という暗黙の前提に対する）「大分分り合える commensurability」概念が有効なものではないかと提案した。

オランダ東インド会社の遣清使節日記の「翻訳」が単なる翻訳ではなく、学際的な議論の場となり、細かな事実関係から世界史の描き方に至る多様な

論点を浮かび上がらせる場となっている。

研究課題 長崎市中「本石灰町乙名本山家文書」の研究資源化に向けた調査

研究

研究経費 五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 藤本健太郎（長崎外国語大学）

所内共同研究者 松井洋子・荒木裕行

所外共同研究者 木村直樹（長崎大学）・吉岡誠也（東京大学地震火山史料連携研究機構）・赤瀬 浩（長崎市長崎学研究所）・徳

永 宏（長崎市長崎学研究所）

研究の概要

（１）課題の概要

本石灰町（もとしつくいまち）は長崎市中八〇か町のうち、丸山遊廓を構成した丸山町と隣接する町である。本石灰町の乙名職は一八世紀後期以降、本山家が六代にわたり襲職し明治に至った。本山家で保管していた古文書史料のうち、約一一五〇点が「本石灰町乙名本山家文書」として現存している。「本石灰町乙名本山家文書」は、近世長崎の町乙名を中心とした都市運営の実態を知る上で貴重な記述が多数確認されており、近世都市史研究にも研究成果を還元できる重要な史料群である。

しかし、当該史料群の収蔵機関は、現在東京大学史料編纂所（所蔵分と寄託分）と長崎歴史文化博物館（長崎県立長崎図書館寄贈分、長崎市長崎学研究所購入分を収蔵）の二か所に分散しており、両機関に収蔵されている史料を本山家に由来する史料群として、包括的に整理・把握できていない状況にある。

本研究では、両機関に収蔵されている史料群の概要把握を進めるとともに、史料一点ごとの概要掲載を含む、詳細な総合目録を作成することで「本石灰町乙名本山家文書」の研究資源としての活用に努めたい。また、その史料群の特性を踏まえた共同研究も実施する。

（２）研究の成果

二〇二〇～二〇二二年度の目録記述作業と史料調査によって、三カ所に分散した本山家の文書、総点数一四六〇点余の全体像を把握し、目録情報を総合することができ、来年度には目録を刊行する見通しがたてられた。（全体の構成については二〇二〇年度実績報告書参照。）

両所蔵機関の研究者の共同研究という形をとったことで、所蔵機関の壁を超えた調査をスムーズに行うことができ、また、惣町絵図の中で本石灰町の状況や本山家の親戚や養子などを介したネットワークなど、長崎在住の研究者との知識の共有は、個別の文書の内容理解に資するところが大きかった。

一紙ものが多い史料編纂所購入分史料についても、今後の研究利用の幅が広がるのが期待できる。

研究課題 一四～一七世紀における奄美・琉球関係史料の学際的研究

研究経費 二六万四二三〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 村木二郎（国立歴史民俗博物館）

所内共同研究者 黒嶋 敏

所外共同研究者 荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・田中大喜（国立歴史民俗博物館）・池田榮史（琉球大学）・鈴木康之（県立広

島大学）・池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）

研究の概要

（１）課題の概要

琉球は明の冊封を受けた一四世紀以降、周辺諸島を軍事的に侵攻していくが、そのうち奄美諸島への侵攻過程については史料的な制約が大きく未解明な点も多い。しかし近年、奄美諸島のうち琉球の侵攻対象となった喜界島では重要な中世遺跡の発掘成果が相次いで報告されており、考古学の見地から琉球側の勢力伸長の過程を跡付けつつある。一方で、当該地域に関する同時代の文献史料は乏しいが、のちの時代に作成された地誌類や絵図といった近世・近代史料のなかに援用しうる歴史情報を持つものが少なくない。

そこで本研究では、一四～一七世紀における琉球の侵攻・支配について、喜界島に焦点を定め、考古学・文献史学それぞれの視点から学際的に検討を

進めていく。考古学の研究者による、現地調査を主とした当該期の集落の検証と、文献史学の研究者による、史料編纂所が所蔵する関連史料の原本調査と高精度デジタル撮影を主とした比較・解析を行い、双方の研究成果を突き合わせ、成果を公開して「史料の研究資源化」を行うものである。

(2) 研究の成果

二〇二一年度については研究費を執行できず、研究活動を実施できなかったため、とくになし。

研究課題 中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係―石見国妙義寺を中

心に―

研究経費 三万七千四百二十円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 中司健一（益田市歴史文化研究センター）

所内共同研究者 西田友広

所外共同研究者 目次謙一（島根県古代文化センター）・福田善子（山口

県立美術館）・濱田恒志（島根県立古代出雲歴史博物館）

館）・角野広海（島根県立石見美術館）

研究の概要

(1) 課題の概要

島根県益田市の曹洞宗妙義寺は、中世以来の歴史を誇り、中世のものも含め豊富な古文書を伝える。それら是一部が『曹洞宗古文書』や『中世益田・益田氏関係史料集』に収録されているが、まだその全体像は示されていない。妙義寺は、中世に益田氏の菩提寺であったこと、中国地方の曹洞宗の中核的な寺院である大寧寺との緊密な関係、末寺である益田市域の多くの曹洞宗寺院との関係、江戸時代における三隅の龍雲寺や津和野藩との末寺の帰属をめぐる問題、一方で広域的な文化交流の様相など、中世・近世における曹洞宗寺院の支配者や他寺院との関係について非常に興味深い事例を多く見いだすことができる。

そこで、本共同研究では、妙義寺文書や所蔵する文化財について学際的に調査し、目録化・活字化を進めるとともに、関連する寺院等の文書や文化財

もあわせて調査することで、研究資源化と中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係について考察することとしたい。

(2) 研究の成果

(1) 妙義寺釈迦十六羅漢図について

①美術史的価値・作者は雪舟流の人物と思われる、高麗仏画や、雪舟を介して受け継がれていた禅月様十六羅漢図や蔡山筆羅漢図の図像・描法を参照しつつ、描いたと思われる。

②歴史的背景・安土桃山時代に妙義寺が中興された際に、中興開山として招かれた大寧寺の関翁珠門が寄進した可能性が高い。江戸時代に津和野藩や龍雲寺との関係の中で、本末関係が動揺した際に、結束を再度強めるために修復が行われる。

(2) 大寧寺とその文化財

美術品は貴重な作品が多く見られたが、益田家お抱え絵師永富家の作品が多くあることが注目される。中世末期に益田氏が寄進したという仏像三体は、画像による所見であるが、一七世紀後半を遡ることはない、という評価を得た。墓地には、益田元祥以降の歴代益田氏当主の墓が所在する。総じて、益田家と非常に関わりが非常に深いことが改めて確認された。

(3) 益田兼房氏所蔵文化財

①衣冠姿の益田元祥像・さらなる調査が必要であるが、一七世紀代のものである可能性が高く、作者等がわかれば益田家の文化性がさらに明らかになる可能性がある。

②伝益田元祥所用の帷子・一七世紀初頭を下らないものであり、服飾史上も注目される。

(4) 総論

中世から近世の益田氏・益田家の、同規模の領主と比較してもかなり高水準の文化性、特に雪舟と深く関わり、その技法の継承や名声の確立に少なからず貢献したことがうかがわれた。

益田氏・益田家は戦国時代から曹洞宗、特に大寧寺に深く帰依し、大寧寺から中興開山を招いて妙義寺が中興された。江戸時代になると、妙義寺は益田氏という庇護者を失い、龍雲寺との関係の中で本末関係が動揺する。益田

氏・益田家は旧領である益田の寺院への経済的・文化的支援を行っていた様子もうかがわれた。

研究課題 和歌山平野を中心とした地域所在中世史料の調査・研究

研究経費 三四万六〇八一円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 坂本亮太（和歌山県立博物館）

所内共同研究者 村井祐樹・高橋敏子

所外共同研究者 小橋勇介（和歌山市立博物館）・砂川佳子（和歌山県立文書館）

研究の概要

（一）課題の概要

和歌山県における中世史料は、『和歌山県史』の刊行により、その全貌がほぼ明らかになっている。また、本研究で対象とする和歌山平野域（主に和歌山市）については、『県史』刊行後、『和歌山市史』が刊行され、『県史』未収録の史料群も『市史』により把握されている。ただし、当時においても種々の事情により十全な調査・発掘が行われたものではなく、存在は把握していながらも点数が少ないという理由で採録しなかったものや、原本調査に至らず、史料編纂所架蔵影写本に拠らざるを得なかったものも多数あった。さらに、刊行から既に四〇年以上が経過し、その間に新たに発見された史料も少なくない。

以上の様な状況の中で、本課題で対象とする和歌山平野（主に和歌山市）域では、林家文書（和歌山市立博物館所蔵文書）と林峯之進家文書・玉置作太夫家旧蔵文書など、『県史』『市史』からも漏れた少なからぬ新出文書が確認されており、さらには市立博物館の精力的な研究・展示活動により、和歌山市域外の関係文書も多数発掘されている。そこで、明治・大正期に作成された影写本や、昭和以降に撮影された写真帳等、豊富な複本類を持つ史料編纂所と共同することで、当該地域所在史料の調査・研究を行いたい。

（二）研究の成果

以下、調査・撮影を行った史料を挙げる。

玉井文書（市博所蔵）／淡嶋神社文書（市博借用中）／善勝寺文書（市博寄託）／総持寺文書（同上）／西正寺所蔵文書（和歌山市）／念誓寺文書（同上）／室谷文書（同上）／且来八幡神社（海南市）／専徳寺所蔵文書（泉南市）／十津川村宝蔵文書（十津川村）／風屋文書（十津川村教育委員会寄託）／下葛川文書（同上）

以上の内、玉井文書は新出、他は『和歌山県史』『和歌山市史』に収められているものの、所在が確認できてなかったものもあり、今回その確認ができた。また十津川村所在文書は紀伊守護畠山氏関係の文書を多く含む。いずれも今後の和歌山中世研究における活用が望まれる。

研究課題 高野山伝来聖教奥書集成にむけての調査・研究―平安・鎌倉時代

を中心として―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 藤本孝一（龍谷大学）

所内共同研究者 渡邊正男・高橋慎一郎

所外共同研究者 坂口太郎（高野山大学）・土居夏樹（高野山大学）・野田悟（高野山大学）・木下浩良（高野山大学）・大河内智之（和歌山県立博物館）・小林雄一（漢字文化研究所）

研究の概要

（一）課題の概要

近年、日本中世史の分野では、寺院史料の重要性が強く認識されつつある。とくに、南都仏教や真言・天台宗の寺院に伝来した聖教には、仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会史・文化史に関わる内容を持つものが多く、豊かな可能性を持つ史料群と言える。

本研究は、高野山の主要な子院に伝来した平安・鎌倉時代の聖教を研究対象とし、調査・検討を進めるものである。高野山の聖教は、明治以来、多くの調査がなされてきた。しかし、子院伝来の聖教は、古文書に比してさほど情報公開が進んでおらず、研究の促進に繋がっていない。とりわけ、聖教の研究を進める上では、奥書情報の把握が不可欠であるが、既往の調査成果が

ほとんど学界で共有されていない上、調査未着手の聖教も数多く残っている。そこで、本研究では、金剛三昧院・西南院・三宝院・持明院・真別処などの子院に伝来した聖教（西南院以外の聖教は、高野山大学図書館に寄託中）の調査に取り組む。とくに、奥書類の翻刻・集成を通して、今後の研究者による聖教調査・研究の基盤を整える。さらに、平安・鎌倉時代の密教史に関わる重要な聖教にも、できるかぎり個別的な検討を加える。

(2) 研究の成果

新型コロナウイルス感染症の拡大が止まらなかったため、当初の研究計画を縮小せざるをえなかったが、研究代表者の藤本と共同研究員の坂口が協力しながら、調査・研究を進めた。とくに、西南院聖教や金剛三昧院聖教（高野山大学図書館寄託）を調査して、平安・鎌倉時代の識語・奥書類を抽出した。その過程で、鎌倉後期の証道房実融（金剛三昧院長老、意教流証道方の祖）が写した『祈雨』や、小島流聖教の『聖天』などに、多くの紙背文書が含まれていることが判明した。とりわけ、後者には永仁三年（一二九五）の「西園寺実兼御教書」などの讃岐国関係文書があり、史料の価値は非常に高いと考えられる。

また、従来から取り組んでいた重要文化財『西南院文書』の翻刻を続行し、第四巻の翻刻を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三二号に発表した。さらに、二〇二一年一月に金剛三昧院経蔵で見つかった棟札四枚を調査し、①正応四年（一二九二）六月一日、②明応五年（一四九六）五月一日、③永正一七年（一五二〇）七月七日、④寛永元年（一六二四）四月五日の年紀を持つ銘文を確認した。①②③は経蔵（国指定重要文化財）、④は客殿（同上）の棟札であり、とくに①は高野山最古の棟札の可能性が高く、きわめて貴重である。これらの棟札によって、貴重な聖教を伝えてきた金剛三昧院経蔵の沿革（修復や移転）が明らかとなった。

なお、上記の棟札については、『毎日新聞』和歌山版で取り上げられた（二〇二二年三月一三日）。金剛三昧院の経蔵やその伝来史料の価値に対する社会的認知度を高める上で、有意義な記事であった。関係各位に深く感謝したい。

研究課題 聖衆来迎寺史料の調査・研究

研究経費 三〇万九千四百円（前年度よりの繰越分）

研究組織

研究代表者 高橋大樹（天津市歴史博物館）

所内共同研究者 林 晃弘・末柄 豊・村井祐樹

所外共同研究者 和田光生（天津市教育委員会）・井上 優（滋賀県教育委員会・琵琶湖文化館）

研究の概要

(1) 課題の概要

滋賀県大津市比叡辻に所在する聖衆来迎寺は、最澄の建てた地藏教院を起源とし、源信が念仏道場として再興したという所伝を有する天台宗の古刹である。もとは比叡山横川に伝来した国宝『六道絵』一五幅を所蔵するほか、天正年間京都に所在した元応寺を併合したこともあざかり、多数の文化財を伝えている。

東京大学史料編纂所は、早くに明治二一・大正二二・昭和二年の三度にわたる史料採訪を行い、文書・聖教取り混ぜて少なからぬ影写本・謄写本を作成している。その後、『六道絵』については、近年本格的な調査研究がなされたのに対し、文献史料については、一九八四年に琵琶湖文化館が「特別展聖衆来迎寺」を開催したのを契機に、江戸時代成立の寺史『来迎寺要書』を紹介した程度で、本格的な調査研究はなされていない。『新修大津市史』編纂のための調査でも、対象史料は一部に限られ、写真撮影もほとんどなされなかった。

今般申請者の勤務先である大津市歴史博物館では、仏像・絵画・古文書を中心に同寺の寺宝展を開催することとなり、付随して所蔵史料についても悉皆調査の御許可を得た。この機会を生かし、文書・聖教の総合調査を行いたい。予備的な調査によって影写・謄写の対象になった中世史料の一部の存在を確認したほか、未調査の近世史料が多数存在していることが判明しており、近世史料も視野に取めた調査研究をすすめたい。

(2) 研究の成果

二〇二一年度は、前年度に十分に実施できなかった聖衆来迎寺所蔵の近

世・近代文書の整理を行った(天津市歴史博物館寄託分)。近世文書は、①聖衆来迎寺の経営等に関するもの、②高島郡阿弥陀寺(真言律宗・西大寺末、聖衆来迎寺が兼帯)に関するものに分けられる。それぞれについて調査により得られた主な知見は以下のとおりである。

①聖衆来迎寺近世文書。開帳関係の史料が比較的多く残されている。なかでも宝暦九年(一七五九)からの江戸湯島天神における開帳については日記がある(一〇六四)。これらと関連する寺外の史料により、開帳に関する手続きや霊宝の構成、人びとの信仰のありようなどが具体的に明らかになる。

また寛文三年(一六六三)・四年に聖衆来迎寺の僧(林昌坊カ)が京都・大坂等に向いの際の記録があり、概して簡略な記述ではあるが、訪問先の様子や、人的な交流を知ることができる(三一〇七〇)。注目される記述としては、美作国津山藩の森長継の家臣と知人になり、織田信長家臣で下坂本にて討死した同家の祖森可成についての情報を伝え、求めに応じて書付を渡したことを記す。これは『来迎寺要書』の記事とも関連するものである。

②高島郡阿弥陀寺関係文書。特に分量が多いのが同寺の朱印改の関連史料であり、宝暦一〇年(一七六〇)・天明七年(一七八七)・天保一〇年(一八四〇)・嘉永七年(一八五四)の一件記録が残されている。宗派をまたいだ兼帯寺院の僧による特異な事例であり、寺領の所在する堀川村の相給領主蜂屋氏との関係においても例外的な面がある。近世の本末関係のあり方や朱印地寺院の領主的な性格を考える上で注目される。また、「阿弥陀寺年中行事什物并鑑院江引渡し定式」(三一四四―一六)は、阿弥陀寺と周辺村落の間わりがわかる好史料である。

研究課題 高野山西南院文書の調査・研究―高野山伝来史料の研究資源化にむけて―

研究経費 一万八〇四〇円(前年度よりの繰越分)

研究組織
研究代表者 坂口太郎(高野山大学)
所内共同研究者 渡邊正男
所外共同研究者 藤本孝一(龍谷大学)・土居夏樹(高野山大学)・野田

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究は、高野山西南院に伝来した古文書・聖教・石造物について、調査・研究を行なうものである。西南院は高野山の子院の中でも、屈指の文化財を伝えることで知られる。その中核となるのは、重要文化財『西南院文書』全一巻(高野山霊宝館寄託)であるが、それ以外にも貴重な古文書・聖教が数多く保管されている(『西南院現蔵史料』)。

本共同研究では、二〇一八―一九年度に、重要文化財『西南院文書』の原本調査・撮影を行ない、同文書の翻刻や『西南院現蔵史料』の調査にも着手した。引き続き、重要文化財『西南院文書』の翻刻を継続するとともに、『西南院現蔵史料』についても、より正確な全体像を把握すべく、調査・撮影を進める。さらに、高野山最古の紀年銘を持つ鎌倉時代の五輪塔など、西南院境内にある石造物の調査を行ない、文献史料と併せて検討することで、中世高野山をめぐる信仰について検討を進めていく。

(2) 研究の成果

新型コロナウイルス感染症の拡大が止まなかったため、当初の研究計画を縮小せざるを得なかったが、研究代表者の坂口と共同研究員の藤本が協力しながら、調査・研究を進め、従来から取り組んでいた重要文化財『西南院文書』の翻刻を続行し、第四巻の翻刻を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三二号に発表した。同史料は、一九六九年に西南院で火事が発生した際に、大きな焼損を蒙った文書を含んでおり、翻刻にあたっては、損傷以前に撮影された史料編纂所架蔵のマイクロフィルムから、大きな便益を受けた。

外部資金による研究・成果

科学研究費

悟(高野山大学)・木下浩良(高野山大学)・辻 浩和(川村学園女子大学)・澤田裕子(京都光華女子大学)

天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明

- 一、研究費種目 基盤研究(S) 一七H〇六一七
- 二、課題番号 二〇一七年度～二〇二一年度の最終年度
- 三、研究期間 直接経費二九三〇万円、間接経費八七九万円
- 四、研究経費
- 五、研究組織

研究代表者

田島 公

研究分担者

遠藤基郎・小塩 慶・末柄 豊・藤原重雄・松澤克行(以上、史料編纂所)、藤井恵介(東京大学名誉教授、吉川真司(京都大学文学研究科教授)、金田章裕(京都大学名誉教授、京都府立京都学・歴史館館長)、小倉慈司(国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系教授)、馬場 基(奈良文化財研究所都城発掘調査部室長)、加藤悠希(九州大学芸術工学研究院准教授)、岸 泰子(京都府立大学文学部准教授)、鶴見泰寿(奈良県立橿原考古学研究所企画学芸部資料課資料係長)

研究協力者

山口英男・山口和夫・渡邊正男・金子 拓・林 晃弘・遠藤珠紀・黒須友里江(以上、史料編纂所)、月本雅幸、川尻秋生(早稲田大学文学学術院教授)、鍛冶宏介(京都先端科学大学人文学部歴史文化学学科教授)、北 啓太(元宮内庁京都事務所所長)、満田さおり(宮内庁京都事務所内閣府事務官(研究職))、飯田剛彦(宮内庁正倉院事務所所長)、菱田哲郎(京都府立大学文学部教授)、名和 修(公益財団法人陽明文庫常務理事・同文庫長)、名和知彦(同事務長)、原秀三郎(静岡大学名誉教授)、神尾愛子・村瀬貴則(以上、西尾市岩瀬文庫学芸員)、Jason Webb(南カルフォルニア大学准教授)、海野 聡(東京大学大学院工学系研究科准教授)、横田冬彦(京都大学名誉教授)、

六、研究の概要

(1) 研究の目的

過去四回一七七年間に及ぶ大型科研費による禁裏・公家文庫の目録学的研究の集大成として、

1 東京大学史料編纂所閲覧室で公開中の宮内庁書陵部等に収蔵される禁裏・公家文庫収蔵史料約一〇〇万画像にメタデータを付し、既存の公開システムを改良して、Web(インターネット)公開を行う。

2 京都御所東山御文庫所蔵史料及び京都御所・同離宮所蔵歴史・文学・建築・美術・庭園等の学術資料の高度利用化を行う。

3 日本目録学の基盤を固め浸透させる為に、家ごとの文庫史・蔵書目録・研究論文等の体系化とその総体の提示を行い、研究成果の国際発信を行う。

4 日本古典学振興の為にDB・研究支援ツールの作成・公開と研究者・市民向け古典学の公開講座を継続して行う。

以上等を通じて、日本古典学の研究環境を大きく改善し、研究者に希望と与える新しい史資料や研究視角を提供すると共に、前近代日本の「知の体系」の構造と伝来を通時的・共時的に解明する。

(2) 研究実績の概要

①禁裏・公家文庫所蔵史料のデジタル画像の公開と蒐集 二〇一九年度末の二〇二〇年三月三日より史料編纂所史料画像閲覧システム(Hi-CAT Plus)からデジタル画像のWeb公開を開始した、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」五六〇、九二三画像、さらに二〇二〇年十二月より公開した山口県立山口図書館所蔵今井似閑本三二、三七二画像の安定的な公開を持続

谷直樹(大阪くらしの今昔館館長)、清水重敦(京都工芸繊維大学大学院教授)、登谷伸宏(京都工芸繊維大学准教授)、志村佳名子(信州大学学術研究院教育学系助教)、佐竹朋子(東京大学史料編纂所特任研究員)、安 洪賛・糸賀優理・袁 也・榊 佳子・芝崎有里子・高橋宙暉・生江麻里子・古田一史・渡辺奈穂子(以上、東京大学史料編纂所学術専門職員)

し、二〇二二年二月からは西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本七〇、七三〇画像も公開した（累計Web公開数は六六四、〇二五画像）。その結果、二〇二一年度は所内外からアクセス数一六七、七七九件を得た。陽明文庫HPから試験公開を開始した宸翰・書状類七、七〇九画像も含め合計六七一、七三四画像をWeb公開できた。蒐集した図書寮文庫所蔵禁裏・公家文庫所蔵史料一六三、七六九画像にWeb公開の為のメタデータを付与した。

②京都御所関係資料の高度デジタルした京都御所東山御文庫本・同別置本五一、六五二画像にメタデータを付し、閲覧室公開の準備を完了した。さらに、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵内匠本「中井家文書」中の「京都御所造営関係資料」のうち寛政度の残りのデジタル撮影約二万画像の撮影を終了し、寛政度と安政度の「簿冊類」累計四一、四四〇画像の蒐集を完了した。「中井家文書研究会」を継続し、研究成果を二〇二二年二月一八日に京都府立京都学・歴史館で開催した第二回国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」で四件報告した。

③日本目録学の総体の提示と④古典学DBの作成と発信研究成果や東山御文庫本マイクロフィルムの追加目録を含む「禁裏・公家文庫研究」八輯や最終報告書、三条西家本除目書・同紙背文書の影印・翻刻・解説本を刊行し、『日本古代人名辞典』増補改訂版(約三万二千項目)の原稿作成・校正を行った(二〇二三年刊行予定)。その他、天皇家文庫と主要公家文庫の文献目録を作成した。また、対面での市民向け公開講座「続・古典を読む―歴史と文学」(於金鶏会館「長野市」)を二二回開催し、七講座分の「講演集」、第二回国際研究会の「報告集」、開催を延期した陽明文庫講座(於歴史館)の資料「陽明文庫講座図録3」を、それぞれ刊行した。

(3) 研究会・講演会、刊行物、発表論文

【本研究費主催・共催・講座】(すべて対面)

①-1公開講座【続・古典を読む―歴史と文学】「いま明かされる古代46&中世」
会場…金鶏会館(県立長野高校同窓会館/長野県長野市)
主催…本科学研究費
協力…一般社団法人長野教育文化振興会

参加人数…のべ三五〇名

第二回 四月一〇日(土)

高岸 輝(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
「日本中世の肖像画を考える―「伝源頼朝像」をめぐる議論とその行方―」

第三回 四月二四日(土)

近藤 成一(放送大学教養学部教授・東京大学名誉教授)
「モンゴル戦争と信濃武士―『蒙古襲来絵詞』を読み解く―」

第四回 五月八日(土)

本郷 真紹(立命館大学文学部教授)

第五回 五月二二日(土)

川尻 秋生(早稲田大学文学部教授)
「聖徳太子と仏教 太子没後一四〇〇年を前に―」

第六回 六月一三日(日)

山本 聡美(早稲田大学文学部美術史コース教授)
「文字とことば―文字文化研究の最前線から―」

①-2公開講座【続・古典を読む―歴史と文学】「信濃国・志久見郷、市河家ゆかりの武家文書群「市河文書」を読み解く」

会場・主催・協力…①-1と同じ 参加人数…のべ二〇〇名

第一回 八月五日(木)

近藤 成一「木曾義仲の下文」

第二回 八月六日(金)

近藤 成一「承久の乱における北条義時の手紙」

第三回 八月二六日(木)

近藤 成一「信濃守護・北条重時の御教書」

第四回 八月二七日(金)

近藤 成一「建武の新政と市河氏」

①-3公開講座【続・古典を読む―歴史と文学】「いま明かされる古代47&中世」

会場・主催・協力…①-1と同じ 参加人数…のべ三五〇名

第一回 九月二五日(土)

近藤 成一
「モンゴル戦争と信濃武士 その2―『蒙古襲来絵詞』を読み解く」

くー」

第二回 一〇月二日(土)

山本 聡美

「中世絵画に描かれた人と鬼の歴史―敵か味方か? 親切な鬼と怖い鬼―」

第三回 一〇月九日(土)

川尻 秋生

「信濃源氏の祖・平賀義信の実像に迫る!」

第四回 一〇月一六日(土)

本郷 真紹

第五回 一〇月三〇日(土)

高岸 輝

「国宝「日月山水図屏風」の謎に迫る―大画面絵画にみる中世人の世界観―」

①・④ 二〇二一年連続公開講座「三条西家本「除目書・同紙背文書」を読む―「明治大学図書館所蔵三条西家本除目書」影印本の刊行を記念して―」

会場…①・④と同じ

主催…本科学研究費・「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト

共催…二〇一九・二〇二一年度科学研究費(若手研究)「古代・中世の除目研究の基盤形成とその政治制度史的考察―三条西家の除目書を中心に―」(研究代表者・志村佳名子)

協力…一般社団法人長野教育文化振興会 参加人数…のべ一八〇名

講演内容は、田島公企画・監修『愛媛県立歴史博物館三条西家本「除目書・同紙背文書」を読む―』明治大学図書館所蔵三条西家本除目書」影印本の刊行を記念して―」講演集」東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―一五に収録。

第一回 一一月一三日(土)

田島 公 「連続公開講座の趣旨説明」

牧野 淳司(明治大学文学部文学科日本文学専攻専任教授)

「三条西家本除目書の「再発見」の経緯と古典文学研究者から見た除目―付、廷臣の官位昇進をめぐる唱導」

志村佳名子(信州大学学術研究院教育学系助教)

「古代・中世の除目儀と除目書」

第二回 一一月一四日(日)

田島 公

「後三条天皇の事績と叙位・除目の儀式書『院御書』―明治大学図書館所蔵三条西家本『除秘鈔』『再発見』の意義―」

第三回 一一月二〇日(土)

田島 公

「三条西家本『除秘鈔』と源俊明・源有仁・三条実房・二条教基・三条西公条―後三条天皇撰『院御書』の利用・伝来―」

第四回 一一月二二日(日)

志村佳名子

「三条西家本『無外題春除目』とその伝来―九条良経撰『春除目抄』との関係を中心に―」

第五回 一一月二七日(土)

末柄 豊

第六回 一一月二八日(日)

末柄 豊

② 第二回 国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」会場参加者…六一名、NOKI参加者…四名 合計六五名

※詳細は後掲「国際研究会」の頁に記載。

【編著書】一六件

1 明治大学除目書刊行委員会(田島公・末柄豊・牧野淳司・南保勝美)編

『明治大学図書館所蔵三条西家本 除目書』(八木書店)、全三五二頁、二〇二一年

2 東京大学史料編纂所・陽明文庫編、名和修・尾上陽介・田島公企画・監

- 修『陽明文庫講座図録3—陽明文庫資料からの新発見(2)—』(東京大学史料編纂所・公益財団法人陽明文庫)、全三三三頁、二〇二二年
- 3 田島公企画・監修『国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地(2)」報告集』(東京大学史料編纂所)、全九二頁、二〇二二年
- 4 田島公企画・監修『徳島県立歴史博物館「三条西家本」除目書・同紙背文書』を読む—「明治大学図書館所蔵三条西家本除目書」影印本の刊行を記念して—』講演集(東京大学史料編纂所)、全一〇三頁、二〇二二年
- 5 田島公編『禁裏・公家文庫研究』第八輯(思文閣出版)、全四二二頁、二〇二二年
- 6 田島公編『天皇家・公家文庫取蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展—知之体系の構造伝来の解明』二〇二〇(令和二)～二〇二二(令和四)年度科学研究費補助金「基盤研究(S)課題番号17H06117」研究成果報告書(最終成果報告)(東京大学史料編纂所)、二〇二二年
- 7 東寺文書研究会(遠藤基郎・高橋敏子)編『東寺執行日記1』(思文閣出版)、全三〇〇頁、二〇二二年
- 8 西村幸夫・藤井恵介・角田真弓・木下直之・鈴木淳『シンポジウム「本郷キャンパスの形成とそれを語る学術資産」』(東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター)、全八三頁、二〇二二年
- 9 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士・藤井恵介・他『岩波仏教辞典 第三版』(岩波書店)、全二二四六頁、二〇二二年
- 10 吉川真司『律令体制史研究』(岩波書店)、全五三六頁、二〇二二年
- 11 吉川真司他『日本の歴史 古代・中世編』(ミネルヴァ書房)、全四〇三頁、二〇二二年
- 12 金田章裕『地形で読む日本—都・城・町は、なぜそこにできたのか』(日経BP・日本経済新聞出版本部)、全二七一頁、二〇二二年
- 13 川尻秋生他編『馬と古代社会』(八木書店)、全五六八頁、二〇二二年
- 14 川尻秋生他編『シリーズ地域の古代日本 東アジアと日本』(KADOKAWA)、全二七二頁、二〇二二年
- 15 川尻秋生他編『シリーズ地域の古代日本 筑紫と南島』(KADOKAWA)、全二七二頁、二〇二二年
- 16 川尻秋生他編『シリーズ地域の古代日本 東国と信越』(KADOKAWA)、全三三〇頁、二〇二二年
- 【研究論文・翻刻等】四一件
- 1 田島公『第二部 翻刻 第一章 除秘鈔』編著書1、pp.19-151、二〇二二年五月
- 2 田島公『第三部 解説 第一章 除秘鈔』編著書1、pp.205-268、二〇二二年五月
- 3 田島公『保延二年四月十七日付「信濃国宮田村司平家基解」』編著書2、pp.10-11、二〇二二年
- 4 田島公『後三条天皇の事績と叙位・除目の儀式書』院御書—明治大学図書館所蔵三条西家本『除秘鈔』「再発見」の意義—、編著書4、pp.16-24、二〇二二年
- 5 田島公『三条西家本『除秘鈔』と源俊明・源有仁・三条実房・二条教基・三条西公条—後三条天皇撰『院御書』の利用・伝来—』編著書4、pp.25-59、二〇二二年
- 6 田島公『明治大学図書館所蔵三条西家旧蔵本『除秘鈔』の基礎的研究』、編著書5、pp.21-80、二〇二二年【研究論文・翻刻等】1を改題し、そのうち「一書誌」を除き、誤りを正し、史料の重複を削除し、新規に必要な史料を加えたもの
- 7 田島公『三川・穂・三野・科野・越の地域と社会』、編著書5、pp.241-287、二〇二二年
- 8 田島公『八・九世紀の参河国司補任者の特徴と国政—遣唐使・文人・医薬官人、祥瑞、豊前一—』、『新編西尾市史研究』八号、pp.30-44、二〇二二年、査読有
- 9 田島公『唐招提寺所蔵「坂上忌寸石栢供養経」の日付—藤原仲麻呂(恵美押勝)を斬った軍士・坂上石栢の供養経の日付—』編著書6、pp.25-29、二〇二二年三月
- 10 田島公『陽明文庫本『勘例』七巻の基礎的考察』、編著書6、pp.30-35、二〇二二年
- 11 遠藤基郎『中世起請文の成立と関白師通の急逝』『東京大学史料編纂所

研究紀要』三三二、 pp.13-28、 二〇一二年

12 太田克也・藤原重雄「宮内庁書陵部所蔵九条家本『朝覲行幸次第草』・『朝覲行幸次第』—藤原忠通「玉林」佚文拾遺—」（『東京大学史料編纂所研究紀要』三三二、 pp.93-105、 二〇一二年三月）

13 藤原重雄「慈鎮和尚夢想記」（京都文化博物館編『承久の乱』、 pp.200-201、 二〇一二年）

14 藤原重雄・高島昌彦「建暦元年「藏人所孔雀経御修法用途奉送状」—醍醐寺地蔵院旧蔵の宿紙文書—」（『画像史料解析センター通信』92、 pp.14-22、 二〇一二年）

15 藤原重雄「宮内庁書陵部所蔵九条家本『定能卿記部類』二「臨時行幸上」編著書5、 pp.155-176、 二〇一二年三月）

16 藤原重雄「権大納言某書状」編著書2、 pp.28-30、 二〇一二年）

17 藤井恵介・松尾浩樹「よみがえる蔵春閣特別対談」、『たこそ』467、 pp.3-5、 二〇一二年）

18 小塩慶「非摂関の太政大臣—九条家本「被任太政大臣其闕以他人任大臣例」から—」編著書5、 pp.81-98、 二〇一二年）

19 末柄豊「第二部 翻刻 第三章 紙背文書」編著書1、 pp.183-201、 二〇一二年）

20 末柄豊「第三部 解説 第三部 紙背文書」編著書1、 pp.315-334、 二〇一二年）

21 末柄豊「広橋兼郷書状」編著書2、 pp.16-17、 二〇一二年）

22 末柄豊「近衛種家書状案」編著書2、 pp.18-19、 二〇一二年）

23 末柄豊「三条西実隆・公条父子とその時代—戦国時代の貴族のくらし—」編著書4、 pp.60-73、 二〇一二年）

24 末柄豊「三条西家本『除目書』紙背文書を読む—京都と地方との交流—」編著書4、 pp.74-91、 二〇一二年）

25 松澤克行「近衛信尋書状并後水尾天皇勘返」編著書2、 pp.6-7、 二〇一二年）

26 加藤悠希「Knowledge of Past Japanese Architecture in the Edo and Early Meiji Periods」『Subin Xu et al. eds. East Asian Architecture in Glo-

balization: Values Inheritance and Dissemination』、 pp.534-540、 二〇一二年）

27 加藤悠希「近世初期における作事・作庭と大工の職分—醍醐寺三宝院および島津家江戸屋敷の事例から—」（『近世庭園の研究—安土桃山・江戸時代—』、 pp.23-30、 二〇一二年）

28 鶴見泰寿「創建期の東大寺」『本郷』第一五三号、 pp.26-28、 二〇一二年）

29 鶴見泰寿「上町台地をあるきながら古代宮都について考える」『友史会報』第六三六号、 pp.1-9、 二〇一二年）

30 鶴見泰寿「古代宮都と大和の考古学」『第四一回奈良県立橿原考古学研究所公開講演会「大和の考古学 附属博物館リニューアル記念」』第四一回、 pp.17-22、 二〇一二年）

31 鶴見泰寿「古代宮都と大和の考古学」『第一一回奈良県立橿原考古学研究所東京公開講演会「大和の考古学 附属博物館リニューアル記念」』第一一回、 pp.17-22、 二〇一二年一月）

32 小倉慈司「讃岐国司解端書（いわゆる「藤原有年申文」）の再検討」編著書5、 pp.3-20、 二〇一二年）

33 小倉慈司「東山御文庫本マイクロフィルム内容目録（稿）（3）」編著書5、 pp.25-172、 二〇一二年）

34 遠藤珠紀「近衛信尹書状」編著書2、 pp.20-21、 二〇一二年二月）

35 満田さおり「京都御所にみる復古の建築空間とその使われ方」編著書3、 pp.42-47、 二〇一二年一月）

36 名和修「金珙瑯」編著書2、 pp.2-3、 二〇一二年）

37 名和知彦「元禄三年正月十三日詔書・宣旨—関白を任命する文書の原本—」編著書2、 pp.24-25、 二〇一二年）

38 志村佳名子「古代・中世の除目儀と除目書」編著書4、 pp.10-15、 二〇一二年）

39 志村佳名子「三条西家本『無外題春除目』とその伝来—九条良経撰「春除目抄」との関係を中心に—」編著書4、 pp.52-59、 二〇一二年）

40 佐竹朋子「『後三藐院記』—「東宮今度御服再興着御之事」について—」編著書2、 pp.30-32、 二〇一二年）

41 佐竹朋子「舟橋様御文庫書籍目録」の紹介ならびに翻刻」編著書6、pp.1-24、二〇二一年

【講演・口頭報告など】一〇件（他本研究費主催一〇件 計二〇件）

1 藤原重雄「師岡・法華寺所蔵の大殿若経の調査」特別展「武蔵国鶴見寺尾郷絵図の世界」関連講座（招待講演）二〇二一年五月八日

2 藤原重雄「歴博甲本」洛中洛外凶屏風」に描かれた犬馬場」史学会大会・日本中世史部会、東京大学文学部、二〇二一年一月一四日

3 吉川真司「日本古代の「仏都圏」とその変容」宮と都の東アジア比較宗教史シンポジウム、二〇二一年一月七日

4 吉川真司「Before Written Oaths（起請文以前）」Oath Workshop in University of Vienna（国際学会）、二〇二一年一〇月二三日

5 鶴見泰寿「古代宮都と大和の考古学」第四一回奈良県立橿原考古学研究所公開講演会（奈良県立橿原考古学研究所・由良大和古代文化研究協会、二〇二一年一月三日）

6 鶴見泰寿「飛鳥宮跡を中心とした発掘調査について」世界遺産教室あすか学（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）

7 鶴見泰寿「古代宮都と大和の考古学」第一一回奈良県立橿原考古学研究所東京公開講演会「大和の考古学 附属博物館リニューアル記念」（奈良県立橿原考古学研究所・由良大和古代文化研究協会・読売新聞社）、二〇二一年一月二日

8 鶴見泰寿「蘇我氏と飛鳥」連続講座「明日香学」、二〇二一年一月三〇日

9 鶴見泰寿「上町台地をあるきながら古代宮都について考える」橿原考古学研究所友史会二〇二一年一〇月例会、二〇二一年一〇月一七日

10 小倉慈司「写本の再調査による大日本古記録本『小右記』の補訂」『小右記』シンポジウム、二〇二一年二月一八日

【主な出張・調査先および概要】

金鶏会館（県立長野高校同窓会館）【続・古典を読む―歴史と文学】の企画打合せ・当日運営等（四・五・六・七・八・一〇・十一月）。公益財団法人陽明文庫 同文庫所蔵資料の調査、「陽明文庫講座」の企画・協議・準備等

（九月・十二月）。京都府立京都学・歴史館 国際研究会、「陽明文庫講座」の企画打合せ・当日運営等（七月・十二月）。一般社団法人深江郷土資料館 伊勢神宮式年遷宮で使用された菅御笠・菅御翳、大嘗祭で使用された御菅蓋と同型物を熟覧（九・十二月、二〇二二年二月）。奈良県立橿原考古学研究所 増補改訂日本古代人名の増補改訂原稿のための調査（八・十二月）。奈良国立博物館 増補改訂日本古代人名の増補改訂原稿のための調査、展覧中の「正倉院文書」の熟覧（八・十一月）。

【研究成果の公開・紹介】

「禁裏・公家文庫研究の窓」
<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/kodai/kinri-kyuge-index.html>
Hi-CAT Plus

<https://www.wap.hi-u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

「東京大学史料編纂所 Hi-CAT Plus（ハイキャットプラス）を使う」（遠藤基郎作成）
https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/endo/help/usersguide_of_HCP.pdf

撰関家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究

一、研究費種目 基盤研究(A)

二、課題番号 一七H〇〇九二六

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二一年度

四、研究経費 直接経費五三〇万円、間接経費一五九万円
繰越金一〇五万円

五、研究組織

研究代表者 尾上陽介
研究分担者 藤井讓治（京都大学）・島谷弘幸（九州国立博物館）・佐藤泰弘（甲南大学）・恵美千鶴子（東京国立博物館）・遠藤珠紀
研究協力者 高島晶彦

六、研究の概要
(1) 研究の目的

本研究課題は、平安時代以来、千年以上にわたって我が国の政治・文化を形作ってきた撰閲家に伝来した膨大な史料群について、目録情報とデジタル画像の整備・公開による研究資源化を進め、伝統的公家文化の総合的研究を行うことを目的としている。

具体的には、撰閲家の内で唯一関係史料群がほぼ散逸することなく伝来している近衛家を研究対象とし、公益財団法人陽明文庫等に所蔵される近衛家伝来史料群のうち、古文書・古記録や書蹟・絵画等を中心に、網羅的な原本調査により目録情報を精緻化し、重要史料の高精細デジタル撮影と画像データの東京・京都における公開を進める。同時に従来利用されることの少なかった大規模史料群全体を各方面から分析し、伝統的公家文化の諸相について研究を深化させる。また、顕微鏡などを利用した詳細な紙質分析を通して撰閲家を使用した紙の実態を調査し、公家社会における紙の使用法についても考察する。

(2) 研究の実績

二〇二一年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、東京から京都市の陽明文庫に出張して原本調査を計画通り進めることが不可能となった。そのため調査は極めて限定的とならざるを得なかったが、可能な限り進めることにより、古文書・古記録・典籍・書蹟などを中心とする近衛家伝来史料の目録情報の精緻化と、重要史料の高精細デジタル撮影を引き続き行った。

二〇二一年度は出張の機会が限られたため、調査対象を改めて再検討した。その結果、近衛家に仕えた家司により延宝三年（一六七五）から明治五年（一八七二）までの約二百年間に亘って記録され、近世における撰閲家の活動をよく伝える『雑事日記』を中心に、原本調査とデジタル撮影を進めることとした。この史料は全体で三二四冊にも及ぶため、配分額（前年度からの繰越額を含む）を勘案し、これまでマイクロフィルムによる撮影も行われていなかった天保十年（一八三九）以降の部分から着手し、目録情報の精緻化と高精細デジタル撮影を進めた。その結果、『雑事日記』天保十年春夏冊から万延元年秋冬冊までの四四点、計一七二九コマについて撮影を行った。なお、これまで五年間で撮影史料の総計は九〇九六点、五三九四一コマである。

撮影した画像データは、科学研究費補助金（基盤研究(S)）「天皇家・公文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明―」（研究代表者田島公）による成果と併せて順次公開を進めている。

原本の調査・撮影と並行して、他機関所蔵分も含めた撰閲家伝来史料による近衛家歴代当主やその周辺人物の政治的・文化的活動や、伝統的公家文化についての研究を進め、成果の一部を学術論文や国際研究集会・学会報告、「陽明文庫講座」をはじめとする市民向けの公開講座等で発表した。

また、これまで継続してきた陽明文庫所蔵史料の紙質調査は感染症対策のため機会が得られなかったが、これまでの成果を利用しつつ、虫損など傷みのひどい原本について、研究協力者高島晶彦を中心に調査・修補を進めて研究資源化に努めている。二〇二一年度には、調査の結果、院政期の書写と考えられる『僧綱補任』下（一卷）について修理を進めた。

なお、二〇二一年度にも経費の一部を繰り越して原本調査を継続し、研究論文や書状のデジタル撮影目録など、これまでの成果をまとめた報告書を刊行する予定である。

統合史料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一八H〇三五七六
- 三、研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費五四〇万円、間接経費一六二万円
- 五、研究組織

研究代表者 山田太造

研究分担者

久留島典子（神奈川大学）、山家浩樹、本郷恵子、尾上陽介、金子 拓（東京大学史料編纂所）、伴瀬明美（大阪大学）、井上 聡（東京大学史料編纂所）、馬場 基（奈良文化財研究所）、高田智和（国立国語研究所）、後藤 真（国立歴史民俗博物館）、永崎研宣（人文情報学研究所）

連携研究者 西田友広、遠藤珠紀、小瀬玄士、畑山周平（東京大学史料
編纂所）

六、研究の概要

（1）研究の目的

本研究では、長年に渡り蓄積してきた目録、画像、本文、文字など大量かつ多様な人文科学データに対して、横断検索や画像アノテーションでは実現し得なかった有機的かつ意味的なデータ表現・提示を行うために、史資料の性格・種類・形態をも考慮しながら人文科学研究の実利用に耐えうる統合史資料画像データの生成手法を確立し、格納・管理・検索・提示を行うためのシステムを構築する。統合史資料画像データを作成・共有していくための史資料画像データキューレーション機能を、特定の機関やシステムのみではなく、ユニバーサルに利用可能な機能として提案し、本システムにこれを組み入れていく。統合史資料画像データを利用することで潜在的に関連する史資料を検出していく手法にも取り組んでいく。これらにより、統合史資料画像データ駆動型人文科学研究基盤の確立につなげていく。

（2）研究の実績

二〇二〇年度までの成果にもとづき、統合史資料画像データ駆動型人文科学研究基盤の確立を進めて行くため、以下に示す三課題を実施した。

1. 統合史資料画像データ生成手法の確立・統合史資料画像データの構造化をさらに洗練し、生成方法の確立を進めた。今年度は下記の二点を重点的に実施した。

1-1. くずし字等の文字画像データ：昨年度までにJSPS科研費18H05221との連携により本格稼働させた歴史文字連携検索システム「史的な文字データベース連携検索システム」について、文字を時空間特徴・文字コードといった属性をもとに整理し精密化に務めた。

1-2. 史資料画像とそれに紐づくデータの統合：これまで『上井覚兼日記』をベースにそこに登場する人名・地名に基づいて他の史資料へ関連付ける手法の確立を目的として進めた。宮崎県下、特に都城島津邸との連携を進め、JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業ととも、SHIPS DBのヒューマンHCAT Plusより都城島津邸所蔵史料画

像のウェブ公開を実現した（二〇二一年七月公開）。IIF Presentation APIを介して公開している。

2. 統合史資料画像データ管理システムの構築：1.の成果にもとづき、統合史資料画像データを格納・管理し、検索・提示していくための基盤確立を進めた。二〇二一年八月、史料編纂所歴史情報処理システムをリリースした。また、二〇二二年度にはSHIPS DBのリリースを行う予定である。これを機に画像ビューアを更新する予定であることから、IIF Image APIおよびIIF Presentation API さらには目録データなどを統合したコンテンツ提示システムを導入するためのプロトタイプを進めた。

3. 潜在的関連史資料の検出：1および2の成果にもとづき、画像データ内に出現する人名・空間・時間に対しアノテーションを付与し、それを用いて他の統合史資料画像データへ関連付けていく方法の確立につとめた。SHIPS DBへの適用、および、サービス化のため、史料編纂所で構築している歴史情報リポジトリ（人名・地名・文字をその出典とともに蓄積）の拡充に務めた。潜在的関連史資料の検出手法の確立を進めるため、『民経記』『愚昧記』などの他の時代の史料への適用も進めた。

日本中近世寺社〈記録〉論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化

一、研究費種目 基盤研究(A)

二、課題番号 一八H〇三五八三

三、研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度

四、研究経費 直接経費三二〇万円、間接経費九六万円
繰越金五八万八四八〇円

五、研究組織

研究代表者 遠藤基郎

研究分担者 高橋慎一朗・菊地大樹・藤原重雄・川本慎自・大田壮一郎
（立命館大学）・藤井雅子（日本女子大学）・横内裕人（京

都府立大学）

連携研究者 大藪 海（お茶の水大学）・貫井裕恵・三輪眞嗣（以上神

奈川県立金沢文庫）・林 晃弘・高橋敏子

研究協力者 関口真規子（埼玉県立歴史と民俗の博物館）・西 弥生

（綜芸種智院大学）・松村和歌子（春日大社）・坂東俊彦

（東大寺図書館）・石塚菜々美（日本女子大藤井ゼミ）

特任研究員 畠山 聡

学術支援専門職員 土山祐之・比企貴之・佐藤亜莉華

六、研究の概要

研究の実績

四ヶ年度目にあたる本年度も、いくつか具体的な成果を示すことができた。

南都方面では、春日大社について、写真帳の蒐集・翻刻の蓄積を進める一方で、その前半を昨年度雑誌掲載ずみの応仁・文明の乱直前の寛正五年の記録が完結した（藤原・土山『寛正五年中臣祐識記』（下）『東京大学史料編纂所研究紀要』三三）。兵庫関・諸荘園の回復要求の神木動座や押領者への呪詛行為や、またこの影響をうけ中止・延期された春日若宮祭・春日祭や、勸学院との年頭儀礼である古書などにも記事が及ぶ。その他、若宮での怪異記事（羽蟻・供物崩壊）などもある。

東大寺関係では、『中世東大寺記録出世後見・俱舎三十講関連史料』（『東京大学研究成果報告』二〇二一―一六）を刊行した（PDFオンライン公開）。同報告書には出世後見についての西尾論考があり、これは出世後見について今後の基礎となる成果である。東大寺法華会・維摩会関係の翻刻も蓄積した。畠山は、昨年度刊行した執行関係記録の一つを深く掘り込む成果を出した（畠山「室町時代における東大寺領清澄荘の経営について」『國學院雑誌』一二二）。東大寺記録の可能性を示したと言える。

中世後期東大寺堂衆の残した記録類については、昨年度に続き横内によって、オンラインで校訂作業が進められ、作業完了の見込みが立った。今後は発信に重点を移すこととなる。科研内部で二度の研究会を行った（報告者菊地・横内）。

京都方面では、太元帥法関連と義演日記を扱った醍醐寺関係の論考を得

た。石塚は太元帥法の歴史的変遷を明らかにし、室町後期・安土桃山期の毛利・島津の事例検討を行った。関口は、義演准后日記とその別記である有馬湯治日記の性格を明らかにし、日記の成立過程分析の方法論への提言をした（石塚「太元帥法の歴史的変遷」『日本女子大学院文学部研究紀要』二八、関口「義演准后日記とその紙背文書」『中世寺院の仏法と社会』永村真編、勉誠出版）。

『東寺執行日記』第1冊（思文閣出版）の刊行は特筆すべき成果である。鎌倉時代最末期から、応仁の乱直前までをおさめた、東寺寺内の運営はもとより、東寺長者を出す醍醐寺、さらには室町幕府との関係についても新たな知見を示すことができ、今後の活用が期待される。刊行に際しては、特に馬田綾子氏の協力を得た。感謝する次第である。引き続き第二冊の作業を進めており、錯簡の激しい応仁・文明記については内部研究会で検討した（遠藤）。

本プロジェクトに各種便宜を図っていただいた各所蔵機関には感謝申しあげる。

データ繫留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五三三
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費九七〇万円、間接経費二九二万円
- 五、研究組織

研究代表者 山口英男
研究分担者 末柄 豊・稲田奈津子・大隅清陽（山梨大学）・伴瀬明美（大阪大学）

六、研究の概要

（一）研究の目的

本研究は、データベース（以下、DB）の存在が日本史研究にとって不可

欠となりつつある状況を受け、混成・並列的に集積された多元的情報を連携・統合する点に歴史情報DBの特質があるという観点から、単なるデータ量の拡大だけでなく、研究・解析の支援に画期的な効果をもたらし、すぐれた研究利便性の提供を可能とする歴史情報DBの次世代展開を構想しようとするものである。そのため、基礎作業を効率化することで研究・解析を支援し、同時に史料解析の新たな成果と従来の蓄積との融合的な公開・発信を実現する「データ繋留型編纂支援・資源化システムMIDOH」の構築と、一定量のデータの充足が実現された現時点において電子媒体でこそ可能となる研究利便性を提供する「歴史情報コールシステムHICAL」を、史料編纂所歴史情報処理システムSHIPS上に開発・構築する。これによって、a 史料の編年解析（編纂）・研究支援、b 従来から蓄積されてきた成果と融合させた形のデータ公開、c 電子媒体でこそ可能となる研究利便性の提供という三つの効果の実現をはかる。そして、そのシステムの効果を検証する意味から、時代を連続的に縦貫する歴史情報の提供が可能となる点で学術的意義が高く、研究者の需要の強い平安時代史料を対象として、史料編年解析の作業を実際に進行させ、既存の成果と融合させた運用・公開をはかることで、平安時代史の研究環境高度化を実現することを目的とする。

このため、①MIDOH及びHICALの構築・運用、②平安時代編年体史料集のデジタルデータ化とMIDOHによるその公開・発信、③MIDOH・HICAL及び関連システムを利用した平安時代史料の編年解析の拡張と解析成果の公開・発信を研究期間中に実施する。

(2) 二〇二一年度の研究実績概要

①前年度までに開発したMIDOHのプロトタイプシステムから改良した本システムの構築を完了し、入力校正システムの整備と検索公開システムの開発を行った。あわせてHICALの仕様検討と開発打合せを実施した。また生成済の既存編年史料集データの登録作業を進行させた（約三万四〇〇〇件）。②自治体史及びその他の編年史料集・年表等から、平安時代編年史料データの生成を行った（網文・書目・書誌情報、約七三〇〇件）。③平安時代史料の編年解析データを生成・蓄積した（約八四〇〇件）。また解析成果の公開方法として、『大日本史料』の形態に準拠してMIDOHを通じて利

用するデジタル形式の史料集『九世紀編年史料』の編纂を行い、網文約五〇〇件、史料テキストデータ約一〇〇〇件を作成した。

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五三六
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費五五〇万円、間接経費一六五万円
繰越金三〇万円
- 五、研究組織

研究代表者 菊地大樹

研究分担者 井上 聡（史料編纂所）、七海雅人（東北学院大学）、佐藤 亜聖（滋賀県立大学）、榎本 涉（国際日本文化研究センター）、上相英之（奈良文化財研究所）

研究協力者 阿部龍一（ハーバード大学）、高橋敏子（元史料編纂所）、櫻井成昭（大分県教育委員会）、泉田邦彦（石巻市教育委員会）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究課題は、選択集中的な現地調査を実施するとともに、地域に蓄積された拓本・写真などの研究資源を整理公開し、新たな歴史叙述の開拓を目指す。そのために、デジタル技術による拓本作成および拓本撮影方法を研究開発し、金石文史料の研究資源化を図る。さらに、東京大学史料編纂所公開の金石文拓本史料データベースの改良により、他機関との連携も視野に入れた研究資源活用・分析の高度化を目指す。並行して、伝統文化的景観の保護や地域復興に資する歴史研究の方法を核としながら、文化財から歴史研究の素材へと金石文活用に向けた史料学的研究を展開し、歴史地理情報にも注目して従来の書誌情報とともに登録を進める。最終的に、歴史学全体が依存して

きた「文献史料」中心の歴史叙述から脱却し、一九八〇年代以降活発になってきた「モノ史料」を活用した歴史叙述の方法を、欧米におけるマテリアル・カルチャー研究の動向にリンクさせた国際的な日本研究の視野から展開し、情報発信してゆく。

(2) 研究実績

二〇二一年度は研究計画の三年目にあたり、研究代表者および分担者・協力者相互の十分な連携体制を維持しながら、班単位を中心として全体計画に沿ったそれぞれの具体的計画を遂行した。引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を十分に踏まえて、状況に即して出張計画などを中止・変更するなどの工夫を重ねた。年度前半にメンバーがオンライン上に集合し、打ち合わせ会議を行った。

①東日本班は、宮城県石巻市を中心的なフィールドとして、同市教育委員会と協力し、東日本大震災後の被災状況と復興への道程を見据えながら、引き続き確認調査及び拓本調査を進める予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大等に対応して調査はほとんど実施していない。代わりに、分担者七海雅人を通じて、南三陸町所在板碑につき現地調査を続ける田中則和氏と連携し、情報提供などを得た。『石巻の歴史』編纂資料のうち、ブローニー版のデジタル化を進めた。七海は東日本大震災レスキュー資料でもある、故勝倉元吉郎所蔵拓本のデジタル化を進めた。②西日本班は、高野山を中心的なフィールドとして、二年目に引き続き町石塔婆の拓本調査を進めた。おおむね四〇町石から調査を開始、今年度から実測図作成を見据えて正面文字部分の拓本採取のみに特化し、一二〇町石（丹生津姫神社二つ鳥居）まで終了した。分担者佐藤亜聖が組織した高野山町石塔婆研究会との相互協力により、多数の研究者や学生の参加協力も得て、引き続き石材調査や実測図作成も実施した。③デジタル技術・DB技術開発班は、初年度研究策定した仕様にもとづき、史料編纂所所蔵拓本のうち二〇一九年度に撮影した大型の拓本を除き引き続き撮影・デジタル化を進め、架蔵番号順に約一三〇〇コマをデジタル化した。また、協力者泉田邦彦と連携し、東日本大震災被災レスキュー資料を含む市教委保管資料の中から特定した『石巻の歴史』編纂資料のうち、一九九〇年代初頭までの現地景観を多く含む調査史料のブローニー版のデジ

タル化を引き続き進め、一部を残して作業を終了した。分担者上根英之は、ひかり拓本技術の開発を完成し、特許を取得した。これにもとづき各班のフィールドワークに帯同し、デジタルデータを収集した。④歴史地理情報研究班は、荘園絵図研究を進め、成果のデータ入力などを行った。⑤歴史叙述・国際日本学研究班は、新型コロナウイルス感染症拡大状況が続き、海外における研究集会への企画・参加の機会に恵まれなかったが、論文執筆その他の活動および研究発表等を行い、次年度以降の国際研究集会企画について協力者阿部龍一他と準備を進めた。分担者榎本渉は、中国大陸の金石文文化との比較研究のため、引き続き地方誌などから日本関係の碑文史料を抜き出し、蓄積した。

その他、書籍購入・拓本装備等によって研究推進の基盤整備を進めるとともに、各メンバーが論文執筆・研究発表等によって成果を発信した。

(3) 進捗状況

全体の研究計画は、新型コロナウイルス感染症拡大により出張計画等に大幅な中止・変更が生じたが、前年度の経験も踏まえて柔軟に対応し、引き続きおおむね順調に進展している。ただし、拓本デジタル化や拓本装備他の準備作業には予想以上の労力や経費も掛かり、次年度以降将来的な展望を持って全体計画を見直す段階に差し掛かっている。本年度も最初に打ち合わせ会議を実施したことにより、各班のアイデアや計画を相互に検討しながら共有し、万全の研究体制を維持することができた。東日本班では、過去の調査データの活用という課題について、『石巻の歴史』編纂資料のデジタル化を進め、現地に残る拓本のデジタル化も進んだが、再調査が必要な対象への調査実施が引き続き課題となっている。西日本班は、天候に恵まれ、コロナ感染が小康状態の時期を迎えるなどの好条件が重なり、調査が大きく進展した。それでもなお、四〇町石以降の側面拓本調査やそれらの装備・デジタル化などにつき、具体的な立案計画が必要である。デジタル班は、昨年引き続き史料編纂所所蔵拓本デジタル化の研究を予定通り進め、約一三〇〇コマの撮影・データ化を年度内に完了した。次年度以降は戦前収集分すべてのデジタル化を終了する予定である。これをふまえて次年度は、金石文拓本データベースの大幅な改修を計画している。歴史地理情報班も、他の研究グループと

の連携等により計画通り作業を進めた。国際班は、海外における宗教研究やモノ史料への注目などの研究動向に即して、本課題の成果発表のため国際研究集会企画を進める予定である。あわせて、金剛峰寺・高野町他、石巻市等と協力してシンポジウム等を企画し、国内での成果公開も促進する。

分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五三七
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費七二〇万円、間接経費二一六万円
繰越金六〇万円

五、研究組織

研究代表者 鶴田 啓

研究分担者 古川祐貴(鳥根県立大学北東アジア地域研究センター)、弘前

大学人文社会科学部)、木村直樹(長崎大学多文化社会学部)、石津裕之、須田牧子、荒木裕行(以上、東京大学史料編纂所)、村 和明(東京大学大学院人文社会学系研究科)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究では、データベースシステムの整備および史料画像の撮影・公開を行うことよって、分散して現存している大規模大名家史料である対馬藩宗家文書の効果的な研究資源としての利用環境を整備する。それとともに、幕藩制国家を構成する要素としての藩の性格や日朝交渉における対馬藩の役割および幕府・対馬藩関係が日朝関係に与えた影響を解明する。あわせて、研究成果を研究者以外に公開するための効果的な方法を実践的に研究し、これらによって歴史学の現在の課題への効果的な貢献方法を構築することを目的とする。

(2) 研究実績の概要

二〇二一年度は前年度に引き続き史料撮影およびデータベースシステムの

改良の作業を行った。撮影を行った史料は、研究代表者が勤務する東京大学史料編纂所が所蔵する宗家史料であり、撮影業者に発注して撮影を行い、それを東京大学史料編纂所のデータベースから公開した。これによってインターネット上で宗家史料の検索および閲覧を可能にした。本年度までの撮影によって、「江戸藩邸毎日記」は全四九〇冊が閲覧可能になった。データベースの改良は、一九九年度に作成したデータベースへの機能追加を発注して行った。二二年度に公開することを計画している。

「国際古文書料紙学」の確立

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五四九
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費八四〇万円、間接経費二五二万円
繰越金九八万円

五、研究組織

研究代表者 渋谷綾子

研究分担者 石川隆二(弘前大学)・高島晶彦・尾上陽介(以上東京大

学史料編纂所)・後藤 真・天野真志・小倉慈司(以上国立歴史民俗博物館)・野村朋弘(京都芸術大学)

研究協力者 山田太造・中村 覚(以上東京大学史料編纂所)・上條信

彦(弘前大学)・富田正弘(富山大学名誉教授)・湯山賢一・貫井裕恵(以上神奈川県立金沢文庫)・名和知彦(公益財団法人陽明文庫)・鍾 國芳(台湾・中央研究院生物多様性研究中心)・國府方吾郎(国立科学博物館)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究では、古文書などの料紙情報の標準化を通じ、「国際古文書料紙学」の確立を行う。これまでの古文書などの物質的研究では、素材となる繊維などの検討による料紙の種類の特定や使用方法の分析、墨や朱など使用素

材の分析が主たるものであった。しかし、本研究は、先行研究の成果をふまえてつづ以下を実施する。①考古学や植物学の手法を応用した料紙の科学研究方法の標準化、②大量かつ多様な研究データを作成・共有していくための基盤の構築、③特定の機器やシステム、機関に依存しない科学研究コミュニティの形成。これらを達成することによって、料紙情報の国際標準化を進め、日本だけでなく東アジア全体における古文書や古記録などの紙媒体歴史資料の科学研究を展開させることができる。

(2) 研究の実績

本研究では、①料紙の科学研究方法の標準化、②科学研究データの共有管理システム構築、③研究データ共有管理システムを用いた科学研究コミュニティの形成、という三つを軸とする。料紙研究情報の国際標準化によって、歴史学の情報をより豊かにするとともに、国際的な歴史資料研究の基盤となるしくみを作り上げる。

二〇二一年度も新型コロナウイルスの感染拡大により研究活動の制限が続いたが、これまで研究を進めてきた松尾大社社蔵史料や御室仁和寺所蔵史料の調査とともに、他の共同研究と連携して和紙生産地でのコウゾ試料の採集や新規の史料調査などを進めることができた。二〇二一年度は主に下記を実施した。①歴史資料の現況の分析・精査(高島・渋谷・天野・野村)、②構成物の種類・量・密度の分析(渋谷)、③DNA分析による料紙の識別実験・成分特定(石川・高島・渋谷)、④研究データ共有管理システム構築のため、顕微鏡画像管理ツール caid (classification and annotation for image data) を開発し、史料調査での実用化をはかるとともに、分析データの標準化を実践(渋谷・後藤・中村・山田)、⑤史料の修理保存の研究課題洗い出しの継続、ならびに獲得した研究データとの比較・検証(天野・高島)、⑥科学分析データと古文書の内容・様式との対応関係を比較・検証(野村・尾上・小倉・富田)。

①・②では、これまでの調査蓄積をふまえて、松尾大社社蔵史料、御室仁和寺所蔵史料、静嘉堂文庫美術館所蔵史料、本所所蔵の明治太政官制下の発給文書、ふみの森もてぎ所蔵「茂木文書」、滋賀大学経済学部附属史料館所蔵「菅浦文書」における料紙の顕微鏡撮影を行った。史料調査では、填料

の含有量に関する時代的変遷を分析可能な情報を充実させ、また文書名称と料紙の性格との相関関係を検討した。③については、西ノ内紙の産地である常陸大宮市で楮畑を調査し、DNA分析のための葉試料を採集、これらの分析を進めた。さらに、日本各地で採集したコウゾ試料のDNA分析の結果とあわせて、地域的特性を検討するためのゲノム情報を充実させた。

研究成果は、第三一回日本資料専門家欧州協会年次大会(二〇二一年九月)、第一六回東北育種研究会(二〇二一年一月)、Association for Asian Studies (AAS) 2022 (二〇二二年三月) など国内外の学会・研究会で報告し、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』九五号(二〇二二年一月)、『東京大学史料編纂所研究紀要』三三二号(二〇二二年三月)や Academia Letters 等へ原著論文として投稿し掲載された。さらに、他の共同研究とともに、料紙の科学分析に関するハンドブック『古文書を科学する―料紙分析ははじめの一步』(二〇二二年二月)を発行し、本所ウェブサイトでPDF公開を行った。

コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二〇H〇〇〇一〇
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費一一四〇万円、間接経費三四二万円
- 五、研究組織

- 研究代表者 山家浩樹
- 研究分担者 本郷恵子、尾上陽介、井上 聡、山田太造、小瀬玄士、林晃弘、中村 覚、渋谷綾子(以上史料編纂所)、阿尼雄之(東京国立博物館)、馬場 基(奈良文化財研究所)、

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、長年に亘り逐次的に蓄積されてきた史料に関する諸データを対象として、

①多様かつ大量なデータを統合し、永続的な提供を可能にする環境を整備すること

②膨大なデータ群を利用するにあたり、ユーザーが求めるコンテンツに応じた必要データのパッケージ化を確立すること

③紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証を行うことを目的とする。これらの実現により、人文科学研究資源のあり方を一新してゆく。

(2) 研究の実績

二〇二〇年度までの成果にもとづき、以下に示す三課題を実施した。

1. 多様かつ大量なデータの統合と永続的な提供を可能にする環境整備

史料編纂所における基幹である所蔵史料目録DB (HICAT)と史資料の物理的データ(紙質・状態・修理履歴など)を集約する「史料情報統合管理システム」との連携を引き続き進めた。大量のデータを管理・共有していくため、新規にストレージを導入した。さらにデスクトップ上で顕微鏡画像へアノテーションを簡易に付与し管理できるアプリケーション「E3D」を史料情報統合管理システムへアップロードできるなど出力方式の確立と実装を進めた。

2. データのパッケージ化と提示手法の確立

1の成果をもとに、史料に関わるさまざまなデータの収集していくコンテンツに基づいたパッケージ化方式の確立につとめた。この結果に対して、LDAやCNNといったAI・機械学習手法の適用を進めることでデータ駆動型データ提示モデルの検証を進めるため、史料データの分類や可視化の手法を取り入れたシステムのプロトタイプングを進めた。

3. 紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証

紙史資料を主対象とした1および2の手法を、奈良文化財研究所が行っている出土土簡を対象とする取り組みとの比較検証を進め、プロトタイプングを進めた。また、東京国立博物館蔵ガラス原板をもとにした史料画像の利活用を前提とした適用手法についても検証を進めた。継続して、1における史料情報統合管理システムへのフィードバックについても検証を進めた。

筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―

一、研究費種目 基盤(A)

二、課題番号 二〇H〇〇〇二二

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費九四〇万円、間接経費二八二万円

五、研究組織

研究代表者 末柄 豊

研究分担者 井上 聡・川本慎自・遠藤珠紀(以上史料編纂所)・久留

鳥典子(神奈川大学)・林 譲(駒澤大学)・大山 航(埼

玉工業大学)・末代誠仁(桜美林大学)・村川猛彦(和歌山

大学)・桑田訓也(奈良文化財研究所)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、これまでに整備してきた筆跡・花押画像の安定的な収集環境を前提として、データ蓄積の質・量を一層拡大していくのと同時に、人文科学的な手法にとどまらない多様な方法論を援用することで、筆跡・花押研究の新たなステージを招来することを旨とするものである。筆跡・花押を正確に読む・理解するための学術基盤を作るにとどまらず、筆跡・花押画像の典拠となつた原史料に関するメタデータほか膨大な関連情報を十全に活用することで、それらの形象が帯びた歴史的メッセージを最大限に汲み上げてゆきたい。

(2) 研究の実績

本研究は史料上に残された筆跡・花押を対象に、前年度と同じく以下の五つの点から研究を進めた。

①データ収集の拡充と収集方針の高度化においては、史料編纂所所蔵史料を中心として、国宝東寺百合文書ほかのデータ収集を進めた。当年度収集データは、筆跡が約七万七千件、花押が約一万九千件に達している。結果、筆跡のデータ総数は約三八万件、花押は約八万五千件を数えるに至つた。

②公開による社会的発信の強化という点では、前年度公開となつた他機関参

加の「史的」文字データベース連携システム」の維持・強化を進め、①で新規に収集した筆跡情報を反映させた。結果、当該システムおよび史料編纂所の「電子くずし字字典データベース」の総アクセス数は合計八五万件を超えるに至った。また二〇二一年九月に「花押彙纂データベース」「花押カードデータベース」を統合し、新たな機能を加えた「花押データベース」への転換を遂げ、月間平均二万六千件の利用が確認されている。

③人物情報を媒介とした筆跡・花押分析の高度化研究においては、新規登録データの人物情報を、史料編纂所歴史情報処理システム内にある人物レポジトリへと移行し、他データベース群のとの参照連携を進めた。

④史料学的情報との統合による筆跡・花押情報の高度利用研究においては、前年度に引き続き、蓄積データを対象とする深層学習を実践した。この成果にもとづき、筆跡データについては、奈良文化財研究所と協力し、新たな字形解析システムとなるANMOJIZOの開発を進め、次年度公開を準備している。花押データについては、新たな視角にもとづく分析成果を情報学会にて報告を行った。

⑤史料学的情報との統合による筆跡・花押情報の高度利用研究にあつては、前年度につづき国宝高津家文書を用いて、文書様式ごとの字配りや花押配置に関する分析を進め、正確な数値データの蓄積に努めた。

在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成

一 研究費種目 基盤研究(A)

二 課題番号 二〇H〇〇〇二三

三 研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度

四 研究経費 直接経費七四〇万円、間接経費二二二万円

繰越金二〇〇万円

五 研究組織

研究代表者 保谷 徹

研究分担者 小野 将・箱石 大・水上たかね(以上、史料編纂所)・

岡美穂子(情報学環)・谷本晃久(北海道大学)
連携研究者 杉本史子・山田太造・立石 了(以上、史料編纂所)
研究協力者 有泉和子・犬飼はなみ・及川将基・加藤絵里子・西脇 康
(以上、学術専門職員)

六 研究の概要

明治維新一五〇年を契機に、①在外日本関係史料の調査・収集と研究資源化を推進し、実績のあるロシア調査をはじめ、四つの重点研究チームを設置して補充調査と史料研究をおこなう。②幕末維新関係貴重史料コレクションのデジタルアーカイブ化と史料研究を進める。③維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトと連携し、幕末維新関係史料の基幹的データベース英訳事業の推進・研究用語や史料用語の英訳クロッサー研究をおこなう。この三つのプロジェクトを有機的に連携し、世界史の中の明治維新研究を進める。幕末維新関係史料のデジタルアーカイブ化による公開や研究成果の国際発信につとめ、維新史料研究の国際ハブ拠点形成を目指す。

以下、研究実績の概要をかかげる

(一) ロシア所在日本関係史料調査と所蔵史料についての共同研究(ロシア I・II)として、旧都サンクトペテルブルクのロシア国立歴史文書館・同海軍文書館・ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所と東京大学史料編纂所が締結した研究協力協定に基づき年度計画を立てたが、コロナ禍により、本年度の研究者招聘および出張調査については断念した。代わって、これまで開催した二〇回分の国際研究集会報告やプロジェクトの関係論文を論文集にとりまとめる準備を進めた。

(二) コレクション形成史からみる一九世紀日露関係史に関する調査研究(ロシアIII、研究分担者：谷本晃久)班でも、感染症流行の状況の下、残念ながら本年度の現地調査は断念した。そのなかでも、在サンクトペテルブルクの研究協力者ワシリー・シェプキンとの共同研究体制の継続につとめ、研究素材としてのアイヌ・北方史関係史料のデジタルアーカイブ化をおこなった。今年度は「入北記雨」「吹上秘書濃民御覽之記」「松前詰合日記」「李人ガルトネル地所一件書類(明治九年二月調)」「おろすけ人言」「元禄御国絵図中松前蝦夷図」を対象とした(いずれも北大附属図書館「北方資料デー

データベース」で公開。

(3) 南欧班(研究分担者・岡美穂子)でも海外調査自体は実施できず、代わって、イタリア人による日本・シベリア訪問記「日本とシベリア」アージュエヴァ公殿下随行時における極東の旅の覚書(ルキノ・タル・ヴェルメ著、一八八五年改正第二版(初版は一八八二年)、ミラノ)の翻訳と研究を進めた。

(4) 横浜開港資料館と連携し、同館が所蔵するフランス外務省史料マイクロフィルム(本所未収集分)六万六〇〇〇コマのデジタル化をおこなった。本所所蔵分を含めた両機関での史料画像データの連携公開については、フランス外務省文書館と協議中である。

(5) 維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト(代表小野将)と連携し、「維新史料綱要」データベース英訳事業と英訳グロッサリー作成を支援し(データ項目約一万五〇〇〇件の英訳を完了)、二月一日、オンライン国際研究会「維新史料研究と国際発信」を共催した(東京大学史料編纂所主催)。詳細は研究会報告参照。

(6) 維新関係貴重史料の調査と研究資源化の課題では、「岡谷文書」「萩廻落葉」「風説萩の枝折」「青山家書類抜萃」「新谷藩雜記」「時勢叢談」「時勢秘録」「時勢雜記」「慶応雜文録」「乙丑雜記」「丙寅雜記」「見聞雜記」「常州事件」ほか、史談会本七三六冊、三万五〇〇〇コマをデジタル撮影し、ウェブ公開・発信の準備をおこなった。

(7) 五月二一日、ロシア連邦サンクトペテルブルク市主催「ニコライ二世東方旅行一三〇年記念国際学術会議」で「ニコライ二世、サンクトペテルブルクと日本―日露関係史料の共同研究二〇年の歩みと大津事件―」と題して報告した(保谷、オンライン参加)。また、九月一日、日本資料専門家欧州協会(EARS)第三一回大会で報告「在外日本関係史料の調査と研究資源化について」(保谷)をおこなう(ロシア連邦サンクトペテルブルクで開催、オンラインでの参加・報告)など、国際発信につとめた。

なお、参加を予定した東アジア(日中韓)史料研究編纂機関協議会学術会議(釜山開催予定)は再延期となった。

外交の世界史の構築―一五〇―一九世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制―

一、研究費種目 科学研究費補助金 基盤研究(A)
二、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
三、研究経費 直接経費四〇〇万円、間接経費二二〇万円
四、研究組織

研究代表者 松方冬子

研究分担者 森永貴子(立命館大学)、塩谷哲史(つくば大学)、彭浩(大阪市立大学)、菊池雄太(立教大学)、岡本隆司(京都府立大学)、松本あづさ(藤女子大学)、辻 大和(横浜国立大学)、大東敬典(東京大学史料編纂所)、木村可奈子(滋賀県立大学)

五、研究の概要

本研究では日本史研究の蓄積を、他地域の事例と比較することで、新しい世界史像を構築しようとする。最終的には、ヨーロッパ中心主義を克服し、より平らかな世界史を描くことを目指す。

本研究は、「交易や人の移動に対する権力のコントロール」の、ユーラシア各地におけるあり方を実証的に検証し、多角的に比較する独創的・先駆的研究である。以下の3つの指標を用いる。

① 外国人や外国人との取引は、どのように統制されているか。政権の発給する外国人統制法(約条、規程、条目など)と商人間の契約の組み合わせか、政権間の条約か。

② 政権は国際交易からどのように利益を得ているか。広く浅くとする関税か、コミッション(手数料)、贈物(貢物)、賄賂などによるか。

③ 居留民の長は誰のためにいるのか。居留民自身のためか、送り出した国の政権のためか、あるいは滞在国の政権のためか。

一九世紀後半以降、①は「通商」条約、②は「関税」、③は「領事」の問題として整理され、世界のどこでも一元的に理解されるものとして、整序されていくようである。しかし、本研究では、その前史を、各地、各政権、各

交易集団の固有性と多様性を踏まえつつ、実証的に明らかにする。

本年度は、下記の活動を行った。

○五月二二日、早稲田大学ロシア東欧研究所及び科学研究費基盤研究(C)「エスニシティと流通の交錯―近代ユーラシア経済から見たネットワーク―」(代表・森永貴子)と共催で、研究会「ヨーロッパのアジア進出における外交と条約」を開催した。大東敬典「絹から砂糖へ―オランダ東インド会社の外交と商業―」、塩谷哲史「ロシア帝国の中央アジア進出とヒヴァ・ハン国との「条約」(一八四三年)」の報告に続き、森永貴子、堀井優がコメントをした。

○二〇二一年七月二四～二五日、オンラインで、第三回研究会を開催した。

(第一部)「非国家地域の外交―アメリカ大陸を素材に―」(コーディネーター・森永貴子)

松本あづさ「趣旨説明」

岩崎佳孝(甲南女子大学)「アメリカ合衆国における先住民主権の所在―インディアン・カントリの刑事裁判権の考察より―」

田宮晴彦(水産大学校)「建国期水産業と「海民」コントロールの試み―初期捕鯨業と私掠船―」

森丈夫(福岡大学)「同盟と臣従のあいだ―一八世紀前半マサチューセッツ ツーワベナキ講和外交から見るイギリス領北アメリカ先住民外交の性格―」

(第二部)「西洋法制史から見た条約・領事(パート2)」

松方冬子「趣旨説明」

皆川卓(山梨大学)「初期近代ヨーロッパの国家間仲裁―多様な『主権』を架橋する法発見の背景について―」

大東敬典「外交の形成―オランダ東インド会社の契約と文書の作成―」
ほかに、非常勤雇用(久礼克季)により、*Corpus Diplomaticum Neerlandicum* の翻訳を蓄積した。

本研究については、以下のウェブサイトを参照された。

http://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/gaikou_sekaisih.html

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究

- 一、研究費種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二一H〇四三五六
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費七七〇万円、間接経費二二二万円
- 五、研究組織

研究代表者 西田友広

研究分担者 井上 聡・堀川康史・山田太造・中村 覚(以上東京大学

史料編纂所)・貫井裕恵・三輪真嗣(以上神奈川県立金沢文庫)・高橋悠介(慶応義塾大学)・佐藤雄基(立教大学)・守田逸人(香川大学)・高田智和(国立国語研究所)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、古文書学にもとづく史料批判の対象から漏れてきた、断片的史料・逸失史料をあまねく学術資源化することで、中世史料学を根本的に見つめなおすことを目的としている。これまでも断簡・破損汚損文書・無年号文書といった多様な形態をとる史料が、古文書学的検討の対象から外れてしまふことへの批判はあったが、それらを積極的に活用するための具体的方策・提案は提出されずにきた。本研究では、隣接諸科学を含めたあらゆる方法論を援用することで、かつ情報化されたデータ群をあまねく参照しうる環境を整備することで、こうした史料の持つ可能性を徹底的に追究し、批判に足りうる有効な研究資源とすることを目指している。併せて、かつて確かに存在していた文書の痕跡を伝来史料から抽出・集約することで、残された文書の背景に広がる浩瀚な史料世界の復元を目指すものである。残存史料が持つ情報を最大限有効化するとともに、残されることのなかった史料の存在をあまねく検出することによって見えてくる像を析出することで、従前の中世古文書研究の限界を突破し、新たな研究の地平を見出してゆく。

(2) 研究の実績

計画調査に記した次の四つの観点から研究を進めた。

①断片化した史料を対象とする調査情報の高度化研究という点においては、史料学的情報を多彩に付与しうる「史料情報統合管理システム」の整備に着手し、史料テキストなどと有機的な連動が可能となるよう調整を図った。

②蓄積された知識情報の参照によるテキスト解析の高度化研究では、正確なテキスト解析に必須となる語彙情報の集積を図った。人名・地名を中心に、史料編纂所歴史情報処理システム内に分散する語彙について、レポジトリへの集積に着手し、多様な参照に耐えうる基盤の構築に努めた。

③中世逸失史料情報の復元研究においては、基幹史料集『鎌倉遺文』『南北朝遺文』（ともに東京堂出版刊）を主対象として、史料テキスト上に引用された逸失史料の網羅的な検出を進めた。『南北朝遺文』については、関係者の了解を得て、フルテキストデータベースの構築にも着手し、②の作業にも裨益しうるよう準備を進めることができた。

④課題解決にむけた分業体制の確立と拠点機関間の連携研究には、神奈川県立金沢文庫が公開する国宝金沢文庫文書データベースの抜本的リニューアルに協力し、史料編纂所歴史情報処理システムとの有機的な連携関係を確立した。両研究機関をつなぐ研究基盤が確立したことで、①から③に掲げる研究課題を連携と分業のなかで推進する環境が整った。

近世統一政権の成立と天下普請の展開―中近世移行期史料の研究資源化を通じて―

一、研究費種目 基盤研究(B)

二、課題番号 一七H〇二三八二

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二一年度

四、研究経費 直接経費一四〇万円（前年度より繰越）、間接経費なし

五、研究組織

研究代表者 及川 亘

研究分担者 小宮木代良・金子 拓・黒嶋 敏・石津裕之・森下 徹

(山口大学)

研究協力者 立石 了・山本一夫・佐藤孝之（東京大学名誉教授）
六、研究の概要

(一) 研究の目的

織豊政権を経て徳川政権に至って完成を見た近世の統一政権は、諸大名に軍役を課すことで武威による支配を貫徹したが、徳川氏の最終的な勝利で大規模な戦争がなくなった後でも、天下普請（公儀普請）という土木工事の形で軍役は課され続けた。本研究は、膨大に存在する諸大名家史料を中心として普請関係史料を横断的に調査・分析し、それらの研究資源化を通じて、戦国大名の普請から天下普請への展開を中近世移行期の政治過程に総合的に位置付け、併せて統一政権と大名の関係のみならず、大名家相互の関係や、各大家家内部における普請工事実施の具体像を、複合的に明らかにすることによって、天下普請の全体像を立体的に復元することを目的とする。

(二) 二〇二〇年度の実績

本科研は本来二〇二〇年度が最終年度であったが、新型コロナウイルス感染症流行の影響により史料調査等が予定通り実行できなかったため、経費の一部を本年度に繰り越した。本年度は天下普請（公儀普請）関連の史料収集と整理・分析・研究のために、以下のような研究活動を行った。

①史料調査

亀岡市文化資料館に出張し、同館所蔵・寄託・借用の中近世移行期の史料を調査・撮影し、同館学芸員の飛鳥井拓氏のご案内により、慶長十五年亀山城公儀普請における石切丁場の現地調査を行った。

②講演など

まず二〇二一年四月二四日に開催された日本城郭史学会大会（於板橋区グリーンカレッジホール）において及川・黒嶋が講演を行った。題目は次のとおりである。

及川 亘 「公儀御普請」―現場監督する大名―

黒嶋 敏 織田信長の二条城普請

講演の内容は『城郭史研究』第四一号（二〇二二年二月発行予定）に掲載の予定である。

次に二〇二一年二月八日に名古屋城調査研究センター・熊本大学永青文

庫研究センター主催、本科研協力のシンポジウム「史料が語る 名古屋城石垣普請の現場」(於名古屋銀行協会会館)に及川が参加した。題目は次のとおりである。

及川 亘 「名古屋御城石垣絵図」を読む

その模様は二〇二二年二月一日よりYouTube名古屋城公式チャンネルにおいて配信されている。なお、本シンポジウムの内容をまとめた報告書『名古屋城調査研究報告 史料が語る 名古屋城普請の現場』が二〇二二年三月に刊行された。

③研究会の開催

本年度は二〇二二年二月一日にZoomによるオンラインで研究会を開催した。報告者・題目は以下の通りである。

小宮木代良 元和度の江戸城本丸天主台普請と広島浅野家

及川 亘 熊本大学附属図書館蔵松井家文書「名古屋御城御普請衆御役高ノ覚」について

④研究成果報告書の発行

本科研五年間の研究成果の一部として、科研研究会での口頭報告をもとに『近世統一政権の成立と天下普請の展開』(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一年一八、全一八八頁)を刊行した。内容は以下のとおりである。はじめに(及川)

金子 拓 織田信長による天正四年の洛中普請

黒嶋 敏 天下普請としての秀吉の造船 文禄の役の「水軍」「御海」「日本丸」――

及川 亘 「坊所鍋島家文書」に見る公儀普請

小宮木代良 元和度の江戸城本丸天主台普請と広島浅野家

森下 徹 天下普請における萩藩の人足調達

立石 了 柳川藩立花家家臣「十時(強次郎)家文書」に見る石場普請の肝煎役

山本一夫 柳川古文書館寄託「伝習館文庫小野文書」および同館寄託「佐田家文書」の公儀普請関係史料の概要

南西諸島における海上交通の復元的研究―「帆船の時代」の「歴史航海図」―

一、研究費種目 基盤研究(B)

二、課題番号 一八H〇〇六九八

三、研究期間 二〇一八年度～二〇二一年度

四、研究経費 直接経費二六〇万円、間接経費七八万円

繰越金三五万一二五〇円

五、研究組織

研究代表者 黒嶋 敏

研究分担者 杉本史子・渡辺美季・片桐千亜紀・松尾晋一・麻生伸一

連携研究者 須田牧子・岡本 真・畑山周平

研究協力者 安里 進・安達裕之・今井健三

六、研究の概要

九州南端から台湾に至る南西諸島を、空間として広域的に描き、航路などを記した航海図としての側面を持つ画像史料が、一五～一九世紀の各世紀に連続して残されている。本研究では、これらを「帆船の時代」における「歴史航海図」と位置づけたうえで、そこに記載された海事情報を読み込むために、「歴史航海図」および付随史料のデジタル撮影による蒐集、解読と分析・検討、および記載情報の現況を確認するフィールドワークを行って、当該海域の帆船を主体とした海上交通の実態について、復元的に考察することを目的とする。

研究期間の最終年次となる二〇二一年度は、久米島での現地調査、関係史料の調査・撮影、などを予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う研究活動の停滞と行動制限が長期化したため実施不可能となり、研究計画を大幅に変更することとなった。

このため、正保琉球国絵図写の研究資源化に注力して全体の作業を進めた。まず、前年度に実施した国絵図の高精細画像データをもとに、本科研で学術支援職員を雇用して進めてきた同絵図のテキストデータを加え、「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」を構築した。これは二〇二一年一月より、本所HPで公開を開始している(<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/collect>)

tion/digitalgallery/ryukyuu)。アーカイブの構築にあたっては、本所附属の
前近代日本史情報国際センターの協力を得ている。アーカイブにはEAD
対応のテキスト表示機能などを実装し、国絵図のデジタル公開方法としては国
内で初の試みとなっており、これにより同絵図研究のさらなる進展が期待さ
れるとともに、汎用性のある各種機能を通じて学校教育や一般での利用も進
むこととなる。

このほかに、人数を絞り込んだうえで、海上交通関連絵図の調査（都城島
津邸、沖縄県公文書館）を実施したほか、本所内部での研究会を二回、オ
ンラインで開催した（第一回：二〇二一年五月一日、第二回：二〇二二年
二月二五日）。

さらに、本所附属画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センター
の主催する公開研究会「新たな画像公開方法とデジタル連携」（二〇二一
年一月三日、一部オンライン開催）に本所研として共催し、黒嶋が「正保
琉球国絵図デジタルアーカイブについて」という題目で報告を行ったほか、
本所研全体の成果報告の場として、琉球沖縄歴史学会例会「絵図・古地図と
琉球史研究」（二〇二二年二月五日、オンライン開催）にて、黒嶋が科研全
体の進行状況と「正保琉球国絵図を読み解く」という題目で報告を行った。
いずれも国内外の研究者および一般からの参加を得て、活発な意見交換がな
された。

四年間の研究期間を通じて、正保琉球国絵図写をはじめとする関連絵図の
デジタル化・研究資源化を順調に前進させることができ、それらの解析も一
程度の到達を見たものと考えている。一方で、研究期間の大半に及んだコロ
ナ禍の影響により、当初計画の中止・変更を余儀なくされた部分も大きく、
対面での研究会開催や集団での現地調査など、手つかずに終わった課題も多
い。これらについては今後、別途必要となる研究資金を獲得したうえで、あ
らためて着手できるように準備を整えていきたい。

地域連携にもとづく秋田藩家蔵文書の史料学的研究

一、研究費種目 基盤研究(B)

- 二、課題番号 一八H〇〇七〇九
- 三、研究期間 二〇一八年度～二〇二〇年度（二一年度に繰越）
- 四、研究経費 繰越直接経費二七万円（一九年度・一〇〇万円（二〇年度）
- 五、研究組織

研究代表者 金子 拓
研究分担者 高橋典幸（東京大学）・木下 聡（東洋大学）・柳原敏昭
（東北大学）・高橋 修（茨城大学）・遠藤ゆり子（淑徳大
学）・佐々木倫朗（大正大学）

所内連携研究者 遠藤珠紀・遠藤基郎・及川 亘・黒嶋 敏・畑山周平・林
晃弘

- 研究協力者 鈴木 満（秋田県立本荘高校教諭）
- 六、研究の概要

本研究の目的は、近世秋田藩の修史事業により編纂成立した『秋田藩家蔵
文書』について、その収録文書約四〇〇〇点の本文検討・校訂を行ない、信
頼できる本文データを作成し、それを史料編纂所データベースから公開する
とともに、それぞれの文書の研究文献情報についても集積し、古文書の画像
データ、原本・写本の目録データ、既存活字刊本の目録データと合わせるこ
とにより、文書一点の『古文書の戸籍』をデータベース上で表示することに
ある。その前提として、『秋田藩家蔵文書』に結実する秋田藩の修史事業に
関わる史料の撮影・調査・検討を行い、『秋田藩家蔵文書』の史料的人格を
明らかにする。

遂行にあたり、『秋田藩家蔵文書』を所蔵する秋田県公文書館と連携し、
『秋田藩家蔵文書』が主に対象とする秋田・茨城の研究者とともに、地域に
根ざした研究を意識して進め、研究成果を地域の一般市民にも還元するこ
を目標に、現代社会における日本史の研究成果還元方法を確立する。

コロナウィルスの感染流行により、一九年度・二〇年度に計画していた史
料調査・撮影などの経費が本年度に繰り越されていたが、複数人が参加して
撮影をおこなう形態での調査は結局実施できず、一九年度の旅費にて、科研
の研究に関わる調査一件（一人）を実施するにとどまった。

研究成果公開の一環として、二一年度も秋田県生涯学習センター「秋田ス

「マトカレッジ」において、研究代表者金子、研究分担者高橋修・高橋典幸・木下聡各氏のオンライン講座を実施し、科研の成果を地元秋田の市民に話した。

また、科研で調査・撮影をおこない、史料編纂所修理室において解体修理を実施した佐竹文書（一般財団法人千秋文庫所蔵）について、それを軸とした展覧会を茨城県立歴史館（二〇二二年四月～六月）・秋田県立博物館（同年九月～一月）にて開催した（史料編纂所が協力名義で参加）。それぞれの会場において修理過程をパネル展示したほか、秋田県立博物館では、展覧会の特別講演会として金子が「佐竹文書の成立と伝来」というテーマで地元の市民に向けて話をした（オンライン）。

出張が実施できず、旅費を執行できなかったかわりに、本科研がテーマとする『秋田藩家蔵文書』収録文書の原本を購入した。『福田文書』として本所が原本から作成した影写本を架蔵する文書群であり（請求番号三〇七一・二四一―一三、『秋田藩家蔵文書』では第四八・五三冊に収録）、常陸の国人領主笠間氏に関わる文書群である。本科研の研究目的に合致する原本史料を繰越年度に購入できたのは幸いであり、本年度にて科研の研究期間は終了するものの、継続してこの文書群の研究に取り組む予定である。『福田文書』の購入にあたっては、中世史料部門村井祐樹氏・古文書古記録部門井上聡氏の各別のご高配を賜った。記して感謝を申し上げる。

明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築

- 一、研究費種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 一九H〇一三〇三
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費一六〇万円、間接経費四八万円
繰越金七〇万円
- 五、研究組織

研究代表者 箱石 大

研究分担者 村 和明（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授、

宮間純一（中央大学文学部・准教授）、水上たかね（東京大学史料編纂所・助教）

研究協力者

白石 烈（宮内庁書陵部編修課・主任研究官）、長坂良宏（国立公文書館・公文書専門官）、石田七奈子（東京大学史料編纂所・学術専門職員）、柏原洋太（千葉県文書館・主事）、寺島宏貴（国立公文書館・調査員）、高島晶彦（東京大学史料編纂所・技術専門職員）、佐藤大悟（青山学院大学附置青山学院史研究所・助手）、渋谷綾子（東京大学史料編纂所・特任助教）、天野真志（国立歴史民俗博物館研究部・特任准教授）

六、研究の概要

(1) 研究の目的（『所報』第五五号、一六七―一六八頁参照）

(2) 研究の計画・方法（『所報』第五五号、一六八頁参照）

(3) 二〇二二年度の研究実績

〔東京大学史料編纂所・国立公文書館・宮内庁が所蔵・管理する明治太政官文書の調査・研究〕

①東京大学史料編纂所所蔵「復古記原史料」の詳細目録データ九四九件を作成し、その内容分析を行なった。また、同所所蔵の明治天皇宸筆勅書（図書登録名「明治天皇宸翰御沙汰書」）の料紙を対象として、精密な法量の計測と表面観察、顕微鏡を使用した観察・撮影記録に基づく構成物分析を内容とする原本史料調査を実施し、その成果を報告した。②国立公文書館所蔵「雑種公文」慶応四年六月分に収録された文書の詳細目録データ五二件、同館所蔵「日記」（官掌による弁事伝達所の文書受付簿）慶応四年六月分の文書提出人名データ二四三件を作成し、「復古記原史料」との対照作業を進めた。③宮内庁書陵部図書課宮内公文書館所蔵「三条公行実編輯掛本」のうち明治太政官関係文書一九四点の複写画像データを収集し、その内容分析を行なった。

〔前記以外の明治太政官文書及びその関連文書の調査・研究〕

①分散所在する岩倉具視関係文書については、海の見える杜美術館所蔵

「岩倉具視関係史料」のうち「功臣遺墨」第一～三十巻の調査及びデジタル撮影を、京都市歴史資料館所蔵「岩倉具視関係資料」のうち「叢裡鳴虫」・「万里風信」・「長閑玉章」・「岩倉公書簡」・「岩倉公関係文書」第一～三十巻のデジタル撮影を、京都府立京都学・歴史館所蔵「山本讀書室資料」中の岩倉具視関係史料の調査を実施した。②早稲田大学図書館所蔵「中御門家文書」中の中御門経之関係文書を調査して、冊子一冊と卷子一〇巻分の複写画像データを収集し、その内容分析を行なった。③松陰神社宝物殿至誠館所蔵前原家寄贈資料のうち前原一誠関係文書について、参議・兵部大輔時代の文書を中心に調査した。

なお、本年度実施した出張調査、および公表した研究成果は、以下の通りである。

〔出張調査〕

京都市歴史資料館所蔵岩倉具視関係資料の調査

(二〇二二年九月二十九日～三十日)

京都府立京都学・歴史館所蔵山本讀書室資料の調査

(二〇二二年一月一日～二日)

松陰神社宝物殿至誠館所蔵前原家寄贈資料の調査

(二〇二二年一月九日～一日)

海の見える杜美術館所蔵岩倉具視関係史料の調査・撮影

(二〇二二年二月五日～七日、二〇二二年三月二七日～二十九日)

〔論文・小論〕

水上たかね「維新时期日本の統治体制と『海軍創立』」(洋学史学会研究年報『洋学』第二八号、二〇二二年四月)

箱石 大・高島晶彦・渋谷綾子「東京大学史料編纂所所蔵明治天皇宸筆勅書の料紙調査報告」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第九五号、二〇二二年一月)

宮間純一「明治初年のキリシタン統制に関する一考察―宗門改を中心に―」(大友一雄・太田尚宏編『パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料の総合的研究』マレガ・プロジェクト(国文学研究資料館)、二〇二二年二月)

宮間純一「明治期における大名華族と旧臣団―佐竹侯爵家と旧大館給人―」

(中央大学文学部『紀要 史学』第六七号、二〇二二年三月)

〔原本史料情報解析〕の方法による中世西国武家文書の研究と展開

- 一、研究費種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二〇H〇一三〇七
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費三一〇万円、間接経費九三万円
- 五、研究組織

研究代表者 本郷恵子

研究分担者 木村直樹(長崎大学)・小瀬玄士・渋谷綾子・西田友広・野村朋弘(京都芸術大学)・長谷川博史(島根大学)・畑山

周平・村井祐樹(幹事)

寺尾美保(学術専門職員)

六、研究の概要

本研究は二〇一五～一九年度に実施した、「島津家文書」の修理・研究を中心事業とする「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」において培った原本史料情報解析の方法を用いて、原本史料についての研究的側面をいっそう深めることを目的としている。中世の西国武家文書へと対象をひろげ、文字テキストの読解から史実を確定するだけでなく、数百年にわたって伝来してきた原本史料の軌跡をさまざまな角度から検証し、史料の持つ豊かな情報を最大限あきらかにしようとするものである。

二〇二〇年度に引き続き、二〇二一年度もコロナ感染症の拡大のため、活動が大きく制限されたが、まん延防止措置等が発出されていない地域・期間を勘案して、資料館・図書館等の公的機関を中心に、十分な了解を得たうえで原本史料調査を実施した。山口県文書館の熊谷文書・山根文書・長松文書・兄部文書・国造千家所持之内古書類写・御書御判物控、鹿児島県歴史・美術センター黎明館の永吉島津家文書・岡元文書、尚古集成館の比志島文書・山田文書、鳥取県立博物館の加須屋文書・名和神社文書・宮本文書、そのほか熊本県多良木町の多良木宗像文書、同県水俣市の深水文書、鹿児島県

霧島市の石関文書・島津義久朱印状、京都府京丹後市の小倉文書などの西国武家関係文書について、調査・撮影を行った。

史料編纂所所蔵「応仁大乱記」、「入来院家文書」の修理を実施した。「入来院家文書」は昨年度からの継続で、今年度は第十八巻（文書一一点）の修理を完了した。これまでの修理と同じく、解装後はもとに戻さず、文書一通ごとに中性紙の畳紙に収めて保管することにした。各文書については、旧裏打紙・旧補修紙を除去し、新たな補修とフラットニングを行って、できる限り発給当初の姿に近づけるような方針をとっている。修理の過程では、原本史料情報についての調査・分析を実施し、紙の厚み・密度・繊維の質・簀の目・糸目等の情報を記録した。

また「中川（赤穴）文書」についての調査報告書を作成した（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―四）。赤穴氏は、鎌倉―南北朝期に石見・出雲に進出した佐波氏一族で、出雲国赤穴荘を領したところから赤穴氏を称した。戦国期には尼子氏に仕え、その後毛利家家臣となつて、慶長四年（二五九九）に中川氏に改姓し、幕末にいたる。史料編纂所が中川四郎氏から購入した文書一五〇点と、それ以前に流出して個人蔵となつた分や、原本が伝わらず『萩藩閩閩録』のみにみられるものなども併せて画像と翻刻を掲載した。巻末には史料編纂所所蔵分の紙質情報一覧表を付している。さらに、史料編纂所所蔵『島津家文書』のなかの「薩藩勝景百図」（薩摩藩内の名勝・旧跡を描く五巻の絵画史料）の解説テキストである「薩藩勝景百図考」の翻刻を進めている。

東アジア儀礼文化の比較史的研究―「物品目録」からの復元的考察―

- 一、研究費種目 科学研究費補助金 基盤研究(C)
- 二、課題番号 一六K〇二九九三
- 三、研究期間 二〇一六年度―二〇二二年度
- 四、研究経費 (期間延長により新規交付なし)
- 五、研究組織

研究代表者 稲田奈津子

六、研究の概要

本研究では、東アジアの儀礼関連史料に多数存在する、物品の名称や数量を羅列したリスト（「物品目録」）に注目した。それらの収集・整理をもとに、史料・史跡・遺物の調査をふまえ、礼制・儀礼文化の基礎的研究を軸に、東アジア儀礼文化の総合的な比較研究をおこなうことを目的とした。

本年度もCOVID-19の影響で、当初予定していた国外での調査・研究報告は実施できなかった。そこで調査は国内近郊のものを優先し、公開された図書・図録類を活用した研究を進め、また国外研究誌への投稿やオンラインによる研究報告により、当初計画に代わる研究活動を継続した。

具体的な成果としては、「東アジア儀礼研究の新視角―「物品目録」の検討から―」（韓国語）が韓国の学術誌に掲載され、本科研の中心的課題の成果を公表することができた。本稿の内容をもとに「東アジアの古代儀礼を復元する―西域・長安・平城京」と題し、市民講座での講演をおこなった（オンライン）。また基礎的研究の成果にもとづいて「東アジアの律令制」（一部、共著）を執筆し、史料紹介「水谷悌二郎日記抄録―広開土王碑研究を中心に―」の編集をおこなった。

またオープンセミナーにおいて「日本古代の墓誌と東アジア」と題して講演をおこない、台湾で開催された研究会では「日本古代的殯（inogari）と女性」と題して報告をおこなった。さらに国際研究会「東アジア諸王室における礼的（逸脱）の諸相」において、北魏王族の婚姻政策および高麗王家の支配思想に関する報告に対してコメントをおこなった（いずれもオンライン）。

本課題に関連する諸史料（正倉院宝物絵図、古写経等）の調査・撮影をおこない、所属機関のデータベースを利用して公開するための整理・研究をおこなった。また最終年度ということで、研究期間中に収集した諸資料の整理もおこなった。

一四世紀日本における紛争解決過程の変容に関する実証的研究

- 一、研究費種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一六K〇三二五七

三、研究期間 二〇一六年度～二〇二二年度

四、研究経費 期間延長により新規交付なし

五、研究組織

研究代表者 渡邊正男

六、研究の概要

裁判前後の地域社会の状況、裁判外の利害関係者・周辺地域社会の動向も含む、紛争解決過程全体の具体的解明によって、非局所的法に基づく裁判が地域社会の日常的秩序形成・維持構造において果たした役割の変化、非局所的法と日常の行動規範との関連性の変化、すなわち、一四世紀日本における紛争解決過程の変容を実証的に明らかにすることが本研究の目的である。

最終年度にあたる二〇一九年度から繰り越し二年目となった今年度は、昨年度までに行った、一三世紀後半から一四世紀を対象とした非局所的法に関連する史料の収集、事例の集積及び検討を踏まえて、事例相互間の比較検討、補充のための史料調査、研究成果のとりまとめ等を行う予定であった。しかしながら、自身の体調不良、新型コロナウイルス感染症の再拡大等により、史料調査を実施できないなど、研究計画を完了するにはいたらなかったため、さらに次年度へ繰り越すこととなった。

そういつた状況下でも、本研究課題に関係する史料編纂所未蒐集史料について、御許可いただけた京都御所東山御文庫において調査を実施することができた。また、インターネット上で公開されている史料を対象とした関係史料の収集及び検討を行い、その副産物として、「史料紹介 西園寺本「伝宣草」」を『学習院大学史料館紀要』第二八号（二〇二二年三月）に発表した。

中世後期日明関係の人的基盤の研究―「初渡集」「再渡集」を中心に―

一、研究費種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一七K〇三〇五八

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

四、研究経費 (二〇二〇年度より期間延長)

五、研究組織

研究代表者 須田牧子

六、研究の概要

本研究の目的は、第一に一六世紀の遣明船の副使・正使を務めた禅僧・策彦周良の旅日記「初渡集」「再渡集」を精読し、そこに登場する約四〇〇人の人物像を検討し、中世社会のなかでどのような立場にある人間がいかなる形で遣明船派遣事業に関与していたかを解明すること、第二に日記の筆者である策彦の履歴、特に帰国後の実績を復元し、彼が海外経験をいかに自らの価値としていたのかを追究することにある。そのための具体的な研究活動は下記の三つの柱で構成される。①「再渡集」の精読・策彦周良が正使を務めた時の日記である「再渡集」の講読会を行って精読し、翻刻と訳注を作成する。②「初渡集」「再渡集」の登場人物の研究・上記「再渡集」と、策彦周良が副使を務めた時の日記である「初渡集」の登場人物リストを作成し、彼らに関わる日本側史料を探索し、人物像とその国内社会における地位を明らかにすることを通じ、遣明船経営を支えた人的基盤の分析を行う。③策彦周良関係史料の収集・策彦周良自身の履歴の復元をめざし、史料を収集する。

今年度においてもコロナ禍の影響で講読会を一度も開くことが出来ず、結局期間延長の手続きをとり、経費はほとんど来年度に繰越すことになった。制約の多い中で為し得た活動としては、まず講読会の「再渡集」の訳注原稿につき、その注釈の精度・内容をより高めることに注力した。来年度中にコロナの状況を見つつ、研究会を設けて原稿の検討作業を行なうことを予定している。第二に策彦の詩作集である「謙齋詩集」の諸本を集め、対校作業を行って翻刻原稿を作成した。

中世書状史料論の展開

一、研究費種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一七K〇三〇五九

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

四、研究経費 直接経費二万五〇八円、間接経費〇円

五、研究組織

研究代表者 末柄 豊

六、研究の概要

本研究の目的は、多様な中世文書のなかにあつて、史料として利用することが相対的に困難な書状および仮名消息について、活用のための基盤を形成し、広範な利用をうながすことにある。そのため、文書群・史料群への注目、特定の人物の書状への注目という両様のアプローチにより、活用のための方法論を示すと同時に、書状を積極的に活用することで、その史料としての可能性の高さをアピールする。あわせて、仮名消息（女房奉書を含む）を中心とする書状を読解するための自習教材の充実につとめ、後進の育成にもつなげるものとする。

本来、二〇一九年度が最終年度であつたが、研究所の耐震工事にもなう研究室の移動などによつて研究が遅延し、研究期間を二〇二〇年度に延長した。さらに、新型コロナウイルス感染症の流行による研究遂行の困難から、二〇二一年度に再延長することになった。最終年度となつた本年度における主要な成果は、以下のとおりである。

①宮内庁書陵部所蔵三条西本『除目部類』の紙背文書に残る、三条西実隆充ての後土御門天皇女房奉書について検討し、准勅撰の連歌集『新撰菟玖波集』の選進に同天皇がいかなる意識を持って関与したのかについて検討を行った。すなわち、「准勅撰」を承認することは天皇自身に相應の負担を強いるものであつたことを明らかにした。

②宮内庁書陵部所蔵山科本『言国卿記』および『山科家礼記』の紙背文書について判読および検討をすすめた。特に、十五世紀末期における地下楽人豊原氏の所領をめぐる動向を知るための素材として活用し、地下楽人の家の減少という問題について検討を行った。

③市場に出た三条西実隆充ての六大院長慶なる伊勢の真言僧の書状を本研究費によつて購入し、原本を精査することで、これが金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵『松雲公採集遺編類纂』所収「三条西家文書」として写が残されている紙背文書群のうちの一通として残されたものであることを明らかにした。

漢籍書き入れの日本中世史料としての活用をめぐる研究

一、研究費種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一七K〇三〇六〇

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円

五、研究組織

研究代表者 川本慎自

六、研究の概要

本研究は、日本国内に現存する漢籍に記された書き入れについて、とくに中世の漢籍講義や注釈活動に遡るものに着目し、そこに含まれる広範な知識の内容を検討するとともに、そのあり方を史料学的に位置づけることによつて、中国文学や日本文学の分野にとどまらず、日本中世史研究の史料として活用する方法を確立しようとするものである。

本年度の研究においては、前年度までに引き続き、寺院・史料所蔵機関において漢籍等を含む広範な史料の調査を行い、中世に遡り得る漢籍書き入れの有無を確認した。具体的には、前年度からの継続で埼玉県に所在する禅宗寺院について調査を行い、とくに仏典・禅籍の蔵印や典籍入手にかかわる近世文書を中心に検討することにより、蔵書構成の背景を明らかにする端緒とした。また、京都・仁和寺に架蔵される漢籍・禅籍についての調査も行った。

また、これらの調査を踏まえて、漢籍から得られる知識についての研究を行った。本年は、建築史学における「禅宗様」様式概念再検討の成果を踏まえて、足利義満・義政による北山殿・東山殿造営の前提となる建築知識が禅僧の間でどのように蓄積・継承されていたかという点について、室町期の相国寺僧桃源瑞仙が『史記』について講義した抄物『史記桃源抄』の記述をもとに検討を行い、学会報告およびそれに基づく論文の執筆を行った。このほか、同じく室町期の東福寺僧季弘大叔の日記『蔗軒日録』に見える広範な和漢の知識や、説話集『三国伝記』に見える東国夢窓派の動向などについての論文・解説を執筆・刊行した。

なお、本年度は最終年度の予定であったが、コロナ等による史料調査の遅れが生じたため、所定の手続きを行って研究期間を延長し、次年度に引き続き調査を行うこととした。

近世大名家臣史料の共同分析―多久家史料の読み直しを中心として―

- 一、研究費種目 基盤研究(C)
 - 二、課題番号 一七K〇三〇九五
 - 三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度
 - 四、研究経費 延長による前年度からの繰越予算一八万七五五〇円
 - 五、研究組織
- 研究代表者 小宮木代良
- 研究分担者 及川 亘、石津裕之
- 研究協力者 佐藤孝之（東京大学名誉教授）、大平直子（佐賀市教育委員会）、志佐喜栄（多久市郷土資料館）、清水雅代（佐賀県立図書館）、田久保佳寛（小城市教育委員会）、藤井祐介（佐賀県地域交流部文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室）、本多美穂（佐賀県立図書館）、松田和子（佐賀県立図書館）

六、研究の概要

本研究は、佐賀藩家臣多久家文書の共同研究を行うために進められてきた共同研究（東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点における特定共同研究経費二〇一四年度～二〇一七年度）が終了するにあたり、それを継承発展させていくことを目的として、当該共同研究の最終年度にあたる二〇一七年度から開始された。研究会では、メンバー一〇～一一名（研究代表者・研究分担者・研究協力者）であらかじめ分担しておいた個別史料一点ずつの年次比定・人物比定・解釈等について、事前にteamfile上での検討結果を共有しておき、原本史料もしくは、精細画像を前にした研究会の場で集中的な共同分析を行うことを継続してきた。二〇二一年度は、延長を含む五年間の間に読み合わせを進めてきた約七〇〇通の成果を報告書にまとめるために、体

例を統一しつつ、全点について史料本文と年次比定を中心とした点毎の解説を全参加者により確認する作業を進めた。読み合わせのための研究会は、Zoomにより設定し、期日の二週間前までにWordのfile形式でteamfileへ各自の分担分をあげておき、Wordの校閲機能により、相互の修正意見を書き込み、研究会当日に最終的に確定させていった。研究会は、六月二日・七月三十一日・九月一日・一〇月一日・十一月二日・一月八日・二月二日の七回行った。また、これ以外に報告書の作成方針等を相談するための会議を二回（四月一日・四月二九日）開催した。その結果、四四〇通分までの原稿ができたが、一度の読み合わせだけでは結論が出ず、また確定したのものについても分析の進行により再度戻って年次比定をやり直すことが多く、全点を終えるまでにはいたらなかった。人名一覧も本文編の蓄積とともに作成が進行中である。また、関連史料の調査も行った。

イエス会の日本人宣教師 元仏教僧侶の分析を中心に

- 一、研究費種目 基盤研究(C)
 - 二、課題番号 一八K〇〇九〇五
 - 三、研究期間 二〇一八年度～二〇二一年度
 - 四、研究経費 直接経費九〇万円、間接経費二七万円
 - 五、研究組織
- 研究代表者 岡 美穂子

六、研究の概要

本年度は、当プロジェクトの最終年度であったが、その成果は大きく分け二冊の英文著書と二つの講座論文（日本語、英語）として刊行することができた。まず単著として、『*The Nanban Trade: Merchants and Missionaries in 16th and 17th Century Japan* (Leiden & Brill, 2021)』を六月に刊行した。本書の刊行のために、本研究費から校閲費用などを支出し、刊行後配布分の購入、デジタル版の一章オープンアクセス公開権の購入などに充てた。本書はその後海外で少なくとも三種類の学術誌上の書評として紹介され、英語で読むことが可能な日本史の研究として非常に高い評価を受けた。その

後、ポルトガルの大航海時代史とそれに続く文化現象に関する世界的な研究に対して与えられる Orient Foundation Prize に大賞受賞作として選出された。また編著として *War and Trade in Maritime East Asia* (Palgrave Macmillan, 2022) を刊行し、自らの研究だけではなく、共同研究をおこなってきた海外・日本の研究者の研究を英文で刊行した。本課題に直結する論文としては、二〇二二年中に刊行予定の *Cambridge History of Japan* vol.1 に収載が決定されている “Domesticating Christianity in Japan” の改稿をおこない、その校閲費用等を支出した。関連テーマでの招待講演を一〇回実施し、うち三回は海外の大学からの招待講演あるいは国際研究会で、英語で実施した。

高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究

- 一、研究費種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 一九K〇〇九三四
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度(二〇二二年度に延長)
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織

研究代表者 谷 昭佳

研究分担者 保谷 徹・箱石 大

六、研究の概要

二〇二二年度も前年度に引き続きコロナウィルスの感染拡大の影響を受け、当初予定していた海外機関に点在する幕末明治初期写真史料の調査、国内に所在する写真原板を対象にした高精細デジタル画像化のための現地調査などをおこなうことが困難な状況となった。そのため、当初の計画を変更せざるを得なかったが、国内での活動を中心にして以下の研究と成果の公表をおこなった。

①新収蔵ガラス板写真のデジタル化…本所で新たに寄贈を受けた、一八七三年のフィラデルフィア万博に参加した日本人が現地に持ち込んだ日本関係ガラス原板写真(一六一点)の目録作成と原板の状態調査をおこなった。同

時に高精細デジタルカメラによるデジタル画像化をはかったうえで保存処置を施した。

②鶏卵紙の復原調査…高知県立紙産業技術センターに出張し、一九世紀の鶏卵紙プリント原紙の組成分析と復原紙製作に関する調査打ち合わせをおこなった。

③横山松三郎関係写真史料調査…箱館・高田屋伝来の横山松三郎・松蔵兄弟の古写真史料(個人蔵)のうち、写真油絵の制作工程についての調査をおこない、写真油絵の復原に着手した。

④菊池海荘関係古写真資料の展示…菊池海荘の出身地である和歌山県湯浅町の地域交流センター(二〇二二年三月二二日)において、デジタル化した画像データを基に菊池家旧蔵の古写真資料の展示および講演「菊池海荘と菊池(堀内)家史料」を研究分担者の保谷徹がおこない、研究の成果を一般に公表した。

⑤学会報告・講演…谷昭佳「歴史資料・写真フィルム原板の史料学」松重美人の被爆写真「ネガフィルム」(日本写真芸術学会主催「令和3年度日本写真芸術学会年次大会」、オンライン開催、二〇二二年六月二二日)／谷昭佳「高精細画像から紐解く幕末明治初期の日本」(愛媛県歴史文化博物館主催、特別展「大名の船―海の参勤交代―」関連講座【海の学び講座③】、愛媛県歴史文化博物館多目的ホール、二〇二二年一月二二日)により、研究成果の一端を公開した。

⑥論文掲載…「ウィーン万国博覧会と国家事業としての写真制作」をベーター・パンツァー、杏澤宣賢、宮田奈奈編『1873年ウィーン万国博覧会日頃からみた明治日本の姿』(思文閣出版、二一三～二四九頁、二〇二二年三月)に掲載した。

受発信文書から見る開港期の出島商館―明細目録データベースの作成と分析―

- 一、研究費種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 一九K〇〇九三五

- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二一年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織

研究代表者 松井洋子

研究協力者 矢森小映子（学術支援専門職員）

六、研究の概要

本研究は、オランダ国立中央文書館所蔵「日本商館文書」のうち一八四三年から一八六〇年の「日本商館文書」を対象に、①各年の受発信文書簿に含まれる書翰・決議抜粋・翻訳命令書・注文等について、一点毎の目録情報をデータベース化すること、②受発信文書を中心に、当該期の出島で作成され残された文書群の書式・性格・相互関係とその変化について史料学的検討を行なうこと、③開港期の出島をめぐる人的・社会的関係、商館の運営と機能の変化を考察することを目的とした。

基本となる目録情報のデータ入力項目は、原所蔵番号、史料編纂所マイクロフィルム番号と写真帳番号に加えて、各文書の日付、収録簿冊名、文書の形式、発信地と発信人、宛先地と宛先人、内容注記、開始終了頁と総頁数、既刊目録の収録頁、史料の状態等に関する注記、備考とした。

最終年度である二〇二一年度には、残っていた一八五九年（六七七点）、一八六〇年（六六六）の受信文書について目録入力を終えた。

本研究での作業により、秘密文書も含めた受発信文書総点数六二八二点の入力が完了した。また、同時期（一八四七年～一八六〇年）のオランダ外務省本省の日本関係文書の抜粋既収集分（六五二点）についても、明細目録のデータ入力を行なった。

入力したデータについては、史料編纂所の所蔵史料目録データベースに、フィルム毎の内容細目として付加し、インターネット公開した。

日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

一、研究費種目 基盤研究(C)

二、課題番号 二〇K〇〇九三三

- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織

研究代表者 遠藤珠紀

六、研究の概要

本研究課題は、鎌倉期から室町期を中心に、古記録の収集及び総体的な検討を行い、トータルな形で中世朝廷における情報の流れや政務運営システムの検討を試みるものである。その遂行のため本研究課題の研究計画は大きく二つの柱をたてた。まず古記録の所在（原本・写本の所在）を調査し、その記録時期を通観できるようにし、特に重要なものは史料の性格を明らかにし、翻刻・フルテキストデータベース作成などの歴史情報資源化を行うこと。二つ目として、これらの知見を生かして当該期の政治史・制度史等の考察を行うことである。

本年度も新型コロナ禍のため、史料の原本調査については十分には行うことができなかったが、北野天満宮北野文化研究所・国立歴史民俗博物館・早稲田大学などに赴き調査を行った。ご高配を賜り感謝する。また東京大学史料編纂所所蔵の原本、架蔵の写真帳及びこれまでの調査に基づき史料学的検討を進めた。これらにより東京大学史料編纂所所蔵の伝『大外記中原師生母記』、『東京大学史料編纂所所蔵の陰陽道関係史料』（林淳編『新陰陽道叢書』第五卷特論、名著出版）、天理大学附属天理図書館所蔵の『兼見卿記』紙背文書、早稲田大学所蔵『宣教卿記』、歴史民俗博物館所蔵『勘仲記』、『網光公記』、賀茂別雷神社所蔵『賀茂神主経久記』などの翻刻、紹介を行った。

また豊臣秀吉の聚楽行幸を描いた『聚楽行幸記』の諸写本についても検討を進め、『天正十六年『聚楽行幸記』の成立について』（井上泰至編『アジア遊学二六二 資料論がひらく軍記・合戦図の世界』）として発表した。そのほか「豊臣秀吉の唐冠と子息秀頼」（『國學院雑誌』一二二―一二一）、「協業関係が成立していた朝廷の官人、幕府の官僚」（久水俊和編『日本史料研究会監修『室町殿』の時代』山川出版）などの論考を発表した。

公家法・公家家法・寺社法を中心とした中世法制史料の高度研究資源化

史』八八五号、二〇二二年二月）として発表した。

前近代の和紙の混入物分析にもとづく「古文書科学」の可能性探索

- 一、研究費種目 科学研究費補助金挑戦的研究（萌芽）
- 二、課題番号 一八八一八五三四
- 三、研究期間 二〇一八年度～二〇二一年度（研究期間延長）
- 四、研究経費 直接経費一八万六二九九円（繰越金）、間接経費〇円
- 五、研究組織

研究代表者 渋谷綾子

研究分担者 石川隆二（弘前大学）・高島晶彦（東京大学史料編纂所）

研究協力者 山田太造・中村 覚（以上東京大学史料編纂所）・後藤

真・天野真志（国立歴史民俗博物館）・上條信彦（弘前大学）・鍾 國芳（台湾・中央研究院生物多樣性研究中心）

六、研究の概要

（一）研究の目的

本研究の目的は、考古学および植物学的手法によって古文書の料紙内への混入物を分析し、「古文書科学」という学問としての可能性の探索を行うことである。古文書の混入物には、紙の製造過程での添加物に由来するデンブンや鉛物、資料の修理の際に付加される炭酸カルシウムなどがある。本研究はこれらの混入物の種類・量・密度の三つと、紙自体の成分について、古文書の分類との対象比較を行い、和紙の製造手法・地域・時期の分析、その結果にもとづく資料の地域的特性や歴史の変遷を探る実験的な研究を行う。

（二）研究の実績

本研究では、①古文書の分類と製紙材料の構成物としてのデンブンなどの種類・量・密度等の対象比較による紙の質的比較解析、②DNAによる和紙の製造手法・地域・時期の分析、③これらの分析手法を統合した「古文書科学」という研究分野としての可能性探索、という三つを軸とする。二〇二〇年度は新型コロナウイルス感染症拡大によって、原本史料の調査とDNA分析に関わる各種調査が大幅に制限された。これらの調査を実施するため、研究

一、研究費種目 基盤研究(C)

二、課題番号 二〇K〇〇九五六

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度

四、研究経費 直接経費七〇万円、間接経費二二万円

五、研究組織

研究代表者 前川祐一郎

研究協力者 遠藤基郎・西田友広・本郷恵子

六、研究の概要

本研究は、佐藤進一他編『中世法制史料集』全七巻（岩波書店）のいわば増補版に相当するものを、本所のデータベースシステム上で作成し、日本中の法制史料を高度研究資源化することを第一の目的としている。同時に、その高度化の試みの過程で、関連づけるべき史料は何かという問いかけを通して、日本中世の法制史料という史料のあり方や性格そのものを捉え直すことを、もう一つの研究目的としている。

本年度には、前年度のつづきとして、まだフルテキスト化されていない『中世法制史料集』第六巻の後半（公家家法、寺社法）部分を、タグ付け等の下処理を行ったのち、入力業者に発注してフルテキスト入力し、本年度で同巻の入力作業を完了した。フルテキストデータベース公開に向けた第二段階まで進んだといえる。次年度の校正作業を経て、データベースとしての公開が実現すれば、文字列検索や関連史料との相互参照による研究上の同書の活用の便宜が格段に向上し、学界における今後の研究の進展に大きく寄与することが期待される。

一方、前年度につづき本年度も、新型コロナウイルス感染症拡大のため、予定していた史料調査による公家家法・公家家法・寺社法およびその関連史料の収集が十分に出来なかった。そのため、法制史料の高度研究資源化を通じた、日本中世における法制史料のあり方の再検討として、武家家法（戦国法）史料の条文の立法の論理を内的に理解する試みをさらにすすめた。その成果の一部を、戦国大名伊達氏の分国法「塵芥集」のいくつかの条文の立法の論理を明らかにする論考、「塵芥集」法文の立法論理の「事例」（「日本歴

期間を延長した。

二〇二一年度の原本史料調査と混入物の分析(渋谷・高島)では、他の共同研究と協働して料紙の科学分析データを情報基盤へ取り入れ、研究データの資源化を進めた。特に、顕微鏡画像管理ツール「card (classification and annotation for image data)」の開発に関わり、プロトタイプを史料調査で試用、改修を進めるとともに、情報基盤へ分析データの取り込みを試行した。このツールは本研究終了後、複数の共同研究で活用される予定であり、研究データの共有化や連結化を進め、学問として「古文書科学」の確立につながる。

植物原料のDNA分析(石川・渋谷)では、日本各地で採集したコウゾ試料のDNA分析の実施を継続し、地域的特性を検討するためのゲノム情報を充実させるとともに、歴史資料への応用について検討を行った。実験結果は学会等で報告し、また植物材料の収集で協力いただいた外部の研究者や研究機関等へも報告を行った。

二〇二一年度の研究成果は、第三二回日本資料専門家欧州協会年次大会(二〇二一年九月)、Association for Asian Studies (AAS) 2022 (二〇二一年三月) など国内外の学会・研究会で報告し、『東京大学史料編纂所研究紀要』三二号(二〇二二年三月)やAcademia Letters等へ原著論文として投稿し掲載された。さらに、他の共同研究とともに、料紙の科学分析に関するハンドブック『古文書を科学する―料紙分析はじめての一步』(二〇二二年二月)を発行し、本所ウェブサイトでPDF公開を行った。

足利義満期武家政治史の研究―義満の権力確立過程の再検討を中心に―

- 一、研究費種目 若手研究(B)
- 二、課題番号 一七K一三五二六
- 三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度(期間延長)
- 四、研究経費 (前年度より繰越)
- 五、研究組織
- 研究代表者 堀川康史

六、研究の概要

二〇二一年度は研究成果の総括も視野に入れつつ、足利義満期武家政治史の再検討を進める予定であったが、COVID-19の影響により外部機関での史料調査に依然制限がかかったことに加え、二〇二一年度出版の『大日本史料』の原稿作成・校正を実質的に一人で担当せざるをえない状況となり、本研究課題に取り組む時間が大幅に限られたことから、既刊史料・史料編纂所架蔵史料を主とする史料収集とその基礎的な整理・分析を行うにとどまった。この間取り組んでいる足利義満期における室町幕府と鎌倉府の政治的関係の考察については、二〇二二年度に研究成果を公表したいと考えている。

本研究課題に関連する成果としては、「延文五年桂宮院伝法灌頂私記・同紙背文書」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三二号、二〇二二年、三輪真嗣氏との共著)を執筆し、足利義詮期の延文五年(一三六〇)の政変に関わる紙背文書を紹介した。二〇二一年一月には、オーストリア・ウィーン大学が開催した、中世の誓約に関する比較史ワークショップにおいて、「Oaths and Divine Punishments in the Warring States Japan: From Princeton University Collection」と題する研究報告を行って、プリンストン大学所蔵の新出史料を用いて中世日本の事例を紹介した。その他、堀川が研究分担者として参画している基盤研究(A)「断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究」(西田友広氏代表)や史料編纂所の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」とも連携し、南北朝期史料の電子化・DB開発を進めた。

幕府奥右筆の分析による近世国家権力構造の研究

- 一、研究費種目 若手研究
- 二、課題番号 一八K一二四九七
- 三、研究機関 二〇一八年度～二〇二一年度(期間延長)
- 四、研究経費 直接経費五二万九七七三円(繰越金)、間接経費〇万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 荒木裕行

六、研究の概要

本研究は、江戸幕府の実務官僚の一つであり、老中や若年寄の下で書類の作成・整理を行っていた奥右筆について、その幕府内における政治的位置づけを明らかにし、奥右筆を中心とした幕府権力構造の実態解明を行うことが目的である。江戸幕府の政治構造や政策の変化を研究する場合には、將軍や老中など政権のトップごとに時期区分するのが一般的である。しかし実際には奥右筆が政策の決定に強く関与し、幕府政治を事実上リードしていた時期も多かったのではないかと予想している。この仮説を実証するのが直接的な目的である。具体的な検討対象時期は、奥右筆が最も大きな権力を有していたとされる家斉將軍期を中心とするが、それ以外の時期についても分析を加え、政治状況による変化を明らかにする。新型コロナウイルス感染症流行により、二〇二一年度まで研究期間を延長した。

二〇二一年度は、前年度実施できなかった史料収集を行った。具体的には苗木遠山史料館へ出張し、同館所蔵の苗木藩主自筆日記を調査・収集した。さらに古書店より原本史料〔関東伺向御下志〕・〔駿田雜記〕を購入した。現在、収集史料を分析中であり、論文としての公開を計画している。

近世における朝廷中枢による門跡統制の解明

一、研究費種目 若手研究

二、課題番号 一九K一三三二九

三、研究期間 二〇一九年度～二〇二一年度

四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円

五、研究組織

研究代表者 石津裕之

六、研究の概要

本研究の目的は、朝廷中枢が行っていた門跡（天皇家・親王家・摂家などの子弟が入寺する格式の高い寺院、もしくはその住職＝門主のこと）に対する統制の具体像を解明することにある。二〇年度までは天皇家・親王家の子弟が門主となる宮門跡を分析対象としていたのに対し、二一年度は摂家の子

弟が門主となる摂家門跡を分析対象とし、二〇年度までの分析視点からの考察を行いつつ、宮門跡との比較分析を行った。

具体的には、朝廷中枢の位置にあった公家の日記・記録を分析し、①摂家門跡に肝煎・御世話人が存在するのか、②それらの役割はどのようなものであったか、③摂家門跡の門主の実父である摂家当主がどのように摂家門跡の運営に関わっていたか、④上記の①～③について宮門跡と共通点・相違点があるか、といった論点を検討した。分析に用いた日記・記録は、東京大学史料編纂所が所蔵するものに加えて、宮内庁書陵部が所蔵するものであり、これらの史料を分析することで、上記の①～④に関する具体像を明らかにすることができた。

以上の分析結果は、論文化に向けて準備を進めている。また、関係する成果として、福田千鶴・藤實久美子編著『近世日記の世界』（ミネルヴァ書房、二〇二二年三月）に論文一本（年預記録―北野天満宮を支えた社僧の職務日記）を掲載するとともに、学会報告一件（近世前中期における宮門跡の序列と天皇・院の養子・猶子）朝暮研究会、二〇二二年三月）をおこなった。

平安時代後期政治構造の史料学的研究

一、研究費種目 若手研究

二、課題番号 一九K一三三三〇

三、研究期間 二〇一九年度～二〇二一年度

四、研究経費 直接経費三〇万円、間接経費九万円

五、研究組織

研究代表者 黒須友里江

六、研究の概要

摂関政治と院政についてはその連続性がたびたび指摘されるが、両分野の研究状況の違いにより院政期研究の立場から論じられることが多かった。しかし、近年の研究の進展により摂関期の政治構造の詳細が明らかになっていくことを踏まえると、摂関政治から院政への移行について摂関期の側から改

めて検討することが必要である。そこで障壁となるのが、藤原頼通・教通・師実の時期の史料が前後の時期に比べて少なくテキスト研究が充実していないという環境である。よって本研究では、当該期の古記録（具体的には『左経記』『春記』『水左記』）の写本調査により研究基盤を固めるとともに、それに基づき摂関政治から院政への政治構造の連続・変容の様相について検討する。

今年度は、『左経記』写本未調査分の調査を進めるとともに、諸写本全体の分析を行った。分析の結果、『左経記』諸写本には「経頼卿記」「左経記」「糸束記」の三種類の内題が見えるが、同じ内題を持つ写本群は冊数や字配りに共通の特徴を持つこと、さらにその中でもいくつかのグループ分けが可能であることが判明した。この内容については論文化を進めている。また、古写本を中心とした分析結果の一部を論文化したものが近く掲載予定である。

『春記』については、インターネット上で閲覧可能な写本を中心に、古写本との関係や構成のパターンを手掛かりとして分析を進めた。『水左記』については、二〇二〇年度に引き続き若手研究「『水左記』註釈の作成による古代・中世移行期の研究」（課題番号二〇K一三一七八）の研究会に参加し（二・三回）、その成果を北村安裕・磐下徹・重田香澄各氏との共著『水左記』の研究―康平七年九月―一月』（『岐阜聖徳学園大学紀要（教育学部編）』六一、二〇二二年二月）にまとめた。

III FとIII Gを用いたオンライン翻刻支援システムの開発

- 一、研究費種目 若手研究
- 二、課題番号 一九K二〇六二六
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費二〇〇万円、間接経費六〇万円
- 五、研究組織 研究代表者 中村 覚
- 六、研究の概要 二〇二〇年度より、人間と機械の両者によるテキストデータの作成支援に

取り組んでいる。人間によるテキストデータ作成支援に関する研究成果として、OSSのソースコードエディタであるVimの拡張機能として翻刻支援システムの開発と公開を行なった。具体的には、「E」によるルビ（Ruby）や校異情報（app）、および割注などのマークアップを支援する機能をVimの拡張機能として開発した。またXMLファイルの編集に合わせ、表示結果例をリアルタイムにプレビュー可能な機能も提供する。これらの機能を用いることにより、「E」を用いたテキストデータの作成を支援する。機械によるテキストデータ作成支援に関する研究成果として、「デジタル源氏物語（『画像検索版』）」というウェブサイトを構築・公開した。本ウェブサイトの特徴として、くずし字OCRと編集距離を利用して、テキストデータが類似する写本・版本の画像を自動的に推薦する機能を提供する。本ウェブサイトを通じて、一部認識誤りを含むOCRテキストデータの利用方法の一例を示すことができた。また、本ウェブサイトの構築に合わせて、CODI（人文学オープンデータ共同利用センター）が公開する「くずし字データセット」を用いて独自のくずし字OCRモデルを開発した。深層学習を用いた文字検出と文字認識、および読み順の自動推定を行う三つのステージから構成される。今後、本モデルの公開を行い、第三者が利用可能な環境を整備する。

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

- 一、研究費種目 若手研究
- 二、課題番号 二〇K一三一七二
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費七〇万円、間接経費二二万円
- 五、研究組織 研究代表者 岡本 真
- 六、研究の概要 本研究は、中近世に日本が諸外国とのあいだでやりとりした外交文書のうち、原本が今日所在不明で、写本の形でしか伝わっていないものや、複数の

文書写本を収録した外交文書集を対象に、史料学的研究を実施するものである。具体的には、写本をできる限り幅広く調査・収集したうえで、同一の外交文書や外交文書集の諸写本同士を比較対校することにより、それらの史料の原態を可能な限り復原することをこころみる。そして、それによって、当該期の日本の対外関係史をあらたな視点から研究することを企図している。

今年度も前年度と同様、新型コロナウイルス感染症の拡大のために、海外調査や出張を伴う国内調査の実施がむずかしい状況だった。そのため、当初に予定していた国内外の史料調査の実施を断念し、その代替として、所蔵機関に史料の撮影を要請して複写を入手し、それをもちいることで外交文書集写本の検討に努めた。また、本研究の今年度までの成果を含む単著を刊行した。そして、前年度および今年度途中までの作業結果をもとに、主として中世の外交文書を多く収録する瑞溪周鳳撰『善隣国宝記』について、現在までに入手できている写本の校異情報をテキストとして蓄積することを開始した。これは、本研究の最終年度に研究成果として公開する予定である。そのため今年度には、どのような形式で公開するのが適切かを、外部専門家の助言をおおぎつつ、集中的に検討した。その結果を踏まえて、『TEI (Text Encoding Initiative) ガイドライン』に準拠して、校異情報を記入したXMLファイルを作成し、そのウェブ公開を目指す方針を定めた。この方針に至った理由のひとつは、デジタル技術の発展により、今後の利活用や研究のさらなる進展を企図するうえで、オンラインでの公開こそが最善であると考えたためである。またもうひとつは、オンライン公開を前提とした場合、日本国内外を問わず利用しやすい、できる限り汎用性の高い形式にすることが必要であり、それには、欧米の研究者を中心に策定され、近年には日本を含む東アジア言語のテキストにも利用されつつある、『TEIガイドライン』に準拠することが適切であると考えたためである。そして、この方針にもとづき、今年度後半には学術専門職員の雇用を開始し、情報の整理および公開に向けたファイルに関する補助作業に従事してもらっている。

日本近世における政教関係の形成と確立

- 一、研究費種目 若手研究
- 二、課題番号 二一K一三〇九〇
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 林 晃弘
- 六、研究の概要

近世の政治権力と仏教教団は、中世以前とは異なる新たな関係を形成する。本研究の目的はその過程を政治史的な背景を踏まえて明らかにすることである。二〇二一年度の主な実績については、①幕府と仏教教団の間における組織的関係の形成、②藩の寺院行政を組み込んだ分析の二つの面から概要を示すと以下の通りである。

①については、近世初期の幕府寺社政策に関する根本史料でありながら、史料自体の分析が十分になされてこなかった以心崇伝の記録類について、改めて原本の写真版・関連史料にあたり、『本光国師日記』—幕府に仕えた禪僧の記録（福田千鶴・藤實久美子編『近世日記の世界』ミネルヴァ書房、二〇二二年所収）をまとめた。「案紙」（＝『本光国師日記』）と「僧録帳」の関係や、全文が抹消された文書案についていくつかの新知見が得られた。寺院側の史料としては、薬師寺（奈良市）にて近世文書の調査・撮影を行い、また、京都の本山寺院である泉涌寺、仁和寺、臨濟宗五山派の江戸触頭である金地院の史料を用いて検討を進めた。これらを踏まえて、一六世紀末の豊臣政権期から一七世紀半ばの寛文期にかけて通時的に見通す研究に取り組んだ。

②については、二〇二二年一月に、朴澤直秀氏代表の科研・基盤研究(C)「寺院史料の調査と個別的動向の解明に立脚した近世宗教政策像の更新」（課題番号二〇K〇〇九六四）との合同の研究会で、「肥後熊本入封後の細川氏による真宗統制」と題した中間的な研究報告を行った。近年の永青文庫所蔵史料の調査で把握された史料を分析し、近世前期の熊本藩の真宗寺院に対する統制のあり方を明らかにした。この内容は、必要な史料の調査を行い、論文等としてまとめる予定である。

この他、関ヶ原合戦軍記のひとつである『慶長治乱記』の検討の中で、東山大仏千僧会への出仕・不出仕をめぐる日蓮宗の僧の紛争をうけて、慶長四年（一五九九）に徳川家康が対論を命じて裁定を下した出来事の叙述について触れた。それによりこの一件に対する一七世紀半ばにおける社会での認識の一端を明らかにできた。

持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステム構築手法の開発

- 一、研究費種目 若手研究
- 二、課題番号 二一K一八〇一四
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費二六〇万円、間接経費七八万円
- 五、研究組織
- 六、研究の概要 中村 覚

今年度は静的サイトとしてデジタルアーカイブシステムを構築する手法を検討し、基盤となるシステム開発を行なった。具体的には、オープンソースのWebアプリケーションフレームワークであるNext.jsを用いたシステム開発を行なった。CSVファイルの形式で用意した画像やメタデータに関する情報を読み込み、静的なウェブサイトを自動的に構築する。また上記システムを用いて、以下に示すデジタルアーカイブシステムを構築した。いずれも静的サイトとして構築し、GitHubなどのホスティングサービス上で公開している。渋沢栄一記念財団「渋沢栄一ダイアリー」／東洋文庫『大正新脩大藏経』底本・校本データベース「西蓮社（旧増上寺報恩蔵）蔵嘉興版大藏経目録データベース」「東洋文庫水経注図データベース」／東京大学史料編纂所「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」「倭寇図巻デジタルアーカイブ」／国立歴史民俗博物館「デジタル延喜式」上記において、特に「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」「倭寇図巻デジタルアーカイブ」については、IIIcを用いた画像公開についても静的サイトで実現している。具体的には、IIIf Image API Level 0を採用し、事前にタイトル画像を生成しておく

ことで、サーバーレスなIIIc対応を行なっている。また、人間のためのユーザーインタフェースに加えて、機械処理に適したデータセットを提供することで、計算機による二次利用も支援する。具体的な活用事例として、Google Dataset Searchとの連携を実現している。

鎌倉幕府法研究の再始動―書誌学的方法による基礎研究―

- 一、研究費種目 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 一九K二三一〇四
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費四七万三五一四円、間接経費〇円
- 五、研究組織
- 六、研究の概要 木下竜馬

御成敗式目をはじめとする鎌倉幕府法は、日本中世史像を形作る重要な素材である。しかし、その研究は隘路に陥っている。その理由は、既存の『中世法制史料集』の鎌倉幕府法本文に依存しすぎたあまり、幕府法の原史料の基礎的な検討が不十分だからであると考えられる。本研究は、文献学・書誌学的方法を取り入れ、鎌倉幕府法の新史料を発掘し、既知の諸史料を含め批判・分析して系統立てる。これにより、鎌倉幕府法研究を再始動させ、日本中世史像の見直しにつなげたい。

本年度も、昨年度に引き続き目録やデータベース類を渉猟し、鎌倉幕府法史料の所在把握に注力した。それにもとづき、東京大学法制史資料室、公益財団法人東洋文庫や京都大学附属図書館で調査を行い、学界未紹介の写本を複数見出すことができた。また東洋文庫、明治大学図書館などが所蔵するいくつかの史料について、紙焼きやデジタルデータを調達した。式目注釈書の研究会もオンラインにおいて継続している。

また成果物として、この研究で発見した史料の翻刻を、「史料紹介 翻刻 青山文庫本貞永式目追加 その一」として『鎌倉遺文研究』第四九号（二〇二二年四月刊行）に掲載する準備を進めた。以後、順次発表していく予定で

ある。

去年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大のため、研究期間をさらに延長した。

平安時代における時代認識に関する研究

- 一、研究費種目 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 二〇K二二〇一一
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 小塩 慶
- 六、事業の概要

(1) 研究の目的

本研究の目的は、平安貴族が自国の歴史をいかに認識していたかを、その形成過程とともに明らかにすることにある。『愚管抄』などには比較的明瞭な時期区分が示されるが、古記録を紐解くと、時代区分や時代認識は記主や時期によってむしろ流動的であることがわかり、歴史物語等との認識のずれも注目される。本研究では、古記録と歴史物語・説話集という異なるジャンルのテキストから、時代観の形成過程を考察する。

(2) 二〇二二年度の実績

本年度は、引き続き古記録に見える先例の調査を、鳥羽天皇の治世まで行った。また、部類記等を調査して日記の逸文を収集し、既に作業を完了させた時期についても事例を補足することができた。本研究で特に問題としたい延喜・天曆聖代観は、院政初期には確実に存在したと考えられる。したがって古記録の調査はここで区切りをつけ、問題を相対化するために歴史物語や説話集に現れる時代認識の検討に移った。その結果、平安貴族の日常の儀式や政務の中で重視される時代と、歴史物語や説話集において聖代とされる時代とは、必ずしも一致するわけではないことも明らかになりつつある。時代観・聖代観は、個人や時代の影響を受けやすいものであり、容易に一般化

することは出来ない。したがって、各説話の成立時期（作品の成立時期とはずれが生じる）を確定していく作業も必要となる。その事例研究のひとつとして、『古今著聞集』所載の説話と同類の話を載せる史料の調査も行った。

一方で、昨年度より調査している撰関期以降の祥瑞については、引き続き関連記事の捜索を行い、検討を深めることができた。当該期の祥瑞には平安貴族の国内の時代認識も投影されていると考えられる。以上の内容は口頭報告を行い、当日の議論も踏まえて論文文化をすすめている。

サファヴィー朝との合意文書によるオランダ東インド会社外交文書編纂の研究

- 一、研究費種目 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 二〇K二二〇一二
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費九〇万円、間接経費二七万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 大東敬典
- 六、事業の概要

本研究は、オランダ東インド会社とサファヴィー朝との間で作成された合意文書の総合的調査を行い、①同文書群の形式・内容・相互関係を明らかにすること、②それを手掛かりに、会社がアジア各地から収集し作成した合意文書集 *Contractboek* の性格について史料学的検討を行うこと、③さらに、二〇世紀前半に同史料を基に編纂された *Corpus diplomaticum Neerland-Indicum*（『蘭領東インド外交文書集』）について、史学史的検討を加えることを目的とする。

初年度である二〇二〇年度に予定していたオランダ調査は断念せざるを得なかったが、その後オランダ国立文書館によるオランダ東インド会社文書のオンライン公開が進み、当初予定していなかった史料調査が可能になった。その結果、オランダの一七人会及びアムステルダム・カメルからバタヴィア総督府（現ジャカルタ）へ送られた訓令の中に、アジア各地で結ばれた合

意に対する会社重役たちの見解が含まれていることが判明した。

二〇二一年度は新型コロナウイルス感染症の世界的拡大のため、予定していたインドネシア国立文書館での調査を行うことができず、バタヴィア総督府側の認識については研究が進まなかった。幸い本研究期間を一年延長することができたので、二〇二二年度にこの課題に取り組みたい。

その他の課題には取り組みことができた。得られた成果は以下の通りである。

オランダ東インド会社外交に関する基幹史料集『蘭領東インド外交文書集』を利用し、会社とサファヴィー朝の合意文書の総合的調査を進めた。二〇二〇年度の調査では、先行研究が注目してきた絹貿易に関する合意文書とは別に、通商・居住・信仰の自由など様々な特権を認める合意文書が存在することを明らかにした。二〇二一年度はその最初の例として一六二三年一月二一日付文書を翻訳し、必要な注を付して刊行した。〔『蘭領東インド外交文書集』久礼克季・富田暁・松方冬子と共編訳、解題を担当『東京大学史料編纂所研究紀要』三三、二〇二二年三月〕同文書は、会社がベルシア進出直後にサファヴィー朝君主アッパース一世に請願し認められた合計二三の特権を伝えるものであるが、会社が王のムスリム臣民に対して改宗を強要することを禁じた文言も含まれ、王朝による信仰の管理に関する貴重な情報も伝えていることを示した。

会社がアジア各地の支配者と結んだ合意については、通常現地語とオランダ語の両方で文書が作成されたが、会社はオランダ語版のみ収集し、Contractboekkenと呼ばれる資料集を編纂していた。二〇二〇年度の調査では、アッパース二世発行のベルシア語勅令 (*firman*) とそれに対応するオランダ語 *contract* を対照し、会社が *firman* を *contract* に作りかえた過程の一端を明らかにした。二〇二一年度もこの *contract* という概念の曖昧さについて分析を進め、オランダ国立文書館所蔵 Contractboekken に収録されたサファヴィー朝君主の勅令の中には、王朝の行政官に宛てられた命令が含まれており、会社の言う *contract* が必ずしも会社と王の間の合意という形式を備えていないことを明らかにした。

また本研究と関連して、二〇二〇年度に『蘭領東インド外交文書集』研究

会を立ち上げ、史料編纂所共同利用共同研究拠点特定共同研究「モンズーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」の一環として所収文書の翻訳を進めた。研究会には、松方冬子氏（東京大学史料編纂所）、久礼克季氏（川村学園女子大学）、富田暁氏（岡山大学）が参加している。二〇二一年度はベルシア、セイロン、コロマンデルの合意文書を対象に、インド洋における会社外交の実態について検討を行った。現在それらの史料について解説論文を準備している。

古記録フルテキストデータベース

- 一、研究費種目 研究成果公開促進費（データベース）
- 二、課題番号 一七HP七〇〇三
- 三、研究期間 二〇一七年度～二〇二一年度
- 四、研究経費 一六〇万円
- 五、研究組織

作成者 古記録フルテキストデータベース作成グループ
研究代表者 尾上陽介
作成分担者 本郷恵子・菊地大樹・井上聡・遠藤珠紀
六、事業の概要

古記録フルテキストデータベースは、「古記録」の全文データベース化を目的とし、『大日本古記録』所収の日記を中心に入力を行っている。今年度は『大日本古記録 言経卿記』二～四のデータ作成・公開を果たした。また「筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―」（基盤研究(A)・代表末柄豊）の協力を得て、『大日本古記録小右記』一〇のデータ作成・公開を行った。そのほか禅籍史料研究プロジェクトの成果として、古記録フルテキストデータベースより、本所所蔵「叢林文藻」の公開を行った。「叢林文藻」については、本文データのほか原本画像ともリンクする試みを行っている。

大日本史料総合データベース（平安時代・全文）

一、研究費種目 研究成果公開促進費（データベース）

二、課題番号 二一HP八〇〇五

三、事業期間 二〇二一年度

四、事業経費 四九〇万円

五、研究組織

作成者 平安時代編年史料データベース作成グループ

作成代表者 山口英男

六、本年度の事業の概要

大日本史料総合データベースは、『大日本史料』の網文・引用書目・索引語句（人名・官職名）・全文を対象とするデータベースである。整備されたデータはSHIPSから公開されている。その内の全文データについては、刊行時にテキストデータの入手が可能となった近年出版分にとどまっておらず、それ以前に刊行された三七〇冊余のデータは整備されていない。本事業では、平安時代の八八七年から一〇二八年までが連続する『大日本史料』第一・二編合計五五冊・約三二、〇〇〇頁について、数年かけて全文データを整備し、大日本史料総合データベースから公開しようとするものである。二〇二一年度は、第一編各冊の管理情報となる引用書目データの整備を行うとともに、第一編第六〜一冊の全文テキストデータを生成し、登録作業を進めた。登録と並行して所内公開を開始しているが、内容の整備の確認できたものから順次一般公開に供する予定である。二〇二二年三月末の段階で第一編第一〜八冊のデータを公開している。

日本古書ユニオンカタログ

一、研究成果公開促進費（データベース）

二、課題番号 二一HP八〇〇六

三、事業期間 二〇二一年度

四、補助金額 六九〇万円

五、作成組織

名称 日本古書ユニオンカタログ作成グループ

代表 渡邊正男

作成分担者 遠藤基郎・金子 拓・西田友広・遠藤珠紀・堀川康史・木

下竜馬・中村 覚

六、事業の概要

「日本古書ユニオンカタログ」は、日本列島上で作成された文書に関する目録データの網羅的収集を目指して、一九八五年より継続して作成しているデータベースである。近年は、おおよそ一六〇〇年以前に作成された文書に関して、原本はもとより、史料編纂所が収集・架蔵している影写本・謄写本・写真帳・目録・刊本史料集・デジタルデータのほか、Webサイトなどあらゆる媒体上のデータを網羅し、同一実体の文書についてはデータを統合して、相互参照を可能にする事業を行っている。また、史料編纂所の公開するフルテキスト系各種古書データベース、並びに、同所架蔵史料及び同所出版物のデジタル画像とリンクすることにより、史料編纂所が提供する古文書関係情報を十二分に活用し得る環境の構築も併行して進めている。さらに、所外の神奈川県立金沢文庫「金沢文庫文書データベース」・滋賀県立琵琶湖博物館などとの連携も実現している。

二〇一三年度に開始し二〇一六年度に終了した京都府所在古文書写真帳所収史料のデータ作成に続いて、二〇一七年度からは、京都府を除く畿内及び関東所在古文書写真帳所収史料のデータ作成、関連する刊本史料集等のデータ作成、並びに、データ相互及び画像データとのリンク作成に取り組んでいる。今年度は約三一、〇〇〇件のデータを作成・公開し、その結果、データベース全体での公開件数は約九一九、〇〇〇件となった。

受託研究

人文学・社会科学データインフラ構築推進事業拠点事業

一、経費種目

日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業拠点機関におけるデー

タ共有基盤の構築・強化委託業務」

二、業務期間 二〇一九一〜二〇二二年度

三、業務経費 直接経費二四五〇万円 間接経費七三五万円

四、業務実施組織 東京大学史料編纂所

業務実施責任者 本郷恵子(前近代日本史情報国際センター長)

五、運営員会メンバー(二〇二二年度)

本郷恵子・保谷 徹・箱石 大・金子 拓・山田太造・中

村寛・渋谷綾子・平澤加奈子・犬飼なほみ・茅根 修・瀧

田麻由(以上、史料編纂所)、

下田正弘・高橋典幸・大向一輝・渡邊要一郎・山田俊幸

(以上、人文社会系研究科)

六、業務概要

二〇一九年一〇月、日本学術振興会(JSPS)の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業拠点機関におけるデータ共有基盤の構築・強化委託業務」につき、委託契約を締結して受託事業を開始した。

本事業の目的は「人文学・社会科学研究に係るデータを分野や国を超えて共有・利活用する総合的なシステムを構築すること」にあり、委託業務は「国内・海外に所在する史料の調査・研究や蓄積した史料情報・研究成果の研究資源化に組織的に取り組み、日本史学を中心とした人文学データの共有基盤を整備して、これを長期的に利用可能にするためのデジタルアーカイブ機能の強化」がその目的・意義とされている(業務実施計画書)。

委託業務の遂行には、前近代日本史情報国際センター長(所長兼任)のもとに運営委員会を設置し、同センターと連携する本学人文社会系研究科の人文情報学部門が参加している。業務内容としては、以下のような三つの項目(実施ユニット)と担当責任者を決めて遂行した。

① データアーカイブ機能の強化(共有化ユニット): OAIS (Open Archival Information System) 参照モデルに基づく長期保存・長期利用のためのシステム環境整備/データ利用条件の整備/データ分析環境の提供、担当責任者 山田太造准教授

② 海外発信・連携機能の強化(国際化ユニット): 海外発信の強化・海外史

料保存機能との連携強化/データベース英訳事業の推進・国際交流、担当責任者 保谷 徹教授

③ データ間の連携を可能にする環境の整備(連結化ユニット): API (Application Programming Interface) の整備、担当責任者 大向一輝准教授(人文社会系研究科)

以下、業務実施ユニットごとに本年度の取組みを整理しておく。

① データアーカイブ機能の強化(共有化ユニット)

データの長期保存・長期利用のためのシステム環境整備・ウェブを介したデータ提供を中核に据えたデータ管理を主軸に置き、採訪進捗管理システムをさらに強化していくことで、史料調査データの長期保存・長期利用を目指した。SHDSが二〇二二年度中にシステム更新を行い、オンプレミスサーバシステムからクラウドコンピューティング利用を中核としたシステム構成へと変貌を遂げたことから、採訪進捗管理システムをクラウド化し、名称を「史料画像デジタル化進捗管理システム」に変更した。これにより、アクセス環境が史料編纂所「H2」上からウェブへと変化するため、ウェブを介したデータ入力方法の確立、セキュリティ面の再検討などの課題へ対処しつつ、データ公開までのフローを再検討し、ユーザーインタフェースに関する付帯意見への対応を含め、改修を行った。また、二〇二〇年度に採択された「JSTの科研費基盤研究(A)「コンテキストに応じた人文学データパッケージ化に関する研究」(研究代表者・山家浩樹教授)は、写本などの作成過程、史料の伝来・由来、紙質調査など人文学研究で史料を扱う上で欠かせないデータを目録データと紐付けて行く手法の確立を推進している。この成果をデジタル化進捗管理システムに取り入れていくことを検討し、プロトタイプングを進めた。二〇二一年九月の第一一回日本デジタル・ヒューマニティーズ年次大会(JADH2021)では本事業のセッションとしてWSI「歴史学におけるデータ共有、統合化、多角的協働」を実施、一二月の人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2021」では、「日本史史料を対象とした研究データ基盤整備における課題」の報告を行うなど、本事業の発信に努めた。

・データ利用条件の整備: 二〇二二年度は他機関所蔵史料の画像データ利用

条件をさらに広げた。神奈川県立金沢文庫史料、海の見える杜美術館所蔵岩倉具視関係史料、都城島津邸所蔵島津家文書、和歌山県湯浅町所蔵菊池家史料（菊池家は紀州の豪商。菊池海莊関係など幕末維新期研究の重要史料が中心）、京都府立京都学・歴史館所蔵東寺百合文書、日本中世気象災害史年表稿などを対象とし、所蔵機関等との綿密な打ち合わせを経てデータ利用条件を設定、都城島津家文書（約一〇〇〇点）および滋賀県立琵琶湖博物館所蔵東寺関係文書（約一〇七点）のデータを公開した。また、金沢文庫史料（約五〇〇点）のデータを二〇二二年度に公開できるように整備した。

• データ分析環境の提供とデータカタログ整備：人文情報学部で、SAT大蔵経データベースにおいてすでに展開されている、IIF関連APIによる仏典データ連携基盤をさらに整備し、Vietnam Non Preservation Foundation等、新たな海外機関とのデータ連携を行った。国立情報学研究所（NII）が整備を進めている総合的カタログJDCatやオンライン分析へのデータ提供の観点から、人文学でのデータカタログの形式やオンライン分析手法の検証を進め、プロトタイプینگを重ねながら深化させた。データカタログ整備では、特に総合的データカタログへのデータ提供、およびDOI付与が必須であることから、本年度はこれらを試行し、継続可能な運用フローの確立を進めた。

② 海外発信・連携機能の強化（国際化）

• 多言語対応：二〇二〇年度までに、「維新史料研究の国際ハブ拠点形成」の成果をもとに、SHIPSデータベースのひとつである「維新史料綱要」データベースにおいてユーザーインタフェースの英語版、およびデータベースの英訳化と史料用語・歴史用語の英訳グロッサリー作成作業を推進し、全一〇巻のうち第三巻前半までの網文（史料タイトル）の英語版を完成、登録し、約六〇〇〇件の英訳データ提供を実現した。歴史用語の英訳については日々検証を進めており、海外発信に関する付帯意見への対応として、ブラッシュアップされた英訳データの搭載を行った。これに関連して、一二月に国際研究会を開催、海外の研究者と日本史情報の国際化推進について意見交換を行った。

• データ共有・利活用に関するシンポジウム等：九月に、ロシア・サンクトペテルブルクでハイブリッド方式で行われた第三二回日本資料専門家欧州協会年次大会（EAIJRS2021）では、事業報告二本と機関ワークショップを実施し、海外史料保存機関の実務者達と議論を行った。一〇月には、国立大学附置研究所・センター会議第三部会（人文・社会科学系）シンポジウム（オンライン）を史料編纂所が主催、報告を行った。二〇二二年三月にハワイ・ホノルルでハイブリッド方式で行われた、アジア研究協会（Association for Asian Studies、AAS）2022では日本史料データの海外発信に関するワークショップ「Passions and Realities: Prospects and Challenges for Global Access to Japanese Historical Information」を実施し、議論を行った。また横浜開港資料館と協議の上、一九世紀フランス外務省史料マイクロフィルム（約六六〇〇コマ）のデジタル化を行い、National Archives and Records Administrationやフランス外交文書館など、米・仏国の機関が所蔵する日本関係史料データの共有・提供について協議を進めた。

③ データ間の連携を可能にする環境の整備（連結化）

• API（Application Programming Interface）の整備：Hi-CATの画像ビューアはデータ利用条件が提示されていない。これを可能にするために、Hi-CAT Plusでの成果をHi-CATへ適用した。また、二〇一九年より運用を開始した史料集版面ギャラリ（史料編纂所が編纂・出版した史料集の版面画像ギャラリ）への適用を進めた。金沢文庫文書データベースとの連携はSHIPSデータベースの一つである日本古文書ユニオンカタログを介して実施するため、システム間連携が可能となるようシステム改修を実施した。さらに、SATにおいてすでに展開されているIIF関連APIによる仏典データ連携基盤を改修し、海外機関との連携を図った。史的な文字データベース連携検索システム運用状況をフィードバックさせ、文字画像データに関するIIF Presentation APIの利用方法や文字メタデータ基盤の改善を行った。特定のデータベースを介することなく、研究素材となるデータを提供できるよう、データセットとして整備を行った。Google Dataset Searchなど汎用的に提供できる方法についても検討した。史料

編纂所では二〇二一年度に「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」事業を実施し、人文学を対象としたデータ駆動型によるデータ整備方法を検討した。

(本郷恵子)

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

- 一、研究費種目 受託研究(福岡市史編集委員会)
- 二、研究期間 二〇二一年度
- 三、研究経費 一〇九万円
- 四、研究組織
- 研究代表者 山口英男
- 研究分担者 岡本 真
- 五、研究概要

本研究は、二〇〇六年度から引き続き福岡市史編集委員会から受託し、福岡市史編纂のため基礎研究となる「福岡市域に関わる資料の調査及び研究」を行うものである。福岡市史専門委員を委嘱されている山口・岡本を中心に、本研究費で雇用する支援スタッフ等を加えて研究組織を構成し、史料編纂所に架蔵されている写真帳・影写本・謄写本等から関連史料を調査・研究する計画である。本年度も引き続き古代の未公刊史料類、中世の福岡市外所在史料の調査を実施した。主な内容は次の通りである。

〔古代〕

引き続き福岡市域に関わる史料を蒐集し、内容整理及び年次判定等のための解析を行った(対象史料 宮内庁書陵部所蔵の儀式・年中行事関係史料)。

〔中世〕

昨年度に引き続き、記録篇の刊行にむけて、史料編纂所架蔵謄写本・写真帳から福岡市関連事項の抽出を行った。主たる抽出対象は次のとおりである。建仁并諸塔頭略記・建仁塔頭次第・建仁寺塔頭歴譜・春沢録・東大寺別当次第・疏稿・江西集・五山文編・謙齋稿・兼石卿記・鉄文禪師語録。

(山口英男・岡本 真)

賀茂別雷神社氏人発給文書の分析による氏人組織の研究

- 一、研究費種目 受託研究(賀茂別雷神社)
- 二、研究期間 二〇二一年度(二〇二一年四月～二〇二二年三月)
- 三、研究経費 九二万円(直接経費七〇万円)
- 四、研究組織
- 研究代表者 金子 拓
- 五、研究概要

賀茂別雷神社編纂にかかる『賀茂別雷神社史料』編纂のための研究作業の一部について、本所教職員で構成する研究組織が賀茂別雷神社からの研究費を得て実施した。この経費により学術専門職員一名を雇用し、『賀茂別雷神社史料1 氏人置文』に収められた史料について、本所撮影の賀茂別雷神社文書画像から、林讓氏代表科研「前近代人物情報論の構築にむけた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」、末柄豊氏代表科研「筆跡・花押情報の高度利活用研究」により開発された花押収集システムを用い、氏人花押の収集と人物情報の蓄積をおこない、氏人組織の研究を進めた。末柄氏代表の科研で雇用された学術専門職員の作業(賀茂別雷神社史料2 氏人起請文・請文・請状)の花押切り出し)と合わせ、今年度までで約二八〇〇〇件の花押切り出し、それにとまう氏人名比定のための情報蓄積を行っている。

(金子 拓)

寄付金

歴史史料による日本中世村落景観の復元とその長期持続に関する研究

- 一、研究費種目 公益財団法人鹿島学術振興財団助成金
- 二、研究期間 二〇二一年度
- 三、研究経費 九五万円

四、研究組織

研究代表者 榎原雅治

似島雄一（早稲田大学文学部講師）

五、研究の概要

日本列島上では自然災害や産業の変化によって、人々の居住空間は絶えず変動してきた。近年顕著な自然災害による住宅地被災の背景には、その土地のもつ本来の性質を無視した居住空間の急激な変化があるとの指摘もある。

他方、中世前期以来五百年以上にわたって維持され、多数の歴史の史料を今に伝えてきた集落も珍しくない。本研究課題では、中世の状況を描いた絵図や土地台帳などの荘園史料を用いて、中世の集落の所在形態や耕地の展開状況を復元的に解明するとともに、長期にわたって持続してきた集落の居住形態を、自然災害の危険性や利水など、自然地形に規定された環境の観点から検討する。これは日本列島上の居住環境の長期持続を可能とする条件を考えるうえで意義のあることと考える。具体的には次のような方法で研究を行う。

① 中世の絵図と荘園史料によって各荘園の中世前期の集落の立地状況、河川の流路や洪水の様子、山野の状況などを復元的に検討する。

② 近世の文献史料、絵図、近代の地形図や高度成長期以前に撮影された航空写真によって、中世前期に成立した集落がその後どのような歩みをとったか（継続／消滅 拡大／縮小）を解明する。また近世以後、高度経済成長期以前まで、どのような開発が行われ、原景観に対する人為的な変化が加えられてきたかを検討することによって、逆に中世史料からだけではわからない中世村落の状況を推定する。

③ 各荘園に該当する地域の近世／現代のさまざまな災害履歴の情報を収集し、開発のあり方と被災状況の関係を検討する。

以上の検討を通じて、長期にわたって維持されてきた集落はどのような条件を備えていたのか、また居住空間を維持するためにどのような努力がなされてきたのかを明らかにする。

5 本年度の研究の成果概要

① 岡山平野旭川下流域平野における中世前期の開発とその長期持続の検討

a 旭川下流域の沖積平野において一〇世紀末までに設置されていた諸郷を国

土地院標高図で検証した結果、それらは現在標高二・五m以上となっている区域内に限られることがわかった。旭川下流域では一一世紀～一三世紀に摂関家領鹿田庄、東大寺領野田庄、春日社領宇治郷荒野など、多くの荘園が成立するが、これらは現在標高一・五m～二・五mとなっている区域内にあたる。当該期にこの標高区域での沖積と開発が進んだことが推定される。

b 一三世紀に描かれた「備前国宇治郷荒野図」（奈良・大宮家所蔵）は、上記の区域における鎌倉期の干拓による新開発地の様子を描いた絵図である。新開発地にあたる区域の現行の用水系を調査すると、一〇世紀以前から設置されていた宇治郷より延伸された用水によるものであることが判明した。さらに宇治郷および新開発地に相当する区域の現行の神社信仰圏を調査した結果、上記用水系による灌漑域と神社の氏子圏が一致することが明らかになった。鎌倉期の開発のあり方に規定された用水の灌漑域と神社信仰圏が現在まで長期にわたって持続していると考えられる。

② 静岡県中遠平野の景観復元と開発・水害の相関関係の検討

a 戦国末期の今川家の発給文書、近世初期の絵図、国土地理院標高図を対照させた結果、太田川流域の中遠平野は戦国末期までは浅い潟湖であったことが明らかになった。

b 近世初期の沿岸砂州の開削や築堤工事によってこの地域では新田開発が急速に進むが、一七世紀末、大型の台風にもなう高潮によって壊滅的な被害を受ける。当時の文献史料によって、水没地は戦国末期まで潟湖であった区域と一致することが判明した。築堤や開削などの工事を施したとしても、本来の地形に規定された地理的な特性は容易には変形できるものではなく、巨大な自然災害に対しては脆弱であることが知られる。

6 今後の研究の見通し

本課題の実施期間は新型コロナウイルス感染症の拡大により、申請時に予定していた現地調査を縮小せざるをえなかった。当初、検討対象とした荘園の故地においては植生など現在の集落環境も調査する予定であったが、これについては断念した。一方で、国土地理院の公開する地理情報を活用することによって、史料によって復元した中世景観を、自然地形の観点から分析す

る方法を高めることができた。今後は、本期間内に調査できなかった備中国服部郷の現地調査を実施するとともに、近世の絵図や戦前の地形図との対照を重ねることによって、中世村落が現代までどのような過程を経て持続／変容してきたかについての検討を進めたい。

正保琉球国絵図の研究資源化とデジタルアーカイブの構築

- 一、研究費種目 公益財団法人鹿島学術振興財団研究助成
- 二、研究期間 二〇二〇年度～二〇二一年度
- 三、研究経費 直接経費一四〇万円
- 四、研究組織
研究代表者 黒嶋 敏
共同研究者 高橋公明・村井章介・渡辺美季
- 五、研究の概要

本所所蔵の国宝「島津家文書」に含まれる正保琉球国絵図写は、琉球諸島を描いた正保国絵図（一六四九年に江戸幕府に提出）の忠実な写しとされ、史料的价值の高さから歴史学や地理学など様々な分野において研究素材となってきた。すでに同図は沖縄県教育委員会編『琉球国絵図史料集 第一集』（沖縄県教育委員会、一九九二年）にて絵図のトレースと文字の翻刻が示されているが、一辺が約六メートルに及ぶ大型絵図であるため、刊本での複製には限界があった。しかし、それを補う十分な複製資料は提供されておらず、大型絵図であることが災いして原本の展開すら困難な状況にあった。

本研究は、正保琉球国絵図三舗の高精細デジタルデータ化を行なうとともに、PC上で公開可能なデジタルアーカイブを構築することで、同絵図の研究資源化を図るものである。課題遂行に当たっては、同じく黒嶋が研究代表者となっている科学研究補助金「南西諸島における海上交通の復元的研究——帆船の時代——の「歴史航海図」」（基盤研究(B)）などと連携して進めた。

前年度までに、国立歴史民俗博物館の協力を得て正保琉球国絵図三舗のデジタルスキャンを実施しており、本年度はこのデータをもとに、史料編纂所附属の前近代日本史情報国際センターの協力を得ながら「正保琉球国絵図デ

ジタルアーカイブ」を構築し、二〇二一年一月より公開を開始した(<https://www.hiu-tokyo.ac.jp/collection/digitalgallery/ryukyuu/>)。このアーカイブはIII-F対応の注釈表示機能などを実装したシステムで、高精細画像の閲覧だけでなく、書き込まれた文字情報のテキスト検索、現代地図との重ね合わせ、他機関が所蔵する類似絵図との並列表示などの機能を持ち、国絵図のデジタル公開方法としては国内で初の試みである。また、専門家以外の利用にとってハードルになる崩し字がテキスト検索できるようになり、これらの汎用性のある機能をもとに、学校教育や一般での利用も進むものとなる。

なお、アーカイブ構築に関連して、史料編纂所主催の国際研究集会「日本中世史データベースの国際比較」(二〇二一年五月二八日、オンライン)、および史料編纂所画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センターの主催する公開研究集会「新たな画像公開方法とデジタル連携」(二〇二一年一月三日、一部オンライン)が開催され、それぞれに共催として参画した。また、本受託研究全体の成果報告の場として、琉球沖縄歴史学会例会「絵図・古地図と琉球史研究」(二〇二二年二月五日、オンライン開催)を開催し、黒嶋と高橋公明が報告を行った。いずれも国内外の研究者および一般からの参加を得て、とくにアーカイブの機能面を中心に活発な意見交換がなされた。

二年間の研究期間を通して、重点を置いた絵図のデジタル化とアーカイブ構築については順調に進んだといえる。とくにスキャンによる高精細画像をベースにしたことで、絵図自体のさらなる分析が可能となり、研究資源化という本研究の課題は達成できたと考えている。一方で、長期化したコロナ禍の影響により、当初計画の中止・変更を余儀なくされた部分も大きく、現地調査や文献調査については課題を残すこととなった。これらの課題については、別途必要となる研究資金を獲得したうえで、あらためて実現に向けた検討を進めていきたい。

外交の世界史の構築——一五～一九世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制——

一、研究費種目 鹿島学術振興財産研究助成

二、研究期間 二〇二〇年度～二〇二一年度

三、研究経費 一三〇万円(総額二六五万円)

四、研究組織

研究代表者 松方冬子

共同研究者 森永貴子(立命館大学)、塩谷哲史(つくば大学)、彭浩

(大阪市立大学)、菊池雄太(立教大学)、岡本隆司(京都

府立大学)、松本あづさ(藤女子大学)、辻 大和(横浜国

立大学)

五、研究の概要

本研究では日本史研究の蓄積を、他地域の事例と比較することで、新しい世界史像を構築しようとする。最終的には、ヨーロッパ中心主義を克服し、より平らかな世界史を描くことを目指す。

本研究は、「交易や人の移動に対する権力のコントロール」の、ユーラシア各地におけるあり方を実証的に検証し、多角的に比較する独創的・先駆的研究である。以下の三つの指標を用いる。

①外国人や外国人との取引は、どのように統制されているか。政権の発給する外国人統制法(約条、規程、条目など)と商人間の契約の組み合わせか、政権間の条約か。

②政権は国際交易からどのように利益を得ているか。広く浅くとする関税か、コミッション(手数料)、贈物、(貢物)、賄賂などによるか。

③居留民の長は誰のためにいるのか。居留民自身のためか、送り出した国の政権のためか、あるいは滞在国の政権のためか。

一九世紀後半以降、①は「通商」条約、②は「関税」、③は「領事」の問題として整理され、世界のどこでも一元的に理解されるものとして、整理されていくようである。しかし、本研究では、その前史を、各地、各政権、各交易集団の固有性と多様性を踏まえつつ、実証的に明らかにする。

本年度は、以下の活動を行った。

○五月一六日、松方冬子が、Asian Universities Alliance (AUA) のワーク

ショップ(タイ・チュラロンコン大学主催)“The Asian Melting Pot History through a Multicultural Perspective”(オンライン)におろぐ。口頭報告)“Consuls in Asia: How a Chief of Foreign Residents Became a Diplomat”を行った。

○二月二六日、横浜国立大学で、第四回研究会を開催した。松方冬子「関税と領事の前史—オランダ商館長日記から外交の世界史を問う—」、吉岡誠也「岩崎奈緒子『近世後期の世界認識と鎖国』を読んで」の二本の報告と、討論を行った。

○二〇二二年二月二四日、「英語によるオンライン・プレゼンテーション講習会」を開催した。アルバ・エデュ代表 竹内明日香さんを講師として招き、松方ゼミのゼミ生の山本瑞穂さんと松方冬子が練習台となった。

本研究については、以下のウェブサイトを参照されたい。

http://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/gaikou_sekaiishi.html

行動する人の歴史—力はどこからくるか—

一、研究費種目 東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC) 企画研究

二、研究期間 二〇二〇年七月～二〇二二年六月

三、研究経費 総額二〇〇万円

四、研究組織

研究代表者 松方冬子(史料編纂所)

研究分担者 井坂理穂(総合文化研究科)、稲田奈津子(史料編纂所)、

後藤春美(総合文化研究科)、永井久美子(総合文化研究

科)、三枝暁子(人文社会学系研究科)、水野博太(HMC/

人文社会学系研究科)

五、研究の概要

本研究は、人間とは何をして生きるものかという素朴な疑問から出発し、日本・アジアから新しい世界史を構想する。動詞をキー概念として用いることにより、従来歴史学を縛ってきた時間・空間設定(「近世日本」など)から個々の事象を解き放ち、多角的な議論と歴史の動態的把握を可能にするこ

とを目的とする。

二〇二一年度は、六月一日、八月三〇日、一〇月五日、十一月二九日、二〇二二年三月三〇日にメンバーによる研究会を開催した。七月九日には、東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）第三八回オープンセミナー「語る力が権力を作る？―歴史からの問い―」を開催した。記録は、EPMaunies Center Booklet Vol.13『語る力が権力を作る。―歴史からの問い―』（二〇二二年三月）として刊行した。

本研究については、以下のウェブサイトを参照されたい。

http://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/koudou_rekishihml

金石文資料からみた東アジアの墓葬文化―墓誌・買地券を中心に―

一、研究費種目 東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）公募研究（A）

二、研究期間 二〇二〇年度～二〇二一年度

三、研究経費 五八〇万円（期間総額、海外招聘費・研究専念経費含む）

四、研究組織

研究代表者 稲田奈津子

国外招聘研究者 王 海燕（浙江大学歴史学院教授）

五、研究の概要

当初、東アジアの墓葬関連金石文について、現物調査や出土地踏査を通じて東アジアを見渡す視点からの比較研究をするという目的のもと、王海燕氏を二〇二〇年一〇月からの一年間招聘して共同研究する計画であった。しかしCOVID-19の影響により王氏の来日が困難となり、二〇二〇年度は研究費の使用を見合わせた。しかしその間も、王氏との情報交換の場も兼ねて、国際研究集会「中国・韓国における古代金石文研究の最前線」を催し（二〇二一年三月一八日）、王「浙江省の買地券」を含む二報告がなされた（主催は科研費（B）19H01301〔研究代表者・三上喜孝〕及び（C）16K02993〔研究代表者・稲田〕、参加者二三名）。

二〇二一年度になっても来日の目途が立たない状況が続いたが、HMC第四一回オープンセミナー「東アジアのなかの墓誌」を開催し（二〇二一年九

月三日）、稲田「日本古代の墓誌と東アジア」、田衛衛（首都師範大学歴史学院・本所外国人研究員）「吉備真備書（李訓墓誌）の発見とその意義」、植田喜兵成智（学習院大学東洋文化研究所）「古代朝鮮関連の唐代墓誌とその研究動向」の三報告と、王氏によるコメントがあった（主催はHMCおよび本所、共催は前記科研費（B）19H01301、参加者一九〇名）。

その後、二〇二一年一二月に王氏の来日を前提としない研究計画に練り直すこととし、研究推進支援を依頼した榊佳子氏（本所学術専門職員）を交え、これまでのメールによる連絡に加えてオンライン会議をくりかえした。その結果、研究テーマを買地券に絞り、精細な画像の入手とその分析を中心に計画を進めることとした。新たな計画にもとづき、二〇二二年三月七日には稲田と榊氏とで本学東洋文化研究所における漢代買地券調査を実施し、同月二三日には台東区立書道博物館における所蔵資料調査をおこなって、その成果をオンライン会議で共有した。王氏も、COVID-19のために様々な困難があるなか、中国国内での現地調査や資料所蔵機関への働きかけを精力的におこない、その成果もオンライン会議で共有している。

「海洋知と領域支配」の新展開

一、研究種目

東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学） ※支援：日本財団

二、研究期間

二〇二一年度（単年度）
一五〇万円

三、研究経費

研究代表者 杉本史子

研究協力者 安達裕之（東京大学・名誉教授）、佐藤賢一（電気通信大

学・教授）、齋藤善之（東北学院大学・教授）、松本あづさ（藤女子大学・准教授）

事務局

菊地智博（東京大学史料編纂所学術支援専門職員、日本学術振興会特別研究員DC2）、佐藤麻里（東京大学史料編纂所学術支援専門職員）

五、研究の概要

本年度プロジェクトでは以下の諸点を課題とした。第一に、近世後期～近代成立期の海洋に対する在来民俗知・経験知・学知・実践知を「海洋知」の概念で捉えなおすことで、その具体像や歴史的变化を検討する。第二に、近世日本における地図作成の特質を踏まえ、陸地のみならず海洋がどのように把握されたかを検討する。海洋知の変化が、陸上の地形把握、社会・国家にどのような影響を与えたか、日本図や蝦夷図等を検討して行く。第三に、和船の船舶工学、海事史の蓄積を踏まえ、在来海事技術、また近年長足の進歩をみえてきた経済流通史の成果と、政治史とのリンクを計る。第四に、以上の成果を踏まえ、「海防」を軍事の問題だけではなく政治史の問題として捉え直す。

これらの課題について、オンライン研究会・シンポジウム・関連史料の研究資源化を行った。その成果はニュースレター等として公開している(http://edozu.blogspot.com/p/blog-page_8.html)。また、海洋に関わる史料の研究資源化の一環として、東京大学史料編纂所で目録公開中の「赤門書庫旧蔵地図」の調査時の史料画像の整理を行った。

他学会・研究会とタイアップして以下の研究公開を行った。

- ・洋学史学会シンポジウム（シンポジウム「開陽丸引き揚げ文書について 幕府天文方と開陽丸」二〇二一年一月一四日に協力した。）
- ・東京大学海洋アライアンス 沖ノ鳥島・小島嶼国プログラム（代表・茅根創）が主催し東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターが共催するシンポジウム「海域と島々―物語と歴史―」を、杉本が企画し、プロジェクトとして開催協力を行った。二〇二二年三月一二日ZOOMウェビナーで開催し、一〇六名の参加を得た。第一部「俊寛と「鬼界島」」第二部「海域と世界観」として、村井章介氏（東京大学名誉教授）による講演と金子あい氏（俳優）による『平家物語』の語り等を組み合わせて、日本中近世の人々が、海洋・世界をどう理解してきたのかを明らかにした。

所内研究プロジェクト

荘園絵図プロジェクト活動報告

1 プロジェクトメンバー

稲田奈津子・井上 聡・榎原雅治（日本荘園絵図聚影「积文編第四冊責任者」・遠藤基郎・及川 亘・鴨川達夫・川本慎白・菊地大樹・末柄 豊・高橋慎一朗・高山さやか・谷 昭佳・鶴田 啓・藤原重雄・前川祐一郎・村井祐樹・村岡ゆかり・山口英男（第一冊責任者・山家浩樹・高橋敏子（共同研究員）・坂本亮太（共同研究員）・鈴木沙織（学術専門職員）・土山 祐之（学術専門職員）

2 活動概要

(1) 予算

画像史料解析センター経費によって活動を行った。

(2) 『日本荘園絵図聚影积文編四 中世三』の刊行準備

中世三に収録予定の絵図のうち前年度までに初校の出来していた积文図について校正を進めた。また未入稿となっていた「紀伊国真国荘絵図」「肥前国福満寺古図」「肥前国長島荘高瀬差図」「豊前国宇佐宮放生会次第図」「豊前国宇佐宮飯殿地判指図」の积文および积文貼込図、「備中国服部郷絵図」の积文貼込図を作成した。また古代・中世篇の補遺として収録する図として宝泉寺所蔵「相模国宝泉寺境内図」、滋賀県中主町安治区所蔵「近江国安治条里小字図」、慶應義塾図書館所蔵「山城国上野荘差図案」「山城国上野荘坪付差図」「山城国桂川用水差図」、福智院家所蔵「大和国横大路南北荘郷等図」「明応二年足利義材河内在陣図」、東大寺宝珠院所蔵「撰津国猪名庄・杭瀬荘新開荒野等和中分絵図」を選定し、図版を作成した。

(3) 中世二に収録した高山寺所蔵「神尾山一切経蔵領古図」およびその関係史料について詳細な検討を加え、「高山寺所蔵の二つの「神尾山一切経蔵領古図」と丹波国野口庄」（榎原執筆、『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』九三、七月）を、また中世三に補遺として収録する予定の慶應義塾図書館所蔵の絵図について詳細に検討し、「慶應義塾図書館蔵 橋本経亮旧蔵「山城国上野荘差図（案）」・「山城国上野荘坪付図」について」（土山執筆、掲載誌同前）を発表した。

地震史料プロジェクト

一、プロジェクトメンバー

榎原雅治・杉森玲子・及川 亘・山田太造・荒木裕行・林 晃弘
二、活動概要

(1) 予算

東京大学デジタルアーカイブズ構築事業経費「歴史地震火山活動データベースの構築・分析」、および地震火山噴火予知研究協議会史料・考古部会課題「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」(代表榎原雅治)、防災リテラシー部会課題「近代以前の地震・火山災害に関する多角的研究」(代表杉森玲子)、地震(長期予測)部会課題「地震関連史料に基づく近代以前の地震活動の調査」(代表榎原雅治)

(2) 日記史料に基づく有感地震のデータベース化

本プロジェクトでは一九世紀前半の日記史料を全国的に調査し、一八〇〇年から一八六七年までの有感地震に関する記事を収集している。現在、青森県から鹿児島県に至る七〇件の日記史料の調査を実施しており、既刊地震史料集に収録されていない記事や、修正が必要な記事を多数発見することができた。このうち、巨大地震が多発した安政年間前後の有感地震及び無感の情報については、GIS地理情報システムを用いた「日記史料有感地震データベース」に収録し、二〇一八年より試作版を地震火山史料連携研究機構のサイトで公開している。このデータベースは、有感地震を発生時間ごとに集計・表示する機能や、有感地震の記録場所と時間と大きさの推移を図示する機能を有している(収録有感地震データ数四八一九件)。本年度、この取組みのために調査した史料は下記の通りである。

茨城県立歴史館所蔵「青山延寿日記」「鹿島則幸家文書」/国文学研究資料館架蔵「万相場日記」「依田家日記」「古河家日記」「津山藩町奉行所日記」写真/上野学園大学音楽史研究所所蔵「芝家日記」/国立国会図書館所蔵「江間日記」/熊本県立図書館所蔵「林桜園日記」「下林家日記」/明治大学博物館所蔵延岡藩内藤家関係史料「万覚記」「普請方日記」「豊後

国千歳役所日記」/愛媛県立図書館所蔵「安川家文書」「西原氏旧蔵文書」「猪川家文書」(複製)/倉敷市歴史資料整備室架蔵「米屋三宅家文書」「大江三宅家文書」「繁屋中原家文書」「大橋紀寛家文書」「西原家文書」写真

(3) 既刊地震史料集のテキストデータ化と校訂作業

高精細OCRの技術を用いて既刊地震史料集の全文テキストデータ化を進めた。本年度は三冊分のテキスト化を行い、全三三冊約二六九〇〇頁の全文テキストデータ化を完了することができた。一月には、地震火山史料連携研究機構のサイトより「地震史料集テキストデータベース」としてウェブ公開を開始した。公開にあたっては、語句索引のほか、年月日、都道府県、理料年表掲載歴史地震名からも検索できるようにして、検索の便宜を図った。また既刊地震史料集に収録されている史料本文について、原本による校訂作業を進めた。

(4) 教養学部学術フロンティア講義の開講

教養学部前期課程Sセメスターに学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講し、榎原、杉森が講義を担当した(地震研からは佐竹健治教授と加納靖之准教授。履修登録者九一名(文系四〇名、理系五一名)、単位認定に必要なレポートの提出者七九名であった。授業はすべてオンラインで行い、担当者以外の教員も視聴した。

(5) 鳥取県災害アーカイブ事業への協力

鳥取県で準備を進めている災害アーカイブ事業に協力した。

維新史料研究国際ハブ拠点の形成プロジェクト

二〇一九年度より開始のプロジェクトで、本所の「維新史料綱要データベース」の英訳研究を推進し、かつ海外研究者との国際的な研究ネットワーク(ハブ拠点)の構築をめざしている。

維新史料綱要データベースに搭載している網文データについての英訳が、本事業の中核をなす。英文への翻訳については引き続き、外国人特任研究員トラビス・サイフマン氏が従事しており、またデータの整備等に関しては、

西脇康氏・及川将基氏・加藤絵里子氏の参加を得ている。また、犬飼ほなみ氏には、研究支援上でさまざまに協力をいただいた。

成果としての英訳網文データについては、データ内容の共通理解をいっそう洗練させ、更新をすすめるとともに、関連のグロッサリー構築をもちかっている。現在維新史料網要データベースでは、各網文データの詳細表示画面上にその英訳を並記して表示し（英訳データは登録済みの部分のみ）、また同英語版の Summary database of the Ishin Shiryō として、英語キーワードによる検索と結果表示を実装している。現在のところ、アップロード済みのデータのみが検索可能であるが、本事業達成の際には英訳データの全体が検索可能となることを目標としている。

昨年度以来のパンデミック状況が改善をみていない中で、なお無視できない程度に大きな支障はあるものの、網文データの英訳、およびこれに伴うグロッサリーの作成につき、着実に進めていった。国際研究会の開催については、在外外国人研究者からの協力を得て、今年度もオンラインで開催することができた。またメンバーの保谷徹が代表をつとめる科学研究費による研究とは、引き続き本事業との緊密な連携をとりつつ、相乗的な研究の進捗を期している。今年度はとくに、本所所蔵の特殊蒐書コレクションである史談会本の撮影・データ化において、成果をあげることができた。

今年度開催の国際研究会（二月一日）では、ウェブ会議システム（Zoom）を用いて報告および討論をおこない、例年通りに合衆国からの同時参加も得た。JSPS 人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業、および科研究費基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」との共催である。研究会の報告内容は次の通りである（報告は英語使用）。

- ・ベティーナ・グラムリヒ・オカ（上智大学国際教養学部）
“Translations in a Japan Studies Journal”
- ・トラビス・サイフマン（史料編纂所）

“Translation cannot express everything in the Original: Examples from the Ishin Shiryō Kōyō Database”

また今回も、ルーク・ロバート（カリフォルニア大学サンタバーバラ校歴

史学部）、ロバート・ヘリヤー（ウェイクフォレスト大学歴史学部）ならびに若林晴子（ラトガース大学アジア言語文化学部）の各氏から、コメントを頂戴することができた。

また従来より協力関係を継続してきている横浜開港資料館との連携については、今年度は仏国外務省史料ほかの新規収集（データスキャン）をおこないい、所での公開を期している。これまで本所の図書室で公開している在外史料画像データ（IH-CAT plus）とあわせ、今後さらなる包括的な検証が展望できるものといえよう。

なおメンバーの保谷教授が二〇二一年度末をもって本所を退職し、またメンバーの西脇康氏については同年度までの参加となる。両氏による献身的かつ多大な努力への感謝を附記させていただきたい。

天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設プロジェクト

本プロジェクトは、二〇二〇年度より二〇二四年度までの五か年計画として、古代史料部門第三室が中心となつて担当する。二〇〇七年度以来、大型科研究費により遂行してきた天皇家・公家の文庫・宝蔵に関する研究を継承する研究拠点を創設することを目標とする。具体的には、①関係史料のデジタル画像による蒐集と Web・本所閲覧室での公開、②京都御所・同離宮等関係資料による文理融合型の学際的研究、③関係史料群の調査研究と発信を柱とする。二〇一九年度後半より予算措置を受けて前倒しで開始し、科研究費基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」と連動しており、詳細はそちらにまとめて記載した（131頁参照）。

- ①史料画像の蒐集・公開 前年度に引き続き、東京大学史料編纂所の IH-CAT Plus より、(A)宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」：九、六二三点・五六〇、九二三画像 ①九条家本：二、八六一・八四、九〇一画像、
- ②伏見宮家本：二、〇九八・六七、三八八画像、③桂宮家本〔日記〕：二、三三・八五、〇八四画像、④三条西家本：六五五・三、九三三画像、⑤壬生家本〔函号 F9〕：五三三・六五五、一三〇画像、⑥柳原家本：二、八六二

点、一三八、〇一五画像、⑦白川家本〔日記〕：二二〇点・四一、一五三画像、⑧平田家本〔日記〕：一七九点、四二六八〇画像、⑨続群書類従本〔旧御歌所本〕：七七九点・四二、六三三画像、(B)⑨山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井閑本：四三二点・三二、三二二画像を、安定的にWeb公開すると共に、本年度は新たに、⑩愛知県西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本：五一八点・七〇、七三〇画像をWeb公開した(累計Web公開数：六六四、〇二五画像)。特に⑥と⑩により、分蔵されている柳原家旧蔵本の大部分(三、三八〇点、二〇八、七四五画像)がWeb公開出来たことは画期的なことである。二〇二一年度のHi-CAT Plusによるアクセス数は一五六、一六八件であった(一部、禁裏・公家文庫以外の画像も含む)。新型コロナウイルス感染症の蔓延拡大で、所蔵先の宮内庁書陵部等に閲覧できない研究者に対してこのWeb公開は大きな貢献をした。その他、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「近世公家日記類」七四、七六六画像等、累計一六三、七六九件に対してWeb公開に向けた準備(メタデータの付与の完了)をした。Web公開済の画像も併せると、天皇家・公家文庫収蔵史料総計八二五、三八九画像に関して、Webによる公開及び公開準備が完了した。

さらにデジタル画像の蒐集としては、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」のうち寛政度・安政度御所造管関係資料(簿冊類)全て撮影を完了した(累計：四一、四四〇画像)。また、蒐集した京都御所東山御文庫・同別置本五一、六五二画像及び「皇室の至宝 東山御文庫御物」1〜5 毎日新聞社 一九九九〜二〇〇〇年の為に撮影した4×5カラーフィルムをスキヤニングしたデジタルデータ二、一九三画像に関して、史料編纂所閲覧室での公開準備のためにメタデータの付与を完了した。これにより、閲覧室公開済の二六二、八八三画像を併せると、東山御文庫本・同別置本は累計三一六、七二八画像蒐集できたことになる。なお、同じく閲覧室端末限定で陽明文庫所蔵近衛家伝来本約四八、〇〇〇画像も公開中である。

この他、東京大学総合図書館所蔵本及び駒場図書館所蔵本(一高文庫本)五一五〇画像を蒐集した。

②京都御所・同離宮等関係資料の研究 画像により蒐集した安政度御所造管関係資料を用いて、建築史学研究者・大学院生を中心とした「中井家文書」

研究会により研究を進めた。またその成果は、二〇二二年二月一日日に開催した国際研究会「第二回 御所(宮殿)・邸宅造管関係資料の地脈と新天地」(於京都府立京都学・歴史館)にて報告し(189頁参照)、同時に「報告集」を刊行した。

③関係史料群の調査研究と発信 平安・鎌倉期の古写本が多く含まれる宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵九条家本を中心に、未翻刻史料の翻刻および既往翻刻の入力・校訂を行い、その成果の一部は、田島公編『禁裏・公家文庫研究』8輯(思文閣出版)や『東京大学史料編纂所研究紀要』(32)に公開した。具体的には、九条家本『春日行幸類記』・『石清水八幡宮并賀茂社行幸記』・「被任太政大臣其闕以他人任大臣例」・『定能卿記部類』二「臨時行幸」上・九条道家筆「春除目次第」・『朝親行幸次第草』・『朝親行幸次第』等である。陽明文庫所蔵近衛家伝来本に関しては、名和修・尾上陽介・田島公企画・監修『陽明文庫図録』3(東京大学史料編纂所・公益財団法人陽明文庫)に「陽明文庫資料から新発見(2)」と題して二点の史料に関して新見解を発表した。また、明治大学図書館所蔵三条西家本「除秘鈔」(学界未紹介の後三条天皇撰「院御書」の除目儀部分)に関して、影印・翻刻・解説を公開し(明治大学除目書刊行委員会(田島公・末柄豊他)編『陽明文庫図録』三条西家本 除目書 八木書店、そのうち「解説」は「明治大学図書館所蔵三条西家旧蔵本『除秘鈔』の基礎的研究」と改題・改稿して、『禁裏・公家文庫研究』8輯(前掲)に所収)。

研究成果の発信として、国際研究会として、対面(一部オンライン)で一二月一八日に第二回「御所(宮殿)・邸宅造管関係資料の地脈と新天地」(前述)を京都府立京都学・歴史館で行った。また、国内講演会としては、すべて対面で十一月三日・四日・二〇日・二一日・二七日・二八日に金鶏会館連続公開講演会「三条西家本「除目書・同紙背文書」を読む」(明治大学図書館所蔵三条西家本除目書)影印本の刊行を記念して「明治大学図書館所蔵三条西家本除目書」で開催するなど、合計二一回の公開講座を対面で行った(182頁参照)。なお、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、西尾市岩瀬文庫講座は中止し、また、二〇二二年二月五日に京都府立京都学・歴史館で「第十二回陽明文庫講座」を開催予定であったが、五月一四日に延期と

なったものの、当日配布予定の『陽明文庫図録』3は二月五日に刊行した。

本研究プロジェクトは、太田克也・佐竹朋子・芝崎有里子・林 大樹・高橋宙暉の各氏の協力を得ており、画像史料のメタデータの付与に関しては遠藤基郎氏の指導・協力による。

(藤原重雄・小塩 慶・田島 公)

「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書の保全と研究プロジェクト活動報告

一、プロジェクトメンバー

尾上陽介(図書部長)・小瀬玄士・渋谷綾子・高島晶彦・高山さやか・谷 昭佳・寺尾美保(学術支援専門職員)・西田友広・畑山周平・本郷恵子(代表)・松澤克行・宮崎肇 村井祐樹(幹事)・村岡ゆかり・山口悟史・山田太造

二、活動概要

本プロジェクトは、二〇一五〜一九年度の五年間にわたる「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」を継承し、同プロジェクトで実施した原本史料研究の方法を用いて、鹿児島県を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を行うものである。

本プロジェクトは二〇二〇年一〇月に発足した。発足の経緯は以下の通りである。「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」は、国史『島津家文書』の修理・研究をおもな内容としていたが、同プロジェクト遂行の過程で、鹿児島県の島津興業および鹿児島銀行の二つの企業とご縁がたがり、奨学寄付金を受領する運びとなった。島津興業からは「島津家文書研究のため」、鹿児島銀行からは「鹿児島県の歴史遺産の保存状態の改善／鹿児島県の歴史・文化等の研究事業への貢献」という目的で、それぞれ奨学寄付金を受けている。そこで両社からの寄附金を活用する新たな研究事業として、本プロジェクトを立ち上げた。実施にあたっては、科研の基盤研究(B)『原本史料情報解析』の方法による中世西国武家文書の研究と展開(代表本郷恵子)のグループと連携する体制で進めている。

昨年度に引き続き、本所所蔵の『入来院家文書』(OGU1-18)の修理を実施した。本年度は科研グループの資金で同文書の第十八巻(文書一一点)の修理を行うとともに、本プロジェクトでは第十二巻(文書一三点)・第十七巻(文書二二点)の修理を実施した。もともとの仕立てが脆弱で、各文書の状態も良くないため、帖・卷子から文書を外して修理し、一紙ごとにして保管する方針をとっている。並行して、科研グループで鹿児島県歴史・美術センター黎明館、尚古集成館等の所蔵文書の調査・撮影を行い、南九州関係文書についての研究を進めている。

(本郷恵子)

データ駆動型歴史情報研究基盤の構築プロジェクト

一、プロジェクトメンバー

本郷恵子・箱石 大・井上 聡・山田太造・金子 拓・遠藤珠紀・渋谷綾子・保谷 徹・中村 寛・劉 冠偉・西田志津

二、活動概要

本プロジェクトは、日本史料の採訪・史料集編纂といったこれまでの史料編纂所の取り組みを継承・発展させ、一五〇年にわたって収集してきた日本史研究資源の蓄積を、次の百年を超えて持続することが可能な歴史情報研究基盤の構築を目的とした。具体的には、①データの長期的な蓄積・アクセスを可能とするデータリポジトリ構築、さらに蓄積したデータの最大限の活用をはかり、②データ駆動型検索システムの構築を進め、③国際発信力を抜本的に強化していくこと、Society 5.0時代にふさわしい歴史情報学研究的基盤構築に取り組んだ。本プロジェクトは、東京大学COE事業「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」が採択されたことを受け、二〇二一年四月より開始した。(単年度)

①データの長期的な蓄積・アクセスを可能とするデータリポジトリ構築では、史料編纂所が長年蓄積した研究資源の継承と活用のため、日本史料研究資源化をさらに推進するための方法論および実装に取り組んだ。具体的には、史料ごとの史料目録、史料画像、来歴情報、配置場所、アクセス権、識

別子などをパッケージ化し、さらに図録用撮影画像・顕微鏡撮影画像・くずし字画像など派生して生成されたデータを関連づけて管理可能な史料データレポジトリの構築を進めた。採訪史料画像が画像レポジトリに登録され、目録がデータベースへ登録されるまでの過程を記録するために採訪進捗管理システムを構築しており一〇年の運用実績としているが、史料編纂所所蔵史料のデジタル化やウェブ公開といった新たな課題が生じていた。そこで、データの長期保存・長期利用を定義した際標準規格ではOAS参照モデル(Reference Model for Open Archival Information System)に基づきデジタル画像を管理していくためのシステムとして、新たに史料画像デジタル化進捗管理システムを構築した。日本学術振興会による人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業(史料編纂所は二〇一九年一〇月に唯一の人文学拠点機関として認定)と協働して進めた。

②データ駆動型検索システムの構築では、史料に関するあるデータから、次々と数珠つなぎに関連するデータを提示していく方法、たとえば、ユーザインタフェースに制限されない、より柔軟な検索を実行するための環境整備および実装を進めた。具体的にはWeb API (Application Programming Interface) の整備を行うことで、人だけでなく、機械も利用可能・可読となるデータ検索・提示方法を取り入れ、データ駆動型検索システムの実現を目指した。史料編纂所がかかえる史料データを活用するために、(a) AIによる文字認識のためのくずし字学習データセットの構築、(b) 文字認識 AI による構造化テキストの自動生成、(c) 地名・人名等のシソーラス化・オントロジ化、といったAIや機械学習によるサポート機能を実現するための方法論について検討・実現していくためのデータ整備や実装を行った。研究成果として、倭寇図巻デジタルアーカイブや正保琉球国絵図デジタルアーカイブがある。ウェブを介した絵図等を閲覧するだけでなく、ウェブGIS・テキストデータとの連動やデジタルストーリーテリングといったウェブ技術を駆使することで、デジタル時代の新たな史料提供手法の確立を進めた。これについて、二〇二二年一二月、画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センター共催の公開研究会「新たな画像公開方法とデジタル連携」を開催し、ウェブ公開した。これ以外にも、文字データの精密化をすすめるための文字

入力支援ツール、中世史料を対象としたAI技術を用いた文字認識ツールといった先進的な取り組みにも着手している。

③国際発信力の抜本的強化については、維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトでは幕末維新史料データベースの英訳化や英訳グロッサリー研究に取り組んでおり、かかる研究プロジェクトとも連携し、さらに英文サイトの構築に取り組んで国際発信力を強化していく方法について検討した。世界へ向けた発信力を強化し、日本史のみならず人文学におけるデータインフラストラクチャーのモデルを国際的にアピールしていくことを目的とした。二〇二一年九月に国際会議「The 11th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (第11回日本デジタルヒューマニティーズ年次大会、JADHD 2021)」を開催した。

研究発表会

第二八六回その1 二〇二二年六月一七日 担当 特殊史料部門・画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センター

「近世瀬戸内の帳合米商いと城下町―美作国津山を中心に―」 山本一夫

本報告では、近世瀬戸内の諸都市で行われた帳合米商いをめぐる領主・領民の利害関係を、城下町の振興に注目しながら検討した。帳合米商いと、現物を伴わない帳簿上の米の売買である。その取引制度については詳細に解明されているが、帳合米商いを取り巻く利害関係については、発祥地の大坂を除き十分検討されているとはいえない。

瀬戸内諸都市の帳合米商いは、必ずしも当該藩の蔵米相場ではなく、堂島米会所での信頼性が高い筑前米などの米相場を銘柄とし、相場変動による利益獲得のみを目的とする投機取引であった。ゆえに帳合米商いが諸藩の収入にはつながらず、米価引き上げによる幕藩領主の増収を目的として帳合米商いが公認された中央市場の大坂とは別途の公認理由を想定する必要がある。

文化・文政期の瀬戸内諸都市では、帳合米商いの開催出願にあたり、投機

的需要の引きつけによる、口銭収入の町入用への助成・日用層の雇用創出などの経済効果をメリットとして標榜した。背景には、近世中後期以降の城下町商業の衰微や宿駅の伝馬役の負担が存在した。具体的な額が判明する津山城下の例では町入用への助成額はわずかであったが、形式的にせよ都市共同体の繁栄という論理が用いられたことは興味深い。

瀬戸内諸藩は、帳合米商いをその投機性から博奕的な行爲とみなして、風俗統制の観点から禁止を図った。しかし、参加者の流出による衰微を防ぐため、やむを得ず城下町での開催を認めた。一方、帳合米商いはあくまで商業の一環とされ、百姓に対しては在方商業統制の観点から農業への専念を求め参加を禁止した。

城下町の繁栄が、出願者の町人側と藩側との共通利害であり、地方での帳合米商い公認の理由であった。近世日本の経済的先進性や近代への連続性という観点から言及されることの多い帳合米商いであるが、身分制や都市共同体の論理など近世社会の中に位置づけた把握も必要と考える。

第二八六回その2 二〇二一年六月二四日 担当 近世史料部門

「鎌倉期朝廷の意思決定をめぐる」考察―議定制と院近臣― 海上貴彦

本報告では、鎌倉前期の院政における意思決定の在り方を考察対象とし、特に議定制と院近臣編成との関連を軸に分析した。

「研究史と問題の所在」では、「国政」としての朝廷政務研究と、後鳥羽院政と後嵯峨院政との段階差・連続性をめぐる議論を参照したうえで、貴族社会論と結びついた議定制論の構築を提唱した。

第1章「後鳥羽・後嵯峨院政期の意思決定―御前諮問―」では、後鳥羽院政（『猪隈関白記』）と後嵯峨院政（『岡屋関白記』）を事例として、院の御前に召されて直接諮問を受けることを、在宅諮問と区別して「御前諮問」と呼び、分析した。後鳥羽院政では近衛家実と藤原頼実の2人が御前諮問を受け、院の意思決定に大きな位置を占めていたこと、御前諮問と公卿議定の二重構造があったことなどを指摘した。後嵯峨院政期では固定的な祇候集

団の形成が確認でき、彼らが定期的に御前諮問を受けていたことを確認した。第2章「御前諮問をめぐる諸問題」ではさらに掘り下げ、後鳥羽院政期では御前諮問の対象は限定的で、院御所での議定と人的・場的に隔たりがあるのに対し、後嵯峨院政では院近臣への御前諮問（近臣会議）と院評定との間に人的共通性があることを指摘した。そこから院評定衆＝院近臣となることに注目し、近臣編成・院評定の場となった（内）弘御所に着目しつつ、後嵯峨院政期における院・院近臣と議定制との一体化を見出した。

第3章「後堀河院政期の院近臣と議定」では、議定制と近臣編成とが結びついた端緒として、後鳥羽院政・後嵯峨院政の間に位置する後堀河院政に注目した。この時期は四条天皇の外祖父となった九条道家が朝廷政治の実権を握っていたが、道家が天福元年（一二三三）に提出した奏状で、「当時被聴広御所之人中、本自預顧問之輩」による院御所での訴訟評定が提案されている。当時、記録中に後堀河院が弘御所に出御して近臣たちが祇候している事例を確認でき、これら「本自預顧問之輩」への御前諮問も想定される。ただし、道家の奏状のプランは実際には摂関邸での議定という形で実施され、後嵯峨院政の院評定成立まで持ち越された。（出席者…約五〇名）

第二八七回研究発表会 二〇二一年七月五日 担当 古代史料部門

「史料紹介小池篤氏収集文書『地藏院殿御灌頂記』について」 伴瀬明美

群馬県立公文書館に寄託されている「小池篤氏収集文書」中の「地藏院殿御灌頂記」を紹介した。報告者が室町期の醍醐寺地藏院門跡について論じた際に（室町期の醍醐寺地藏院―善乗院聖通の生涯を通して―）（『東京大学史料編纂所研究紀要』二六、二〇一六年三月）、東寺僧宗承が著した『見聞雜記』より、寛正七年（一四六六）に地藏院門跡門主義快（持円から改名）が次期門主へ法流伝授を行うことなく没し、次期門主への伝法は門弟である法印宗寿に委ねられ、文明二年（一四七〇）九月二十日に宗寿から新門主への伝法灌頂が行われたと述べたが、本灌頂記はこの時の伝法灌頂の灌頂記である。典型的な灌頂記の記載様式とは異なるが、戦乱の只中、醍醐寺も地藏

院も焼失するという状況下で、醍醐から大津に下山していた門主通快を宝輪院に迎え、大津・京間の通行封鎖の風聞を懸念しながら、宝輪院を道場として慌ただしく伝法灌頂が行われた様子をうかがうことができる。

またこの灌頂記の裏面には、八つの一つ書きからなる事書が記されている。足利義持と地藏院門主持円（義快）との猶子関係を含む義持以来の将軍家と地藏院門跡との関係性、「当代」におけるその変化、門跡の経済状況などが記され、義教没後の地藏院門跡が武家護持僧としての位置付けを低下させ、門跡として危機的な状況にあったことを推測させる。

本史料は灌頂記・事書ともに、これまで明らかにされていなかった一五世紀以降の地藏院門跡および地藏院流の法流継承に関する貴重な史料である。

近年、将軍家子弟や室町殿猶子の門跡寺院入室の意義を再検討する研究が相次いで発表されたが、本史料は地藏院持円が義持の猶子であったという新事実が見出されるなど、これらの研究のさらなる進展にも寄与することが期待される。

第二八八回 二〇二二年三月三〇日 担当 近世史料部門

「幕末外国関係文書と在外日本関係史料―在籍三五年をふりかえって―」

保谷 徹

報告者は、一九八七年の入所後、幕末外国関係文書の編纂と幕末維新史研究（軍事・外交史）に取り組み、一九九五～九六年の在外研究（仏・英・米）を皮切りに、六〇数回にわたって在外日本関係史料の調査をおこなってきた。本報告では、これまで取り組んできた幕末外国関係文書の編纂と海外史料調査事業について、個人的な研究活動としての側面も含めて報告した。

一 外務省引継書類と幕末外国関係文書・現行の編纂方針に至るまで

一九〇六年（明治三九）、外務省から幕末外交文書（長持五棟）と編纂事業が移管され、一九一〇年（明治四三）『大日本古文書』幕末外国関係文書之一が刊行された。一九八三年（昭和五八）、編纂方針を改めて、収録対象を外務省引継書類中の外交上の往復文書に限定したところ（三九～四一巻

※）、編纂方針を元に戻し、さらに収録範囲を拡大すべきだという意見をいただいた（石井孝『幕末外国関係文書』の編纂方針についての提案）、歴史学研究月報三一五、一九八六年三月一五日）。これも踏まえて、一九八七年（昭和六二）に編纂方針を旧に復し、「収載文書は、本所所蔵外務省引継書類所収文書を主とし、併せて、国内各地文書館・図書館所蔵の神奈川・長崎・箱館各奉行所並びに蝦夷地警衛関係の主要文書を収め、必要に応じて外国公文書館所蔵文書の訳文をも収載する」（四二巻刊行物紹介『所報』二四）ものとした。収録対象の大幅な拡大と欧文史料の訳文による収録の開始である（八八年度刊行の四二巻から）。

※その後、三九～四一巻で省略した「対話書」については二〇一〇年刊行の附録八に収録している。

二 編纂材料と編纂プロセス、編纂上の工夫

幕末外国関係文書は、外交上の往復文書や交渉記録を中心に、関連する事件記録などを編年して収録している。外務省引継書類（幕府の外国奉行所文書）に含まれる往復書翰等に加え、書翰案や各種上申・評議書など、外交政策の立案過程がわかる史料も収録し、箱館・長崎・神奈川（横浜）など三港の奉行や蝦夷地関係史料など、国内で蒐集した史料群、さらに海外史料、こちらは外交上の往復文書に加え、各国公使や海軍司令と本国間の往復文書（外務省史料・海軍省史料）など必要なものを翻訳して収録している。この間の試行錯誤の結果、近刊では半月分を一冊五〇〇頁程度にまとめている。調査研究、原稿作成と校正作業など、編纂実務は年間を通じて多忙を極めるが、類纂の大日本維新史料とともに幕末維新史の基本的な活字史料集であるので、がんばって継続してほしい。

三 国内での軍制史研究から英仏等の海外史料調査へ

幕末外国の編纂は海外史料調査につながっていく。一九九五年から翌年にかけて、一年間の在外研究では、パリを拠点に仏・英・米の文書館を調査した。一八六二年から六四年にかけて、いわゆる奉勅攘夷体制のもと、国是となった幕府の鎖港要求を撤回させるため、英国が主導した下関戦争とその前後の外交過程を分析することになった。通商条約体制の擁護・発展のために武力行使も辞さない自由貿易帝国主義として位置づけた（参考：保谷『幕末

日本と対外戦争の危機』二〇一〇年)。

その後、一貫して在外史料の補充調査とこの海外史料マイクロフィルムやデジタルアーカイヴ化に取り組みることになった。現在にいたる基盤(A)科研(四件)と基盤(S)科研(二件)で、世界二一か国・七〇機関の海外史料二四二万コマ(国内編纂史料含む)のデジタルアーカイヴを構築した。

一方で、個人研究としておこなってきた幕末の軍制史研究(一九九三年歴史学研究会大会報告)から展開して、戦争と軍事、武器、兵站の具体的なモノを学ぶために、世界の軍事施設・軍事博物館めぐりも勉強になった。一九世紀半ば、ライフル銃砲の採用を梃子にした火器革命(火繩銃・ゲベルルからミニエ・エンフィールドへ)は、日本では近世的な軍事のあり方に革命的な変化(軍事革命)を生んでいる(参考:『日本軍事史』(共編著)二〇〇六年/『戊辰戦争』二〇〇七年など)。

四 ロシアを含む東アジア史料調査プロジェクトについて

欧米の史料調査に加え、後半の活動の大きな柱となったのは、ロシアを含む東アジア史料調査プロジェクトの活動であった。一九九九年には石上英一所長のもと、「東アジアを中心とする近代日本関係史料収集事業検討会(東アジアWG)」が設けられ、幹事をつとめた。一八六一年ポサードニク号事件のロシア側史料の調査は編纂のためにも必要だった。また、在外日本関係史料調査事業は一八八〇年代末に開始され、一九五四年に日本学士院から史料編纂所へ正式に委嘱されている。日本学士院の国際学士院連合(UAI)関係事業に位置づけられ、報告者もこの特別委員会に参加し、その支援を受けてきた。

五 ロシア・中国等における調査事業(引継ぎ事項を兼ねて)

東アジア史料調査事業のうち、とくに関係したロシア・中国などにおける事業の概要と現状について整理した(詳細は略)。

▼中国第一歴史档案馆(北京市)・北京故宮内に所在する明・清代の皇帝檔案一〇〇〇万件を所蔵する文書館。二〇〇六年四月、研究協力の覚書を締結。デジタルカメラ機材一式を同館へ提供し、撮影データ(宮中朱批奏摺六七〇件三二八七コマ/軍機処録副奏摺二三五九件四九三八コマ)と目録を受理。撮影データはHi-CAT Plusで閲覧室公開。『中国第一歴史档案馆所蔵中

日関係史料整理目録―清代朱批奏摺・録副奏摺の部』、二〇一〇年一月刊行。

▼ロシア国立海軍文書館(サンクトペテルブルク市)・帝政ロシア・ソ連時代の海軍省史料二〇〇万件を取める連邦文書館。二〇〇三年に覚書を結び、二〇一一年に『ロシア国立海軍文書館所蔵日本関係史料解説目録』、二〇一七年に『ロシア国立海軍文書館所蔵日本関係史料解説目録』二を刊行した。

▼ロシア国立歴史文書館(サンクトペテルブルク市)・帝政ロシアの中央政府文書七〇〇万件をおさめる連邦文書館。二〇〇四年に覚書を締結し、二〇一〇年に『ロシア国立歴史文書館所蔵日本関係史料解説目録』、二〇二〇年に『ロシア国立歴史文書館所蔵日本・中国・韓国・朝鮮関係史料解説目録』を刊行した。海軍文書館と合わせて一万五〇〇〇コマ以上の史料画像をデジタルアーカイヴ化している。

▼ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所、もと東洋学研究所サンクトペテルブルク支部(サンクトペテルブルク市)・二〇〇八年、共同研究プロジェクトに関する覚書を締結し、双方が所持する史料についてデジタル画像を交換し、共同研究を実施している。ロシア側は、「大福帳」(A四七)・「簾貸帳」(A四八)・一九世紀初頭・サハリンアイヌと日本商人の交易帳簿、日本側は、外二四九(外務省引継書類)「魯人再掠蝦夷一件」を対象とし、翻刻・翻訳研究を進めている。

▼ロシア帝国外交史料館(モスクワ市)・二〇〇三年に調査実施、約五五〇枚を複製で収集。

そのほか、二〇〇三年、サンクトペテルブルク国立大学東洋学部への出版物寄贈に関する覚書を締結した。また、二〇〇四年、ロシア科学アカデミー文書館(サンクトペテルブルク市)と協力覚書を締結し、目録・史料画像を入手している。

以上、幕末外国関係文書の編纂と在外日本関係史料調査事業は、多くの方のご支援・ご協力をいただいで進めてきた。あらためて感謝を申し上げます。

国際研究集会

「日本中世史データベースの国際比較」

二〇二一年五月二八日

本所主催国際研究集会「日本中世史データベースの国際比較」を、ウェブ会議システムZoomを用いたオンラインにより開催した。これは、ドイツのボン大学で取り組まれている「地頭データベース」を紹介し、日本側の研究者との意見交換を行なう場として開催したものである。

現在、ボン大学では共同研究センター「文化比較で見た前近代史におけるその諸形態」が立ち上げられ、その一環として、デトレフ・タランチェフスキ氏を中心とした研究プロジェクト「中世日本における王権の委譲と分割による支配エリート再生」が進められている。本所では、二〇一八年三月に国際研究集会「ドイツにおける日本中世史研究の現在」を開催し、同プロジェクトメンバークリスチャン・ヴェルナー氏とシモン・チエルカフスキ氏よりご報告をいただいた。今回は、シモン・チエルカフスキ氏（ボン大学研究員、史料編纂所外国人研究員）より、「ボン大学の地頭データベース―由来・現在状態・前途―」と題して報告をいただき、同プロジェクトで構築を進めている「地頭データベース」の概要について、実際のデータベースデモ画面を操作しながらご紹介いただいた。

これを受け、日本側研究者から西田友広氏（東京大学史料編纂所・准教授）および田中大喜氏（国立歴史民俗博物館・准教授）の二名よりコメントを頂戴した。「地頭データベース」では、地頭の人名をもとに、典拠となる文書や記録などの史料類も表示されるようになっていて、多様な史料上の人名表記に対応させる仕組みなど、今後の課題についての指摘があった。

さらにプロソポグラフィの観点から「地頭」を選択した理由について、あらためてデトレフ・タランチェフスキ氏およびクリスチャン・ヴェルナー氏より説明がなされた。これに対し田中氏より、地頭に限定せずに、地頭の地域支配を支えた各地の沙汰人層や、地頭地縁・血縁にも目を向ける余地がある旨の指摘が出された。構築中の「地頭データベース」については、今

後、データ量だけでなく機能面でも充実が図られるとのことで、将来的な本格運用に大きな期待が寄せられているところである。

今回の集会は新型コロナウイルスの感染拡大に伴いオンライン開催となったが、当日は国内各地だけでなく、海外からの七名を含む、全六六名の参加を得た。国内各地と海外とをリアルタイムで結びうるオンライン開催の利点を活かし、その有用性を実感させるものとなった。

なお、本会は共催として、科学研究費補助金・基盤研究(A)「断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究」(研究代表者西田友広氏)、科学研究費補助金・基盤研究(B)「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」(研究代表者田中大喜氏)、後援として鹿島学術振興財団研究助成「正保琉球国絵図の研究資源化とデジタルアーカイブの構築」(研究代表者黒嶋敏氏)の協力のもとに開催されたものであることを付記しておく。

(黒嶋 敏)

「古代典籍写本調査から史料学・地域歴史文化遺産の構想へ」

二〇二一年七月三日

石上英一氏（東京大学名誉教授・元所長）を講演者に迎え、オンライン(ZOOM)による講演会を開催した(大会議室より配信)。古代史研究者として、また史料編纂者としての自身の歩みが語られ、編纂者・調査者としての心がまえについても触れられた。特に『大日本史料』編纂については、医心方撰進条など具体例をあげつつ論じ、編纂の難しさがある一方で、予想外の反響・学問的発展があることを紹介されたのは、編纂に携わるものとして励みになるものであった。当日は八八名の参加を得た。主催プロジェクトにおいて講演録が作成されており、後日オンライン公開される予定である。

国立歴史民俗博物館「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」プロジェクト・科研費基盤研究(B)「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」(代表…小倉慈司) 主催、本所共催

(稲田奈津子)

国際研究集会「東アジア諸王室における礼的〈逸脱〉の諸相」

二〇二一年七月二六日

本集会は、主催の科研費研究グループの活動の延長線上に、HMCの公募研究(B)国際研究集会開催助成を受け、オンライン(ZOOM)開催したものである。冒頭で司会の伴瀬明美氏(大阪大学大学院文学研究科)から、「北魏と高麗は、中国礼制の影響を大きく受けつつも、そこからの逸脱や独自性が見られることが知られている。その具体的様態に関する研究報告をもとに、最新の成果や課題を共有し議論することで、東アジア諸王室における礼的〈逸脱〉の諸相と歴史的背景に関する研究の深化をはかりたい」との趣旨説明があった。

第一報告の鄭雅如氏(台湾・中央研究院歴史語言研究所・副研究員)「胡風と漢礼―北魏鮮卑諸王の婚姻諸相の分析」は、北魏の諸王の婚姻をめぐる、漢化政策と鮮卑習俗とのせめぎあいの様相を描き出すものであった。孝文帝の漢化政策により「多妻制・長子継承」から「一妻多妾制・嫡子継承」へと移行するものの、実際には賜婚や収継婚(レビレート婚)といった遊牧民族文化が残り続け、妻の実家が夫妻関係に大きな影響力をもち、妻の嫉妬も夫をつなぎとめる戦略として許容されるなど、漢礼からの逸脱が見られることを指摘した。通訳は郭珮君氏(中央研究院中国文哲研究所)がとめた。

第二報告の李貞蘭氏(韓国・忠南大学校国史学科・助教)「高麗時代の龍孫意識と王室儀礼」は、高麗王朝の王族支配を支えた龍孫意識(高麗王家を龍の子孫として神聖化する思想)が、武臣政権やモンゴル支配という難局に直面しながらも継続したこと、またその思想を支えた諸制度における王族の特権について論じた。王族の特権としては、居住空間や服装制度など目に見える形での特権、姓を省略できる「不称姓」などがあり、国王の葬儀の秘儀性も王室の神聖性を確保するためと指摘した。通訳は植田喜兵成智氏(学習院大学東洋文化研究所)がとめた。

コメントには稲田奈津子と豊島悠果氏(神田外語大学外国語学部)が立

ち、両報告の主旨をまとめるとともに、いくつかの論点を提示し、それらへの報告者からの回答を中心に質疑応答が進められた。会場からも質問・意見が出されたが、多彩な問題提起に富む両報告に対し、十分な議論の時間を確保できなかったのが惜しまれ、今後のさらなる研究交流の必要性を再確認し、一三時から一七時半までの予定のところを一〇分ほど超過して終了した。なお当日の報告内容およびコメント・討論概要については、主催科研の成果報告書(二〇二二年三月発行)に掲載している。

当日は八二名の参加を得た。本集会は、当初は二〇二〇年度に本所を会場に開催を予定していたが、COVID-19の影響により延期となり、オンラインに切り替えての実施となった。対面での討議が叶わなかったのは残念ではあるが、オンライン開催としたことで、関西などの日本各地、また海外からの参加も多く得ることができた点は、特筆しておきたい。

JSES 科研費 (18H00700)「東アジア諸王室における「后位」儀礼比較史の協業的研究」(代表：伴瀬明美)・東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)主催、大阪大学大学院文学研究科・本所・JSES 科研費(16K02993)「東アジア儀礼文化の比較史的研究―「物品目録」からの復原的考察―」(代表：稲田奈津子) 共催

(稲田奈津子)

東京大学ヒューマニティーズセンター第41回オープンセミナー「東アジアのなかの墓誌」
二〇二一年九月三日

本セミナーは、HMC 公募研究(A)「金石文資料からみた東アジアの墓葬文化―墓誌・買地券を中心に―」にともない、オンライン(ZOOM)開催されたものである。本研究計画は当初、二〇二〇年一〇月〜二〇二一年九月の一年間、中国浙江大学歴史系教授の王海燕氏を東京大学に招聘して実施する予定であったが、COVID-19の影響で計画は延期中である。そこでセミナーでは、関連する科研グループ、および本所外国人研究員の協力も得つつ、東アジアの墓誌に関する研究状況を共有するとともに、その魅力を一般の方々を紹介する場として計画した。

第一報告の稲田奈津子「日本古代の墓誌と東アジア」は、現存する日本古代墓誌について、多くが外国情報に近い人物によって作成されており、日本社会に浸透するには至らず百年ほどで消滅することなど、その概要を紹介した。また日本の墓誌が、中国の典型的な墓誌とは異なる素材・形態をもつ点について、百済の舍利莊嚴からの影響が考えられるとした。

第二報告の田衛衛氏（首都師範大学歴史学院・本所外国人研究員）「吉備真備書（李訓墓誌）の発見とその意義は、二〇一九年末に公表され話題となった『日本国朝臣備書』、つまり日本人留学生の吉備真備が書したと記す唐代墓誌について、その発見の経緯や研究状況を紹介するとともに、遣唐使の中国名の時代的变化や、真備と中国の文人たちとの交流についても論じた。

第三報告の植田喜兵成智氏（学習院大学東洋文化研究所）「古代朝鮮関連の唐代墓誌とその研究動向」は、中国出土の唐代墓誌に含まれる、百済・高句麗遺民や新羅人・渤海人の墓誌、あるいは朝鮮半島への往来を記す唐人墓誌について、その概要や研究状況を紹介した。往来唐人墓誌からは『三国史記』の記録を補強する記述が見いだされることを指摘するなど、墓誌が古代朝鮮の史料の不足を補う可能性を持つと論じた。

コメントには王海燕氏が立ち、稲田報告に対し、墓誌と墓碑との関係性、および墓誌の作成目的を質した。田報告に対しては、李訓墓誌の真偽をめぐる中国での議論を紹介し、疑点が解消されない限り、歴史資料として利用することには慎重であるべきとの見解が示された。会場からは、植田報告で紹介された祢氏一族墓誌に関する質問など、いくつかの質問が出され、各報告者が回答したものの、時間の制約から十分な議論ができなかった点は残念であった。一七時半から一九時半までの予定のところを、一五分ほど超過して終了した。

当日は、日本各地および海外から一九〇名の参加を得た。研究者のみならず学生や一般の参加者も多く、事後アンケートからは、日本とともに中国・朝鮮の歴史への強い関心が窺われた。またオンライン開催については、行動が制限される中で貴重な学びの場になった、在外研究者の話を聞ける良い機会だったとの感想が寄せられた。

東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）・本所主催、JSPS 科研費

〔19H01301〕「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」(代表：三上喜孝) 共催
(稲田奈津子)

「第十一回日本デジタル・ヒューマニティーズ学会年次大会（JADH2021）」
二〇二一年九月六日～九日

二〇二一年九月六日～九日、オンライン上にて、国際会議「第一回日本デジタル・ヒューマニティーズ学会年次大会（The 11th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2021)」を開催した。本会議は日本デジタル・ヒューマニティーズ学会（Japanese Association for Digital Humanities）により企画される年次大会であり、JADH2021は史料編纂所が主催した。テーマは「Digital Humanities and COVID-19」であり、昨今の新型コロナウイルスパンデミックの中での人文情報学のあり方・影響を問うことを目的とした。

本会議（七日～八日）では、Visuality' Literature and poetry' Architecture' Text analysis' Historical texts' DH and the pandemic' Archiving and analysis of cultural heritages' Digitization under the pandemic などに関わる報告がなされた。その内訳は、Long paper が一三本、Short paper が一七本、Poster が一三本、合計四三本だった。

芳賀京子氏（東京大学大学院人文社会科学系研究科・教授）、および、ポラ・カーティス氏（Terasaki Center for Japanese Studies, University of California・Postdoctoral Fellow and Lecturer）を招待し、芳賀氏からは「Keener than Connoisseurs' Eyes: Analysis and Experience of Ancient Art through Virtual Reality (VR)」ホーラ氏からは「(Dis) Connections in Digital Japanese Studies」と題した報告を頂いた。

JADHとして初めてポスター賞（Historiographical Institute Poster Prize）を設けた。受賞は次の二件である。「Open source datasets of the Hechidaishu for the research of classical Japanese poetic vocabulary」(Bor Hodošček and Hlilofumi Yamamoto) / 「An Attempt at Creating Integrat-

ed Retrieval for Chinese Excavated Materials: An Implementation of a Search Function across Interpretations of Ancient Characters] (Shunpei Katakura)

本会議に先立ち、五日に二つのワークショップを設けた。WS一「歴史学におけるデータ共有、統合化、多角的協働」は本所主催で行い、「東京大学における日本史料の長期利用とデータ共有・連結化」(渋谷綾子氏他)、「全国遺跡報告総覧・日本考古学の最大規模のデータベース」(高田祐一氏他)、「歴史文化資料の保存・継承に向けたネットワーク構築とデータ連携の展望」(天野真志氏他)、「アジアにおける学術データのメタデータ収集の試み」(原正一郎氏他)の報告の後、研究データへの永続的なアクセス方法や長期保存・活用といった内容でディスカッションが行われた。WS二「海外DH教育動向調査」は日本デジタル・ヒューマニティーズ学会「人文学のための情報リテラシー」研究会 (JADH SIG: Digital Literacy for the Humanities, SIGLITH) 主催で行われ、「提供者視点の取り込みのススメ」(福山樹里氏)、「実践しながら考えるデジタル人文学・北米DHカリキュラム考察」(横山説子氏他)、「フランスにおける人文情報学教育の理念と実践」(長野壮一氏)の報告がなされ、永崎研宣氏の司会のもと、国内の人文学教育・研究における情報リテラシーのあり方を議論した。

本会議の参加者数は、日本を含む一四カ国から、一一八名だった。また、WS一「歴史学におけるデータ共有、統合化、多角的協働」は八八名、WS二「海外DH教育動向調査」は六六名だった。本所主催によるJADHは二〇一六年に行っており、今回で二回目だった。昨今の人文情報学／デジタル・ヒューマニティーズの広まりは浸透しつつあることから、今後もこの動向をサポートしていく活動を行っていききたい。

(山田太造)

「古記録の筆録と書写・部類・流布―小右記―書写本を中心に―(附)史料集の翻刻を考える」

二〇二一年一〇月二日

加藤友康氏(東京大学名誉教授・元所長)を講演者に迎え、オンライン

(Zoom)による講演会を開催した(大会議室より配信)。尊経閣文庫所蔵『小右記』の調査や、『尊経閣善本影印集成 小右記』刊行の経験を中心に、史料群としての『小右記』がいかに写しつがれ流布したのかについて、写本研究の成果とともに、逸文の集成・後続古記録での引用・各家の文書目録・典籍への引用など、様々な観点から論じられた。また『大日本史料』第二編の編纂を担当された経験もふまえ、各史料集の利用に際しては翻刻方針の十分な理解が重要であることが指摘された。当日は一〇〇名の参加を得た。主催プロジェクトにおいて講演録が作成されており、後日オンライン公開される予定である。

国立歴史民俗博物館「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」プロジェクト・科研費基盤研究(B)「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」(代表…小倉慈司) 主催、本所共催

(稲田奈津子)

「17-18世紀のインド洋―日本をめぐる海域史研究の広がりのために―」

二〇二一年一月二十六日

本国際会議は、ライデン大学からAlicia Schrikker氏とLennart Bes氏を講師に迎え、オランダ語史料を用いた前近代インド洋史研究の最新成果について知見を深めるとともに、東アジア海域史研究との接続を試みた。本会議は、当初二〇二〇年六月に対面開催を予定していたが、コロナ感染の世界的拡大のため再三延期され、Zoomによるオンライン開催となった。また日本語・英語の同時通訳で行われ、参加者は六八名であった。

まずSchrikker氏による報告「オランダ東インド会社の周縁からみた18世紀の人々の生活―インド洋海域における会社の法的活動の実態から―」が行われ、土地所有をめぐるオランダ東インド会社と地域住民との関係について、ベンガルやセイロン(現スリランカ)の事例が報告された。特に、セイロンにおいてオランダ人が徴税目的で実施した不動産登記と、地域住民との法的交渉が紹介され、オランダ植民地行政の性格が論じられた。それに対し史料編纂所岡美穂子氏が、比較の観点から、ポルトガルのアジア進出につい

てコメントを行った。Schliker氏の報告ではあまり触れられなかった、ヨーロッパ植民地権力と地域社会を結ぶ仲介者の重要性について、岡氏は、ゴア・マラッカ・マカオの事例から、ポルトガル人男性と現地女性の間に生まれた混血者が果たした多様な役割を指摘し、そうした仲立ちとしての役割が19世紀長崎のポルトガル領事にも受け継がれていたことを示した。

続いてBess氏が、「使節団、礼法、当惑―近世南インドにおける宮廷儀礼と外交的な無礼についてのオランダ人の報告―」と題し、南インドの王権とオランダ東インド会社との外交関係について報告を行った。宮廷儀礼の実践をめぐって両者の間に生じた様々な葛藤を紹介しながら、Bess氏は、これらの問題がそれぞれの異文化理解の不足によって生じたものではなく、基本的な理解に基づく両者の駆け引きの結果であったと論じた。それを受けて史料編纂所 Travis Seiman氏がコメントを寄せ、同時期の琉球における外交儀礼との比較を行った。興味深い論点として、Bess氏の報告では、オランダ人による南インドの既存の宮廷儀礼への適応が議論されたのに対し、Seiman氏は、琉球の外交儀礼が徳川政権との交渉を通して17世紀に形成され、18世紀初めに定着した事実を指摘した。

最後に一時間にわたる総合討論が行われた。登壇者による活発な議論に加え、視聴者からの質問によって多くの論点が示され、充実した意見交換がなされた。コロナ禍による様々な障害は、登壇者の粘り強い連携だけでなく、数多くの支援によって克服された。ここに記して感謝の意を表します。

東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究（海外史料分野）「モンスーン文書・イェズ会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」主催。東京大学史料編纂所・日本学士院・日蘭交渉史研究会と共催。東京大学史料編纂所・東京大学HMC・維新史料研究国際ハブ拠点と共催。

（大東敬典）

「維新史料研究と国際発信」

二〇二一年二月一日（土）、本所と本所維新史料研究国際ハブ拠点形

成プロジェクト（以下維新ハブプロジェクト）との主催、JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業とJSPS科学研究費補助金基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」との共催により、国際研究会「維新史料研究と国際発信」を開催した。二〇一九年度から開始された維新ハブプロジェクトでは、本所維新史料網要データベースの英訳化と、そのための歴史用語・史料用語の英訳クローズドサーリー研究とを実施している。この研究会は、過去二年間に同様のタイトルで開催した国際研究会に引き続き、同プロジェクトの成果を発信するとともに、海外研究者の視点から意見を得るために開催したものである。なお、本研究会は、予断を許さない感染症状況を考慮し、ウェブ会議アプリZOOMを用いたオンライン開催とした。

この研究会では、上智大学のベティナ・グラムリヒ＝オカ教授と史料編纂所のトラビス・サイフマン特任研究員との二名が報告し、カリフォルニア大学サンタバーバラ校のルーク・ロバーツ教授、ウエイク・フォレスト大学のロバート・ヘリヤー准教授、ラトガース大学の若林晴子助教授の三名がコメントに立った。司会の本所の小野将准教授が担当した。小野氏による開会の挨拶と本郷恵子所長の挨拶が行われた後、個別報告が行われた。個別報告後、全体についてロバーツ氏・ヘリヤー氏・若林氏からコメントが寄せられ、最後に質疑応答が行われた。なお、報告二本は英語で、コメント・議論は日本語で行われた。

まずグラムリヒ＝オカ報告「Translations in a Japan Studies Journal」では、雑誌「Monumenta Nipponica」編集長としての経験から、日本文学や史料用語の英訳を通じて再認識した精確な翻訳の重要さとそのための工夫について、具体的な事例を示しながら紹介された。「Monumenta Nipponica」は一九三八年に上智大学で創刊され、日本文学や歴史資料の翻訳、論文、書評を通じて日本研究を欧米へ発信・紹介してきた雑誌で、英語圏の日本研究者からその翻訳の精確さを極めて高く評価されている。同誌においては、日本語や日本の学術用語を知らない読者を想定しながら、精密な翻訳のために膨大な編集・工程の労力をかけているとともに、重要な語句に関しては英文中にも日本語の原語表記を示して、読者自身の関心に基づいてさらに調査・研

究を行いやすい環境を提供している。本報告では、戯作の文体をいかに英語で表現しながら翻訳したかという例や、“Christian Sorcerers on Trial”での日本語史料の翻訳例、「旧事諮問録」の翻訳例などが示されながら、日本研究者が使用する専門用語を前提としないわかりやすい翻訳を提供することによって、日本研究の関口を広げることに注力していることが紹介された。

続くサイフマン報告“Translation Cannot Express Everything in the Original: Examples from the Ishin Shiryō Kyō Database”では、報告者自身が『維新史料綱要』の網文英訳を行うなかで抱えている、曖昧な日本語の意味あいを確認することの大変さや英訳によって微妙にニュアンスが異なってしまう言葉の問題などと、その当面の対応策として行っている工夫とが紹介された。日本語としても複数の意味を持つ「弁明」や、英語に訳すにはやや抽象的な「貼紙」といった単語の翻訳や、「説く」のように英語に訳す際には「説く」内容が問題となるものの文中に明示されていない場合、といった具体的な例が紹介され、翻訳に際して曖昧さをできうる限り排除しつつ、日本語原文を解しない利用者が英訳だけを見て原文と異なる理解をしないような翻訳をしなければならないという苦労や工夫が共有された。

コメントに立ったロバーツ氏からは、実際に英語圏で日本史研究を行ってきた研究者としての経験から、自身が翻訳する際に行ってきた工夫について紹介があった。実際の英訳作業においては、まず原文から直訳を行い、次に直訳されたわかりにくい文章をより分かりやすい英語に整えていくという二段階を踏むことになり、その際誰が何のために読み、使うのか、ということ想定したうえで翻訳を行うことで、実際の翻訳作業において困難に直面した際に、目的や強調点を軸に翻訳の方針を定めやすくなる、という実践的なアドバイスを頂戴した。

続いてヘリヤー氏からは、自身の大学院生時代の経験や教員として学生を指導する立場といった点から、そもそもアメリカの大学において日本語そのものの翻訳を実践する授業やトレーニングは提供されていないという課題を抱えているという指摘や、そのような環境下において、維新ハブプロジェクトが行っている翻訳作業は、ワークショップのような形で日本史を学ぶ現役の大学生に共有され、共同して行いたいものであること、そしてその成果は何

らかの形で発表して学会に共有すべきものであることといった提案を頂いた。

若林氏からは、実際にアメリカの大学で日本史を研究している立場や、過去に史料編纂所の研究員として「応答型翻訳支援システム」（通称グロッサリーデータベース）を構築した経験、そして現在ラトガース大学で“Ringers Meets Japan”というプロジェクトを主導する立場といった点から、翻訳の重要性が具体的に示された。翻訳という作業は欧米の日本史研究者にとって必須の作業であるが、歴史用語については日本の研究者間ですら意見に相違がある上に、その翻訳にあたっては訳者によって解釈にも幅が出てしまう以上、複数の研究者が議論しながら協同して翻訳を行うことで、“Monumenta Nipponica”が実現しているような精密な翻訳が可能になるという指摘や、そうした多くの翻訳例が蓄積されていくことで、研究の国際化が促進されると期待されること、特に維新ハブプロジェクトが対象とする幕末維新时期は、欧米の歴史の一部でもあるので、「維新史料綱要データベース」の英訳化によって、日本史を専門とせず日本語史料を解しない研究者へも信頼度の高い日本史データベースを提供することは効果が非常に大きいということ、また細かい点では欧米の固有名詞の原語表記とカタカナ表記との対応関係が維新ハブプロジェクトの英訳事業によってわかりやすくなり、日本語でも英語でも関連史料の検索が容易になることといった英訳の意義が提示された。

質疑応答では、報告やコメントで示された訳語選択の困難さや曖昧さの排除といった点に関して、検索システム面で類義語検索が行えるような整備をゆくゆくはしていく必要があるのではないかと、そのために維新ハブプロジェクトで収集しているグロッサリーをソーラスのような形でコンピュータやデータベースに整備していくことが望ましいのではないかと指摘があった。また、今回の研究会では主に英語圏の研究者への発信、英語圏の研究者の利用といった観点から報告・コメントを構成しているが、日本の研究者が国際的に研究成果を発信していく際にも維新ハブプロジェクトが蓄積したグロッサリーを活用できるはずで、既に存在する「応答型翻訳支援システム」と共に、日本のユーザーという観点からも発展させていくべきではないかという問題提起も得た。

維新ハブプロジェクトが英訳化を実施している維新史料綱要データベース

は、もともと日本国内においても幕末維新期の詳細な政治史年表として日本史研究者に限られない幅広い人々に活用されてきたものである。今回の国際研究集会では、英語圏においても本データベース自体の需要が既に十分存在することに加え、英訳化によって幕末維新时期研究のみならず、日本史研究の国際化という点でも議論を活発化させることにつながることを改めて確認することができた。さらに、今後翻訳作業を進めていくうえで具体的な実践に関わる有益な情報も数多く得ることができた。これらの成果を英訳作業やグロッサリー収集へとつなげ、維新ハブプロジェクトをより一層発展させていきたいと考えている。

なお、国際的な新型コロナウイルス感染症の再流行という状況から、今回の研究集会はウェブ会議システムZOOMを用いたオンライン開催となった。しかしながら、当日は三六名の出席者を得ることができ、日本・アメリカ合衆国東海岸・同西海岸という時差を抱えつつも、充実した研究集会となった。

(立石 了)

「第二回 御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」

二〇二一年二月一日

二〇二一年二月一日(土)、東京大学史料編纂所「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト(担当・東京大学史料編纂所古代史料部)、基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」(研究代表者・田島 公)、京都府立京都学・歴史館(館長・金田章裕)、挑戦的研究(萌芽)「建築メンテナンスの歴史学の構築に関する基礎的研究」(研究代表者・海野聡(東京大学大学院工学系研究科准教授))を主催とし、公益財団法人陽明文庫(理事長・近衛忠輝、文庫長・名和修)、基盤研究(A)「撰関家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究」(研究代表者・尾上陽介)を共催として、第二回 国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を、京都府立京都学・歴史館小ホール(京都府京都市左京区)において対面で開催した。

第二回目として、今回は午前部「発掘調査の成果・文献史料の見直し・復古建築との比較による、平安期の宮殿(内裏・里内裏・寺院造営の最新研究)」、午後部「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」及び東アジアにおける建築生産史と工匠史料の研究」というテーマを立てた。

当日は、まず、藤井恵介東京大学名誉教授の「開会の挨拶」があり、続いて田島公が午前部の趣旨説明を行い、午前部が開始された。報告者・報告タイトルは次の通りである。西山良平(京都大学名誉教授)「平安宮宮城図と出土木簡・墨書土器」、コメント・南孝雄(京都市埋蔵文化財研究所・調査課長)「平安宮登華殿の発掘調査」、詫間直樹(宮内庁書陵部編修課研究官・前宮内庁京都事務所長)「後三条・白河朝における造営事業の特質―方角禁忌からみた里内裏と御願寺の関係」、満田さおり(宮内庁京都事務所管理課文化財研究室職員)「京都御所にみる復古の建築空間とその使われ方」。

午後部は、I部・II部に分かれ、I部は基盤研究(S)プロジェクトがデジタル撮影を行った内匠寮本「中井家文書」のうち安政度造営関係帳簿(簿冊)類の研究報告を柱とし、「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」の新知見と東アジア建築生産史と工匠史料の展望」をテーマとして、II部は「東アジアにおける建築生産史と工匠史料」と題して、ZOOMを用いた国際シンポジウムを行った。最初に海野聡准教授から趣旨が説明された。先ず、I部の報告者・報告タイトルは次の通りである。新井重行(東京大学史料編纂所准教授)「寛政度内裏造営に関する史料の紹介―承知帳・伺帳を中心に―」、萩原まどか(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程)「安政度造営内裏の東北隅拡張工事とその見積書―御所の築地移築と有栖川宮家・中院家の移転―」、園田彩華(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程)「安政度内裏築地移築における基礎工事」、横山舜(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程)「安政度内裏造営史料にみる築地の架構と穴門について」、齋藤巨佑・三橋宣貴(共に東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程)「安政度内裏造営の瓦・金物にみる工匠の積算特性についての検討」。次にII部の報告者・報告タイトルは次の通りである。兪莉娜(北京大學助理教授・ZOOM参加)「中国の建築生産史・工匠に関する研究

状況」、☆韓志晩（明知大学校副教授・ZOOM参加）「韓国の建築生産史・工匠に関する研究状況」、海野聡「近世日本の建築生産史研究と工匠関係史料の可能性」。報告後、三者を中心に議論が交わされた。

「中井家文書」について報告三件は、藤井名誉教授・海野准教授主催の大学院工学研究科建築学研究室所属の大学院生を中心に二〇一九年十一月より研究会を組織して行ってきた研究成果の一部である。更にZOOMでの兪莉娜・韓志晩の両氏の参加により、中国、韓国と日本の建設関連の歴史資料の国際比較をすることができ、「中井家文書」の史料的な性格をとらえることができたという点からも重要な機会となった。討論終了後、主催者を代表し、京都府立京都学・歴史館の金田章裕館長より「閉会の挨拶」があり、終了した。

新型コロナウイルス感染症の蔓延拡大により、開催が危ぶまれる中、幸いにも、当時は感染者も少なかったため、十分な感染防止の対策をした会場に六一名もの建築史学・日本史学の研究者の参加を得て、対面での国際研究会を開催できた。第二回の国際研究会は、第一回を継承し、研究史上、デジタル画像の「大公開時代」の幕開けと共に新局面を迎えた日本史学と建築史学の協業、文理融合研究の理想型として位置付けられよう。なお、報告内容を反映した報告集を当日会場で配布した。内容は基盤研究(S)の項を参照。但し☆印の報告は未掲載である。なお、前日の二月一七日(金)にエクスカーションとして、午後二時から四時まで、陽明文庫の展覧室において、陽明文庫所蔵の近衛家伝来の建築関係史料(「宮城図」(元応元年八月三日付)、「寝殿造建築部材」・「大手鑑」、『除目次第』初中寛)紙背永治二年正月十九日付「土御門内裏行事所申文」(裏築垣の初見史料)他)を熟覧した。参加者二五名。ご協力いただいた公益財団法人陽明文庫の名和修文庫長・名和知彦事務長に感謝申し上げます。

(田島 公)

研究集会

「人文・社会科学とインフラ化する研究データ」 二〇二一年一〇月二十九日

二〇二一年一〇月二十九日(金曜日)一三時より、今年度の国立大学附置研究所・センター会議第3部会(人文・社会科学系)シンポジウムを開催した。新型コロナウイルス感染症対策のため、報告者・司会など関係者のみが東京大学史料編纂所内の大会議室に集合し、そこから配信するオンライン形式で行った。

今回のシンポジウムでは「人文・社会科学とインフラ化する研究データ」というテーマを設定し、人文・社会科学における「データ」とそのインフラ化についての実践的な取り組みに焦点をあて、それらがもたらす影響や研究を取り巻く条件の変化などの課題について議論するために、現在進行中の日本学術振興会人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業に関係している三名を報告者に招いた。

最初に東京大学の齊藤延人理事・副学長(研究担当)から挨拶があった後、一橋大学経済研究所の田中雅行准教授から「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業における一橋大学の取り組みについて」という題で報告があった。一橋大学社会科学統計情報研究センターでは長期間をカバーする政府統計データや調査票情報等メタデータのデータベース化・英語化が進められており、その公開に至るまでの具体的な取り組みについて紹介された。

次に東京大学社会科学研究所の三輪哲教授から「社会科学におけるデータ共有と二次分析」という題で報告があった。社会科学研究所C S R D AのS Jデータアーカイブの活動状況や、社会科学における研究データの調査票等による収集・処理・データファイルの生成・報告への流れの紹介、既存データによる二次分析研究の動向、データアーカイブのシステム強化への取り組みなどについて具体的に紹介された。

次に東京大学史料編纂所の山田太造准教授から「デジタル化された日本史研究資源のゆくえ」という題で報告があった。人文学研究においてもデータベースの利活用は必須となっており、史料編纂所におけるデータの収集・蓄積・公開の取り組みのほか、歴史史料から得られる人名・地名等の各種データをAIによる分析や機械学習が可能となるように整備することで、データ

駆動型日本史研究基盤の構築を目指す現状について紹介された。

引き続き東京大学史料編纂所の箱石大教授がデイスカッサントとして加わり、報告者三名をパネリストとして討議が行われた。はじめに報告者からそれぞれ補足説明が行なわれた後、シンポジウム参加者からオンラインで寄せられた質問が順次紹介され、社会科学データベースの今後の方向性や、人文系機関との連携、データの取り扱いや利用条件などの問題点について報告者から回答がなされた。

最後に東京大学史料編纂所の本郷恵子所長（本年度第3部会長）から挨拶があり、一五時に閉会となった。参加者は一六一名であった。

（尾上陽介）

「新たな画像公開方法とデジタル連携」

二〇二一年二月三日

二〇二一年二月三日、公開研究会「新たな画像公開方法とデジタル連携」を、ウェブ会議システムZoomを用いたオンラインにより開催した（主催：東京大学史料編纂所画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センター）。これは、本所ホームページのデジタルギャラリーにおいて二〇二一年二月三日から公開を予定している正保琉球国絵図デジタルアーカイブ・倭寇図巻デジタルアーカイブ、および近日中の公開を予定している荘園絵図デジタルアーカイブについて、それぞれの機能や構築の目的を紹介するとともに、今後の利活用の方法などの意見交換を行なう場として開催したものである。いずれのアーカイブも、単に画像の公開をするのみでなく、データの構造化によってテキストや地理情報との連携を実現しており、さらに、他機関所蔵の絵図など別の画像データとの並列表示が可能となるなど、本所での画像公開方法としてはいくつもの新しい機能を備えたものとなっている。

集会では、まず、須田牧子氏（本所准教授）および中村寛氏（本所助教）が、「史料編纂所の新たな画像公開方法について―倭寇図巻デジタルアーカイブの構築を例として―」という題目で、倭寇図巻についての研究の現状と、その成果を反映した同アーカイブ構築の狙いについて説明をした。つづいて黒嶋敏（本所准教授）より、「正保琉球国絵図デジタルアーカイブにつ

いて」という題目で、同アーカイブの機能などを紹介した。最後に井上聡氏（本所准教授）から「荘園絵図アーカイブの計画と方向性」という題目で、現在構築を進め居る荘園絵図アーカイブの概要と課題が提示された。

これを受け、関野樹氏（国際日本文化研究センター教授）および高田祐一氏（奈良文化財研究所研究員）の二名よりコメントを頂戴した。関野氏からは、従来型の「見る」データから、「使う」データへの転換が進んでいる状況の説明があり、そこに琉球国絵図・倭寇図巻のアーカイブが位置づけられるとの指摘があった。また高田氏からは、こうしたデジタルコンテンツの活用という観点から、とくに学校教育での利用を探る取り組みや、歴史地理情報の可能性について指摘があった。

今回の集会は新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐためにオンライン開催となったが、当日は国内各地だけでなく、外国からの五名を含む、全七九名の参加を得た。

なお、この集会の開催にあたっては、本所特定共同研究「東アジアの合戦図の比較研究」、科学研究費補助金・基盤研究(B)「南西諸島における海上交通の復元的研究―帆船の時代」の「歴史航海図」―、鹿島学術振興財団研究助成「正保琉球国絵図の研究資源化とデジタルアーカイブの構築」の共催を得ているほか、デジタルアーカイブは、東京大学FSI事業「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」をはじめとする各種研究の成果であることを付記しておく。

（黒嶋 敏）

「日本関係海外史料蒐集事業の足跡」

二〇二二年一月二四日

本講演会は、日本学士院UAI（国際学士院連合Union Academique International）関連事業「在外未刊行日本関係史料蒐集事業」一〇〇周年、日蘭交渉史研究会七〇周年を記念し、日本学士院から佐藤彰一氏、史料編纂所から保谷徹氏、松井洋子氏を講師に迎え、UAI関連事業一〇〇年の歩みを振り返った。コロナ感染拡大のためZoomによるオンライン開催となったが、八二名の参加者に恵まれた。

まず、佐藤氏による講演「第一次大戦戦後処理とU A Iの創設」が行われ、「在外未刊行日本関係史料蒐集事業」の歴史的背景として、U A I創設に至る経緯が解説された。一九世紀末からヨーロッパを中心に国際的学術組織が次々と誕生したが、佐藤氏は、U A Iに先行する万国学士院連合(International Association of Academies)や碑文・美文アカデミー(Academie des Inscriptions et Belles-Lettres)の事例に触れながら、ここでは主要国の利害対立や理系・文系の不均衡など様々な問題が生じていたことを指摘した。そして一九一九年のU A I創設は、フランス主導に対する不満がくすぶりながらも、ドイツ・オーストリア排斥思想の抑制、人文系学者のみによる組織など、旧来の課題をある程度克服したものであったと評価した。

U A Iには設立当初から帝国学士院(現日本学士院)が参加しており、一九二一年総会において「日欧交通史料蒐集事業」を提案し、翌一九二二年、U A I第七プロジェクト「在外未刊行日本関係史料」として採択された。保谷氏の講演「在外未刊行日本関係史料蒐集事業のあゆみ」は、同事業に対する日本側の取り組みに光を当てた。興味深い事実として、早くも一八九〇年代に、帝国大学歴史学教師リースが長崎オランダ商館史料を集めて蒐集事業に先鞭をつけており、上記のU A Iプロジェクトの推進役を担った帝国大学文科大学史料編纂所(現史料編纂所)三上参次は、かつて弟子として、そうしたリースの仕事に接していたことが指摘された。こうした世代を越えた継承は第二次大戦による中断後も続き、一九五四年以降は日本学士院から正式に委託を受けた史料編纂所が事業を進めてきた。保谷氏は、その間日欧交通史料だけでなく、ロシアを含む東アジア史料の調査・蒐集も広く実施してきたことを報告した。

「在外未刊行日本関係史料蒐集事業」において当初より重要な位置を占めたのは、オランダ東インド会社文書を中心とするオランダ語史料であった。史料編纂所における一七世紀オランダ商館長日記の編纂の他、一九五二年には日蘭交渉史研究会が発足し、日本学士院の支援を得て一九世紀オランダ商館長日記の翻訳を続けてきた。松井氏は「蒐集マイクロフィルムの目録化とその意義―オランダ語史料を中心に―」と題し、これまで長きにわたり進めてきた蒐集オランダ語史料の目録作成事業について報告を行った。とりわけ

重要な成果として、バタヴィア(現ジャカルタ)総督府から各地の出先機関に送付された文書を収めた「バタヴィア発信書翰控簿」の目録データベースが紹介され、受信側の「日本商館文書」目録と対照することにより、日本商館からオランダ東インド会社の世界的通信網の一端を理解することが可能になりつつある現状が示された。

その後質疑応答が行われ、その中で佐藤氏は、U A I創設時、ヨーロッパ参加国の間で日本の積極的な参加に期待する声小さくなかったことを指摘し、そうした要望は今でも非常に強いと述べた。その一方、閉会の辞において、主催者を代表して松方冬子が、史料の電子化、研究関心の広がり、発信手段の多様化など、昨今の研究環境の著しい変化に言及し、「在外未刊行日本関係史料蒐集事業」のあり方もそれに応じて変えてゆく必要があるのではないかと提案した。本講演会は、一世紀にわたるU A I関連事業の足跡を辿りながら、人文系学術の国際化について継続と変化の両面から考える有意義な機会となった。

東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究(海外史料分野)「モンズーン文書・イエズス会日本書翰・V O C文書・E I C文書の分野横断的研究」主催。東京大学史料編纂所・日本学士院・日蘭交渉史研究会と共催。

(大東敬典)

外国人研究員研究成果報告

「平安時代と鎌倉時代の食事の歴史」

エミリー・ウォレン
南カリフォルニア大学
二〇一九年九月一日―二〇二一年八月三十一日

研究の課題は、平安時代と鎌倉時代の食物史であり、博士論文のためにこの時代の宮廷の食文化と税制を研究した。

この時代、諸国や各地の御厨から御膳の食材を宮廷に調達するための制度

が存在していた。諸国には、特定の食材・布や労働などを税物として納めることが義務付けられていた。このような税物としての食材に加え、天皇の御膳を調達するための御厨が設置され、そこからも食材が集められた。この食材が神事・仏事・節会に関する食材と物品となり、そして年中行事の従事者への支給物にもなった。食材が畑・海・水田から宮廷の食卓に届くまでの調達制度が、『延喜式』に詳細に見られる。この制度を研究するために食材調達・調理に関する式を検討した。その結果、「主計式」の抜粋、「大膳職」「大炊寮」「造酒司」の全部について英訳の原稿ができあがり、「内膳式」の英訳が二〇二一年一月二日に出版される予定である。

この食材調達の制度から、天皇の毎日の食事と儀式の食事が諸国の生産と密接な関係があることがわかった。しかし古代から中世にかけて、この『延喜式』に見られる古代の制度は衰退し変化した。宮廷食文化に関してこの変化を調べるために、中世の儀式書と日記の研究が必要である。天皇にとって毎日そして儀式の食事はどういうものかに焦点を当てると、儀式書は特に役に立つであろう。まず、高橋慎一朗先生のご指導の下で、中世の料理書『厨事類記』を読むことができ、英訳の原稿を完成させた。延喜式を除き日本最古の食べ物の作り方の説明が厨事類記に書いてあることから、食文化史にとって重要な史料である。食事習俗の理解のためには、日記の読解が不可欠である。藤原頼長の『台記』には宴会の献立が詳しく書いてあり、撰閲家の食文化について検討することができた。大臣大饗や五十日・百日の祝賀などに公卿の食文化が見られる。史料編纂所の先生方のご指導により、二つの中世の儀式書（日中行事、侍中群要の抜粋）の書き下しの原稿もでき、英訳も進んでいる。

これらの史料の英訳は、英語圏における日本古代・中世の食文化研究および歴史研究の歩み、意義を理解する上で極めて有益と思われる。史料の英訳により、前近代の食文化と日本史研究の関心が高まることを期待している。

史料展示

オンライン木展

〔日時〕二〇二二年一月三日、午後三時半～五時

新型コロナウイルスの感染拡大状況にかんがみ、木展もオンラインによる史料展示・解説のかたちで開催した。当日は配布資料にもとづき、史料画像を見せながら左記史料担当の保谷徹教授が解説を加えた。

〔対象史料〕紀州の豪商菊池（垣内） 本家・新家史料

画像史料解析センターの古写真研究プロジェクトでは、二〇一五年三月、大田区在住の菊池武昭氏から提供された菊池新家史料の調査・整理を開始した（本所への寄贈は二〇一六年）。また、菊池本家史料については一九八五年に故・菊池薫氏（本所元教授菊池武雄氏御母堂）から寄贈を受けていたが、二〇二一年、本所元職員の菊池明石氏（武雄先生夫人）から、追加の史料寄贈があった。この本家（追加寄贈分）と新家の史料について、菊池家の地元にあたる和歌山県湯浅町と協議が進められ、本所分と湯浅町分に引き分けて保存・活用することになった。その結果、菊池新家史料については、本所分二九八件三四四四点・写真史料五六〇件二六四二点／湯浅分八九三件三二二八点、菊池本家の追加寄贈分については、本所分七二件八一点／湯浅町分二二五件五四四四点となった。二〇二二年一月末、湯浅町教育委員会所蔵分の史料を寄託先である和歌山県立博物館へ移送している（保存箱五五、長持二、木箱一二ほか）。今回のオンライン木展は、これに先立って史料群の概要を紹介する趣旨で実施された。

〔展示・解説の主な内容〕

オンライン展示では、1調査・整理の経緯、2菊池家歴代とその史料群について解説し、3両菊池家史料の内容と特徴を紹介した。南朝の武将菊池氏の末裔が、一六世紀半ばに紀州栖原に入り、垣内氏を名乗った（幕末期に本姓菊池に戻す）。一族は房総に進出して鯛網漁と干鯛生産をおこない、一七一九年、江戸に干鯛問屋須原屋三九郎店（本家）を開いた。次いで一七八二年、砂糖問屋河内屋孫左衛門店（新家）を開き、両者は本店・支店の関係で豪商菊池家を支える。また、幕末に出た新家の菊池海荘は、紀州藩地士として藩や朝廷に海防策を上申し、農兵取立にあたっている。海荘は全国的にも著名な漢詩人であり、詳細な日記（二二五冊）・風説留（計五〇冊以上）を

東京大学史料編纂所研究成果報告一覽

二〇二一年度

番号	書名	研究費名	責任者
1	宮城県石巻市東福田板碑群調査報告書―ひかり拓本技術の開発と応用―	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	菊地大樹
2	明清中国関係文書の比較研究―台湾所在史料を中心に―	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	黒嶋敏
3	中川文書(赤名文書)	科学研究費補助金基盤研究(B)	村井祐樹
4	近江水口加藤子爵家文書―豊臣政権編―	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	村井祐樹
5	観世音寺公験案の集成と研究	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	遠藤基郎
6	一柳家文書―豊臣政権編―	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	村井祐樹
7	続 賀茂別雷神社の所領と氏人	共同利用・共同研究拠点(特定共同研究)	金子拓
8	藤波家旧蔵史料の調査・研究	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	遠藤珠紀
9	史料調査ハンドブック 古文書を科学する 料紙分析はじめの一歩	科学研究費補助金基盤研究(A)	渋谷綾子

残している。このうち「海莊手記」や「風雲雜記」等については、二〇一一年に湯浅町へ寄贈されており、一月末・三月末の二度にわたって撮影調査を実施した(詳細は出張報告を参照されたい)。このほか、多くの書画や各種の拝領品、海莊木像(九鬼虚白作)、大砲模型など、関係史料を画像で紹介した。最後に、菊池新家のコレクションに含まれる紀州徳川家由来の品々について触れた。これは茂承・頼倫・頼貞の三代にわたる自筆の書画や古写真類であり、戦前・戦後にわたって徳川久子(頼倫夫人)邸の家扶・事務主任をつとめた菊池武芳(新家)へ下賜されたものと考えられる。

〔覚書の締結と史料画像公開の予定〕

二〇二二年一月、この間に撮影した両菊池家の史料画像の取り扱いについて、湯浅町教育委員会と覚書を締結し、Hi-CAT Plus からウェブ公開するものとしたことを付言しておきたい。本所分の撮影データについてもHi-CAT から順次ウェブ公開する予定である(ただし写真史料については、当面は所内・閲覧室公開としたい)。以上。

今回のオンライン展示開催については、画像史料解析センターが担当した。

18	17	16	15	14	13	12	11	10
近世統一政権の成立と天下普請の展開	「院号定部類記」に関する研究	中世東大寺出世後見・俱舎三十講関係記録史料	金鶏会館連続公開講座「三条西家本『除目書・同紙背文書』を読む―『明治大学図書館所蔵三条西家本除目書』影印本の刊行を記念して―」講演集	平安時代典籍・記録の史料学的再検討	小川八幡神社大般若経 調査概報	壽岳文章和紙コレクション調査報告書	陽明文庫講座図録3	国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集(2)
科学研究費補助金基盤研究(B)	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	科学研究費補助金基盤研究(A)	研究拠点創設プロジェクト、科学研究費補助金基盤研究(S)	共同利用・共同研究拠点(特定共同研究)	共同利用・共同研究拠点(特定共同研究)	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	科学研究費補助金基盤研究(S)・同(A)	研究拠点創設プロジェクト、科学研究費補助金基盤研究(S)
及川 亘	小塩 慶	遠藤基郎	田島 公	山口英男	山口英男	及川 亘	田島 公	田島 公